
今宵月影明澄ナリ

北川款一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今宵月影明澄ナリ

【Nコード】

N7536V

【作者名】

北川 款一

【あらすじ】

東京湾のほぼ中央に建設された人工島・八尋は、不自然ともいえるほどの極端な繁栄を謳歌する一方で、奇妙な宗教団体の暗躍に悩まされていた。八尋市きつての進学校・虹ヶ丘高校の映画部に所属する伊勢崎エイジは、親友の豹変をきっかけに、島の暗部に関わっていくことになる……。

廃墟然としたビルの狭間に、黄昏のひかりが量を拡げている。傾いた信号機は、瓦礫の散らばるアスファルトのうえに長い影を横たえていた。見渡すかぎり荒涼とした風景のなかに、オベリスクを連想させる美しい黒御影の時計台が、超然と佇んでいる。ゴシック様式の盤の、短針と長針が、おもむろにローマ数字を遡り始めると、それにあわせて夕陽は空の頂めがけて驀進し、やがて市街を夏らしい蒼然とした光線で充たした。ふたつの針が弾みをつけたように加速すると、太陽はぐんぐん流れ、ついに黎明の曙光を東のかたにかき集めて、大気を紫に翳らせる。

かれは綻んだ花壇の縁石に革靴をかけ、燻し銀さながらの鱗雲をいちめんに散らせて燦然としたり、アンティーク風の外灯のかなたに色褪せていたりする空を仰いだ。明滅するそのパノラマは変遷を極めた。叢雲を巻いて漂流する白晝の月、面紗を下ろしたような薄雲、糠雨の上空に架かる大きな虹、風にうごめく濃淡の霧——刻々とすがたを変え、かれの瞳を幻惑する。そうしてたくさんの scene が、かれの胸裏を夢のように巡った。かれの頬は涙で濡れていた。

朱に焼けた成層圏から浮かびあがった銀河は天球をプラネタリウムのように渡つてゆく。その澄んだきらめきも、地上に人工のひかりが少しずつ甦るにつれて、失われていった。湿った土の匂いがほのかに立ち上り、かれが辺りを見渡したとき、風景は変貌を遂げていた。そこは幼少の頃から慣れ親しんだ、JR八尋駅前のターミナルで、まわりに乱立する高層ビルは、巨大な灯籠のようにあでやかに輝き、星辰を霞ませていた。

街路樹にしたたる淡い緑が、ゆっくりと蕾に収斂していき、やがて枝のなかにひとつ残らず埋もれてしまうと、天を厚く蔽った鼠色の雲から粉雪がちらつき始め、みるみるうちに辺りを白く烟らせた。

そうしてかれは荒れる朔風のむこうに目を凝らし、動きを緩やかにした針を見出した。七彩の夜光が悪天を踊り、浮かれ騒ぎに倦み果てたとばかりに時計盤が静止すると、かれはブレザーの袖でそつと目許をぬぐい、忽然として駅前にあふれた冬支度の人ごみのなかへ這入っていった。

雲の裂け目が鈍くひかり、そこから幽かな日影が射している。その微光がゆきわたった大都会の峡谷を、風花が精霊のように飛んでいた。

*

バスのクラクション、隣に座る男のイヤホンから漏れてくるダンス・ミュージック、街をどこまでも埋めつくすごみごみした雑踏――伊勢崎エイジには目下、うつとうしいものが色々あったが、そのなかでも最たるものは三〇分おきに携帯を鳴らすバイトの催促のメールだった。店長には、面接のとき、土日は出ないと言っている。黙殺しようかとも考えたが、居酒屋は普段から人手が足りないのに土曜の夜はサラリーマンやOLが押しよせて壮絶なことになるので、バイト先の面々を思い浮かべると、なんとなく気がひけた。店長も、時給を百円上乘せすると云うので、意を決して厚手のフーコートの襟に首をうずめ、ニットキャップを眉まで被って、雪のちらつく寒天のしたへ出、自宅近くからバスに乗り込んだのである。

北風が裸の街路樹を揺すり、人々の襟巻きを野暮ったくする。バスの窓から眺める街は、鈍色の空のせいで、重苦しく淀んで見えた。華やかな都会風の装飾のしたを往く人々は、なんとなく疲れたような、憂鬱そうな顔をしている。その表情を、エイジはこの街の実相だと思っている。居酒屋のなかを駆けずり回っているときになんとなく手を止め、客たちを眺めていると、浮かれ騒ぎのなかでただ一人、あんな表情で頬杖をつき、いまにも泣き出しそうな眼をグラスに注ぐ背広のひとに気づき、妙に引きつけられて観察してしまうことがある。そうして、日陰に名も知らない花をみつけたように、胸がしめつけられた。

この街――八尋市は、東京湾のほぼ中央に建設された人工島で、行政特区に指定され、その経済力は東京二十三区と肩を並べるほどだった。日本を長期にわたって苦しめている不況が、ここではまるで嘘のようで、そこかしこに再開発の高波が打ち寄せ、一時代前の建物はあつという間に重機で押し潰され、ぴかぴかしたモダンな建物に取って代わられる。JR八尋駅のまえのビル群も、まるでバベ

ルの塔のように月毎に高くなっていく——そんな印象を、市民の誰もが抱いていた。

その神々しい経済成長の光には、当然のように影が従う。エイジは、その影に虐げられた面貌を、都会的できらびやかな賑わいのうちに見出して、その対比に胸を寒くする。そうして、かれらを痛々しく思う一方で親しみも抱いた。もし、なにかの巡り会わせで胸襟をひらいて語り合うことがあったら、すっかり打ち解けてしまうかもしれない。エイジは転じて、若者らしい陽気さに満ちた周囲を、白々しい感じをもって眺めていた。学校にもバイト先にも漠然とつきまとう居心地の悪さは、そこから来ているらしいと、ささやかな苦笑とともに思うことがある。少なくともエイジは、馬鹿騒ぎよりは静かな孤独を愛した。ただ、孤独に耽溺することも馬鹿騒ぎとおなじくらい芝居がかって感じられるから、その方向へ本格的に踏み込んでいく気にもなれなかった。そうして仕方なしに、街を皮肉の眼差しで眺めつづけている。

日没が近づくにつれ、空の占有していた光がゆっくりと地上に降りてきて、建物や外灯、イルミネーションに宿り、まばゆく煌めき始める。エイジはこれらの絢爛な輝きを眺めていると、生物の図鑑にグロテスクな姿を晒している寄生虫の数々を連想する。街のあらゆる照明は、ひとの生気を吸いあげて輝いているように思えるのである。そうして、吸い尽くされた人間は当然のように死ぬ。——八尋市は、ほかの自治体と比較して、犯罪による死亡者の数が群を抜いていた。誰が誰を殺したの詳細を、エイジはいちいち知っている訳ではなかったが、それでも、ひとはひとを理由もなく殺すものではないと信じている。この街にうごめく？寄生虫？に生気を吸い取られた人間が、ほかの人間から生気を補充しようとして、殺人を犯す——あらゆるエピソードには、そういう側面があるのかもしれない。空想はともかく、エイジはこの街の人たちが、なにかいのちをじかに支える重要なものを求めて悶えているような、漠とした雰囲気を感じることが多かった。事実、テレビ報道によると、この街は

とくに去年あたりから、殺人事件の件数だけでなく、自殺者数や行方不明者数なども、絶望的な勢いで増加しているという。

寄生虫説は思索における変数のようなものに過ぎないが、この街の特殊性が人々の精神に何らかの負荷を与えていることに間違いはないはずで、その影響はローカルのカルト・ブームに端的に現われているとエイジは感じていた。ときどき、白いパーカーを着てフードをかぶり、殺伐とした殴り書きのプラカードを掲げて、街を練り歩く集団を見かけることがある。白竜団というカルト教団らしいが、どういう教義をもちなにを目指している組織なのか、エイジは知らない。ただ、拾ったチラシには、「生まれながらにして唾棄すべき存在である人間はやがて必ず滅びる、目覚めよ」というような、カルトならどこでも言いそうなことが並べてあった。冷やかに集会だかテンプルだかへ行ってみる気が起こらないでもなかったが、街を眺めて、人間の原罪というものに思いを馳せずにはいられないエイジは、なんとなく薄ら寒いものを感じて、やめにしたのである。

以来、逆さの正三角形を円で囲んだ教団の紋章の落書きを路地裏や公園の遊具に見つけたり、冗談のような文句を書き連ねた垂れ幕を目にしたりするたびに、顔をしかめるようになった。かれらの、カルトに特有の濁った目つきを見ると、エイジは、この連中もかつては親近感を持ち得るような、影の侵食を受けた哀れむべき人間だったのだろうかと考えて、ぞっとする。つまり、かれらは明日の自分かもしれないのだった。

バスは駅前のターミナルに入っていく、そこで多くの乗客を吐き出すと、車内は閑散となった。入れ違いに上ってきたひとのなかに、白いパーカーを着た男が混じっている。男はちやうど、エイジの正面になるあたりのシートにゆったりと坐り、それから脚を組んだ。バスが動き出し、街の光が窓のむこうを大きく旋回する。

そのとき、フードの影が落ちてよく見えなかった男の貌が、差し込む外灯の光に浮かび上がった。男はまっすぐにエイジを凝視していた。エイジは息を飲んだ。

見つめあう二人の間を、デパートの袋を提げた主婦風の女性や、背広の若い男性が横ぎった。そうして再び現われたフードの男は、やはりエイジを見ていた。前屈みになって、肘を膝にのせている。近眼のひとのように陰しくした眼のなかで、瞳が爛々としていた。鼻筋は通っていて、唇が薄く、頬と咽喉のあたりは引き締まっている。浅黒く、精悍な印象があつた。それはエイジが朝夕歯を磨くとき鏡のなかに見る、自分の顔そのものだった。

男は、侮蔑するような笑みを浮かべていた。

——ドッペルゲンガー。

きつと、そう呼ばれているものだろうと、エイジは考えた。この像を目にするのは、今が初めてではなかった。学校から帰宅して部屋に入ると、自分と酷似した男がベッドに寝そべって本を読んでいたことがある。服を買いにいったとき、更衣室からいきなり現われたことがある。デパートのエスカレーターに乗っていてすれ違ったことがある。気味が悪くなつてネットで調べてみたところ、「ドッペルゲンガーを見たものは死ぬ」という民間伝承があり……女帝エカテリーナ、詩人シェリー、芥川龍之介やエイブラハム・リンカーン等がこれを見た……」などとあつた。そしてエイジは実際に、ドッペルゲンガーが登場する著名な短編「歯車」の大半が、芥川の遺稿だったことを知った。芥川は昭和二年、服毒自殺で生涯を終えている。

エイジは、たまたま自分とよく似た男が暇をもてあまして悪戯をしているのだとは、考えていなかった。それならばいつそ怪奇現象と捉えたほうがまだ筋が通る。恐らく、脳や精神の一部が正常に機能しないために起こった、ごく主観的な現象なのだろう。あまり続くようなら、医者に診てもらおう——そんなことを考えながら、視線を窓のそとに転じたとき、バスに強くブレーキがかかり、エイジは大きく左側にのめつた。上体を戻して、ふっと顔をあげると、ドッペルゲンガーは跡形もなく消えていた。思わず腰を浮かして車内を見回してみたが、それらしい影を見つけることはできなかった。

居酒屋の店長は、その頃になると客足が落ちつくということもあって、午後十時をまわると高校生のアルバイトを皆あがらせる。エイジが社員にお先ですと声をかけて着替えを始めると、おなじ高校の天草零が、皆で遊びにいくからおまえも来いという。寒いから嫌だと一度は断ったが、しつこく誘われて結局顔を出すことになった。十人ちかい高校生の男女は、会社帰りの社会人を装って焼肉屋へ這入り、臆面もなく酒を注文する。うるさいことを言わない店の情報はもちろん伝わっているし、捕まったらそのときはそのときだという適當のノリもある。そのうち仲間うちに恋が芽生えてそれを周囲が冷やかし、バイトの愚痴と、それをネタにした冗談が飛び交い、いつものように馬鹿騒ぎが始まる。エイジは、お前ら飽きねえなという顔をしてその模様を眺めていた。そうしてさっさと酔っ払ってしまった。嫌々連れてこられたうえ、悪酔いしたり潰れたりした者の世話係にされたのではたまらない。

終電がなくなるからというので女子たちを駅まで送っていき、それから野郎だけでカラオケに行こうという話になった。エイジは一曲付き合いで歌ったあと、確かに被ってきたはずのニット帽が頭にのっていないことに気付いた。それをまわりに尋ねると、天草は、「オメ、なに言っただよ」と、馬鹿笑いを始めた。「さっき、ケンタッキーおじさんに、『あんた、このクソ寒いのに大変だな、俺のでよかったら使って』とかしみじみ言いながら被せてたじゃねーかよ。忘れたのかよ」

言われてみれば、確かにそんな憶えがあった。泥酔したエイジには、老紳士の微笑が、商売気からくる愛想とはどうしても思えず、十二月の夜風のなかに佇むその姿が、いかにも健気に見えたのだった。ケンタッキーは、カラオケ屋の入っている雑居ビルの隣にあった。

「……取ってくる」

エイジはカウンターを過ぎると、手摺りたいに階段を下りて、エントランスに出た。そうして硝子張りのむこうに、黒のニット帽を被ったケンタッキーおじさんが顔を光沢させて笑っているのを見つけて、苦笑を浮かべた。帽子を取って戻ってきて、足許から突き上げるように重低音が響いてくるのに初めて気がついた。地下へ続く打放しの階段の脇に、「Club Copacabana」というステンドレスのプレートが掛けてある。なんとなく階段の奥をのぞきこむと、緑の誘導灯のしたに、ベージュに塗られた重そうな扉があった。人が出入りすると、地を這うようなベース音と、ざわつく声が零れてくる。——エイジは郵便受けの脇の自販機でホット・ココアを買い、長椅子に坐ってすすった。そうして、黒人風のファッションに身を包んだ大人たちが目の前を行き来するのを、ぼんやり眺めた。

酔いが落ちつき、火照っていた身体が肌寒く感じられるようになると、エイジはココアの残りを喉に流し込んで、たちあがった。そのとき、女子トイレから出てきた、黒のパーティ・ドレスの二人連れが、エイジに声をかけてきた。

「あつ、ケンタッキーおじさんに帽子を被せてた子だ」

エイジはばつが悪くなり、見てたんですか、と俯き気味に言いながら、空缶をリサイクルの箱に押し込んだ。そうして二人の脇を抜けて、カラオケ屋に戻ろうとした。

「ちょっとあたしたちと話していかない？」

金髪の、色白のほうが、鼻にかかった声を出した。女はヒールの高いミュールを履き、ワンピースの裾は、すこし屈んだら後ろから下着が見えそうになるくらい短かった。胸元は大きく開き、クロスのネックレスのしたに水風船のような膨らみを作っている。

女が傍に立つと、アルコールと香水の混じった、いい匂いが漂った。

もう一人のほうが、エイジの腕を引いて、いいからと長椅子に坐

らせる。艶やかな黒髪をボリウムたつぷりに盛り、肌は日サロで焼いたように褐色に染まっていた。長い睫のあいだから、緑のカラーコンタクトを入れた瞳が潤んだようになってじっとエイジを見つめている。そうして、ビーズをあしらった派手なネイルの手を、ふわりとエイジの膝に乗せた。フェイクか本物かは分からないが、網タイツのしたに、ピンクの蝶が翅を広げている。

女はゆったりと脚を組んで、蝶を半分隠し、

「ちよつと、どこ見てるの、もう」と、エイジの顎をもちあげて、

「一見クールそうだけど、実はムツツリなのね」

金髪のほうが、「いじめるのはよしなよ、可哀想じゃん」と、笑い声をたてる。

「その格好で、寒くないんスカ」

エイジは目のやり場に困って、外を眺めながら言った。紙くずが風に転げ、レストランの黄色い幟が淋しげに揺れている。

「今まであそこで踊ってたから」と、黒髪のほうが言った。「暑いくらい」

金髪が、ハンドバックに指を差し入れて、車のキーを取り出す。

「でも、なんか飽きちゃった。これからミーコン家で、お酒でも飲もうかって話してたんだけど、あんたも来る？ あした日曜だし、お泊まりとか平気でしょ？」

「それとも、無断外泊したら、ママに怒られちゃう？」黒髪がからかうように言った。

太腿が、エイジの腰のあたりに押し付けられている。エイジは、女たちの匂いに咽そうになりながら、

「マジいいです……」

立ち上がった。

「お姉さんたち、とって食べたりしないから、怖がらなくていいのよ」

二人はげらげらと笑いだし、ほとんど無理やりにエイジの腕をひいて雑居ビルを出た。

深夜に差し掛かって、さっきまで通りに溢れていると思っていたネオンの輝きは、いつのまにか淡く頼りないものになっていた。身を切るような夜風が女たちの髪を揺すり、店舗のシャッターを淋しく鳴らしている。電線のむこうで、薄い雲が月を蔽ってぼんやりと光っていた。

雑居ビルの脇のごみごみした路地をすこし行くと、高い建物の谷間から、狭い駐車場が現れた。数台の車が窮屈そうに並ぶなかを、女たちは声高に喋りあいながら歩いている。エイジは二人に挟まれて、その声が静かな裏通りに染みとおっていく様を、心細く聞いていた。

「ちよつと待つててね」

金髪のほうが、エイジから離れてダイハツの運転席へまわり、鍵を差し込もうとする。エイジは黒髪の女に促されるまま助手席の傍に立った。

なんとなくビルを見上げると、ちよつと流れる雲のあいだから肉厚の月がのぞき、砂利敷きのうえに藍色の淡い光をすべらせていった。金髪は鍵をあけるのに手間取っている。どうしたのと、黒髪が短いボンネットをまわっていった。エイジは二人のどことなく慌てるような気配に不安を覚えて、ダイハツのむこうへ視線を投げると、女たちが、この世のものとは思えない異様な姿に変わっているのに気がついた。

骨張った細い手足は黒っぽい鱗のようなもので覆われ、顔はふくろうを連想させる不気味なかたちをしていた。こめかみの辺りから二本の掬れた角が生えている。口からは尖った牙が幾つも食み出していた。

？女だったもの？は、エイジに赤く輝く双眸をむけて、

「あら、見られちゃった？」と、あけすけに言った。

エイジは悲鳴をあげたくなるのを押し殺し、路地のほうへゆつくりと後ずさると、全力で駆けだした。——幸い、異形たちが追いかけてくる気配はなかった。

冬の陰気な西日が、映画研究部の部室を赤く染めている。エイジが鞆と部室の鍵を、机のうえに放り出すと、うつすらと埃がたち、斜めに射すひかりのなかで銀粉さながらに輝いた。

部室は、都立虹ヶ丘高校の旧校舎の二階にある。旧校舎は築三十年をかぞえ、建替えの計画がもちあがっている。それに伴って、映画研究部は実習棟に引き移らなければならなかったが、生憎、むこうには空きがなかった。映画研究部は、目だった実績がなく、部員の数も充分でなかったこともあり、この機に廃部になるのではないかという話が、現実味を帯びてきていた。

それに拍車をかけるように、部員たちを引っ張ってきた部長の大友が、あまり学校に來なくなつて、映画研究部は事実上、空中分解の状態にあつた。エイジは、大友に誘われて映画部に入った。他の数少ない部員のほとんどもそうである。自然と部室に脚を運ぶものがいなくなり、机に埃が積もるようになった。

エイジは空気を入れ替えようと、冷たく透きとおつた高気圧にむかつて窓をあけた。そうして流れこんでくる寒気にコートの襟を立てながら、参考資料とマジックで書かれた箱を開いた。なかは、名画のDVDが詰まっている。ショーシャンクの空、市民ケーン、嵐が丘、死亡遊戯……すべて、大友が部に寄贈したものだ。エイジはときどき、ひとりきりで部室にやってきて、これらの映画を鑑賞して過す。冬に差し掛かるまでは、となりに大友が座することもあつた。大友は熱っぽく映画を語る。エイジは黙ってそれを聞く。そうして旧時代のテレビの画面には、ジョン・ウェインやチャールズ・ブロンソンが大きく映っている。

エイジはシンシナティ・キッドを取り上げると、プレイヤーのトレイに載せ、椅子にもたれて、机のうえに両足を投げだした。目を閉じて、映画音楽に耳を澄ませながら、隣に大友がいると想像して

みる。

どの学校にもひとりくらいは、「完璧」という表現に値する奴がいる——それはエイジの持論だったが、実例を示さなければいけないとすれば、真先に大友の名を挙げるつもりでいた。勉強やスポーツは当然のように出来る。優しい雰囲気と怜悧そうな目元を備えた美少年で、漫画のキャラクターのようにモテるのに、女子に対して偉ぶったり皮肉の態度をとることが決してない。生来の賢さと素直さがあるから、話をしていて面白く、嫌な気分がしないから、男子にも根強い人気がある。それでいて、自分が正しいと思えば、全生徒に怖れられる生活指導の体育教師が相手であっても、絶対に引かない。そんな風であるから先生たちからも一目置かれている。

エイジはこの大友と、一年のとき、同じクラスだった。初めのうち、エイジは大友に対して、隙のない芸術品に親しみを持てないのと似た感覚を抱いていた。もっと言えば、自分とは人種が違うように思えた。それで、大友を敬遠していたのである。ところが、ある日、大友がイジメを受けている生徒と、イジメをする生徒たちの間に入って、粘り強く和解を働きかけているのを見て、少しずつ考えが変わってきた。大友は、イジメをする生徒たちを批難するようなことは一言も言わないし、イジメを受けた生徒の肩を持って一緒に敵対するようなこともしないが、ひたすら両者のあいだをとりもつて、冗談を言い、とげとげしい雰囲気と和らげ、イジメを受ける生徒を励まし、イジメをする生徒たちに、くだらないことをやっている、と、自ずと理解させるようにしむけていった。そうして、とうとうイジメを解消してしまった。もともと、まわりはそうは思わないだろう。イジメが自然に消滅したように感じたに違いない。けれどもエイジは、大友の執拗な努力がなかったら、そうはなからなかっただろうと思っている。以来、エイジの大友を見る目が変わった。

エイジは微妙な人間関係を捌くのが得意ではなかったから、イジメ問題に取り組む大友を全面的にサポートすることはできなかったが、大友の脚を引っ張る怖れのないときにはすすんで協力した。そ

のことは、大友にも伝わったようで、かれから話しかけてくること
が多くなった。一緒に下校したり、互いの部屋を訪ねあつたりして、
他愛ない冗談を言い合うまで親しくなると、エイジは（完全な人間
なんていないと言いつけど、あれは嘘だ……）とはつきりと思うよう
になった。（だって、ここにいます）

だから、大友から、

「部員が足りなくて困ってるんだよ。頼むエイジ、映画部に入つて
くれ……」

と頼まれたときには、一も二もなく入部届けを書いて職員室へ持
って行ったのである。

その大友が、学校にほとんど顔を見せなくなった。エイジは心配
して電話をかけ、メールを送り、たまらず自宅を訪ねた。けれども
大友から一言も返事を貰えずにいた。あの大友のことである、何か
あつたに決まっている——親友と思っていたかれに相談しても貰え
ない自分が情けなかった。

エイジは赤い目を瞬かせて、映画を見続けた。高潔なシンシナテ
イ・キッドは一人で戦っている。自分に有利になるよういかさまを
仕組む友人にさえ、激しく食ってかかる。賭博師である以上、ひと
を頼る訳にはいかないのも分かるが、少しぐらい力を借りたつてい
いんじゃないか。あんた、友達の気持を考えたことがあるのか——
見るに堪えず、舌打ちをして再生を止めた。シンシナティ・キッド
は最後に大負けするのである。

窓を閉めようとして、外がすっかり暗くなっているのに気付いた。
深い群青の空には冷然と星が瞬いている。その下に、焼けた鉄のよ
うな夕焼けが横たわっていた。

白い息が夕闇にむかつて溶けていくのを眺めているうち、部室の
ドアが忽然と開いた。振り返ると、五十過ぎくらいの、がっしりし
た体格の男が立っている。頭にも、口髭にも、白いものが混じって
いた。エイジは、先々週あたり赴任してきた教師が、たしかこんな
顔だったかもしれないと思った。案の定、男はざっと部室を見渡す

と、

「来たばかりだから俺のことは知らんだろう。児玉だ。一年の現国を担当している」と、怒っているように言った。「教頭から映画研究部の顧問をやってみないかと言われて引き受けたが、部室にはだれも来やしない。さつき職員室から明りがついていっているのを見て、飛んできた。おまえは？」

「副部長の、伊勢崎です」

「そうか、よろしく。映画は好きか」

「嫌いじゃないス」

ふん、と児玉は鼻を鳴らすと、

「俺が廃部にはさせないから安心して活動しろ。そのかわり、映画を一本撮れ。他の部員にもよく言っておけよ。——伊勢崎、おまえ小説とか戯曲は読むか」

「戯曲はまったく読まないスけど、小説なら少し」

「シェークスピアとチェーホフを読め。それで脚本の書き方を覚えろ」

「……え、俺が書くんスか？」

児玉はそうだと頷いて、「部長は、たしか大友と言ったな。相変わらず登校してないか」

「みたいス」

「来ないあいだはおまえが部長だ。そのつもりでいろ」

児玉は言うだけ言うと、出て行ってしまった。軍人を連想させるきびきびとした足音を聞きながら、エイジはかれの特徴のある顔つきが誰かに似ていると思った。——トム・ベレンジャー！ その名が出てきたとき、思わず膝を叩いた。ジャングルのなかでライフルを構えさせたらさぞ似合うだろう。

エイジはその児玉に面倒を押し付けられてしまった格好だが、それでも大友にメールを出す口実を得たことは有難かった。早速、「映画を撮れと新しい顧問に言われた。その相談がしたいから明日部活に来てくれ」

と、すべての部員にメールを送り、部室を締めた。

翌日、女子部員の高島翼から生徒会の用事があつて行けないという詫びのメールがあつた。大友からは依然返事がない。あとの三人は、都合がつけば、遅くなるかもしれないが、という条件つきながら返信を寄越してきた。放課後になって、エイジが職員室から鍵を借りて部室のまえまで行くと、おなじ居酒屋でバイトをしている天草零と、女子部員の黛みちるが、言い合いをしていた。

「今どきお色気なしの映画なんて考えられるか？　おい黛、考えられるか？　つてんだよ」

と気炎をあげる天草は、決して矮躯ではなかったが、いつも猫背にしているので、ひとに小柄の印象を与える。子供っぽさの抜けない言動と、フットワークの軽さが、それに輪をかけていた。いつもなにかを企んでいるように、黒い瞳が爛々としている。そうして忙しなく動く。

「だからって、なんであたしが一肌脱がなきゃなんないわけ？　だいたい高校のコンクールに出すような映画でお色気って、あんた馬鹿じゃないの？」

黛は話にならないとばかりに栗色のボブを揺する。襟を立てたブラウスのボタンを胸のうえまで外し、チェックのスカートをつめる割に、ニーハイのうで鳥肌を立てている。エイジはそれを見て顔をしかめた。着こなしのためなら寒風に肌をさらすことも厭われないという女子は、なにも黛ばかりではなかったが、痛々しい感じはどうしても拭えない。殊に旧校舎の廊下は日があたらず隙間風が抜けるから異様に寒い。

「いま、開けるから」

エイジは二人の間に入って、ドアに鍵を差し込んだ。部室は相変わらず埃っぽかったが、西日が差し込むだけ幾らか暖かった。黛は陽だまりに席をとると、腿をさすりながら、

「大友は今日もガツコ来てないの？」

睫を立てた眼を険しくした。

「たぶん。あいつにもメール出したけど、相変わらず返事がない」
エイジは教卓に腰をかけた。

天草は窓辺にしゃがみこんで、

「じゃあ今日は俺ら三人だけか」

「いや、神崎があとから来るかもしれない」

天草は舌打ちをして、「あいつ誘わなくていいよ」

「……………」

「でもよ、大友がいなきゃ始まらねえよなあ」と、天草は上履きの先をいじり始める。「…………あいつ、どうしちゃったんだろううな」

エイジは黛と顔を見合わせ、それから溜息をついた。

聞くところによると、大友はときどき学校に顔を見せているみたいだから、そう深刻な状況にはなっていないと思われるし、大友からなんとなく詮索されたり噂になるのを嫌がるような雰囲気を感じるので、エイジは身動きが取れなかった。ここで、みんなで話し合ったほうがいいのか、それとも知らないふりをしていたほうがいいのか、判断がつかないのである。そのうちまた大友が部室に現われるようになって、すべてが元通りに戻ってくれるかもしれない。それまでそつとしておくのが正解かもしれないのである。

「なんだよお前ら、冷てえな……………」と、天草は吐き捨てるように言った。「俺、バイトがあるんで、行くわ。なに撮るとか決まったら教えて。…………じゃ」

天草は立ち上がり、すたすたと扉のほうへ歩いていく。その脚がふと止まった。扉が遠慮がちにスライドして、眼鏡をかけた男子生徒の顔が現われた。

「邪魔」天草が冷やかに云うと、男子生徒——神崎亮祐は慌てたように場所をあけた。天草はかれに挑戦的な視線を投げつけたまま、部室を出た。そうしてふと思い出したように、

「そっぴー昨日だっけな、おまえのこと、ライトオンで見たぜ。」

白いパーカーとか買ってなかった？」

神崎は眼鏡を指で押し上げただけで、否定はしなかった。

「部室で布教とかやめとけよ。じゃあな」

神崎はやや紅潮した顔を、天草にむけていたが、鼻を鳴らすと部屋に入り、隅のほうに座った。

「白竜団でいうんだっけ？」と、黛が言葉をかける。

神崎はなにも言わなかった。

「余計なお世話かもしれないけど、やめたほうがいいと思うよ」黛は髪をかきあげながら言った。「中学のとき同じクラスだった子がふたり、あいつらと関わるようになって失踪しちゃったの。お父さんとお母さんが、警察は頼りにならないからって、探偵とかつかって捜してただけど、その探偵も、白竜団はヤバいからって言うって断ってきたらしいんだよね」

神崎は唇をゆがめて、なにか呟いた。エイジはよく聞き取れなかったが、たぶん連中のプラカードに書き殴ってあるようなことでも言ったのだらうと思った。

この神崎も、一年のときはエイジと同じクラスだった。地元で中学で生徒会長をつとめ、入学式のときは新入生総代として挨拶をした優等生だったが、入学以来、定期にしても模試にしても、学年で一位になったことがない。かれはいつも二番手で、一位はきまって大友だった。

去年の夏休みまえのことである。授業が終わり、エイジは大友と並んで昇降口を出た。たまたま教室棟にそって歩いていると、上からいきなり花瓶が落ちてきた。花瓶は大友のむこうがわで碎け、飛び散った破片が大友の足首を二センチばかり切った。エイジはこのとき、三階の窓から二人を見下ろす神崎の顔を確かに見た。あとでそのことを大友に話したが、大友は気のせいだろうと言って問題になかった。

神崎はクラスの前期の委員長を務めたが、後期はほぼ満場一致で大友に決まった。そのとき、ただひとり反対票を投じたのが神崎だ

った。

その神崎がなんのために映画研究部に入ったのか、エイジは憶測のしようもなかった。ただ大友が快く神崎を迎え、ほかの部員と区別することなく接しているの、エイジもそれに倣っている。

神崎は先刻の黛の忠告がよほど気にさわったのか、座ったばかりの椅子から憤然と立ち上がった、

「映画をつくる相談をするというから来たんだ。個人的なことに口を挟まれるためじゃない。あいにく僕は暇じゃないんで！」

せかせかと部室を出ていった。エイジも黛も、それを敢えて止めようとはしなかった。

「なんで入部したんだろうな、あいつ……」

足音が遠ざかるのを待って、エイジは独りごとのように言った。

「伊勢崎には分からない？」黛は机に頬杖をついて、微笑した。「あたし分かるよ。あいつ、大友のことが憎いの、それとおなじくらいリスpektしてるんだよ。だから気になってしょうがないの、たぶんね。でも、神崎は自分の気持ちに気づいてない。なんでこんなことしてるんだろうって、すごく戸惑ってると思う。——天草みたいなおこちゃまには絶対に分からないだろうけど」

「大友も、そんな風に考えて、気を使っていたのかな」エイジは目を細くした。「そのうちストレスでハゲちまうんじゃないか」

「大友はね、我慢して優しくしてるんじゃないんだよ。人の気持ちが分かるから優しいんだよ。だからハゲないと思う。——で、どうするの映画。構想とかある？」

エイジは首を振った。「大友が戻ってきたとき、映画研究部が潰れてたっていうんじゃないから、顧問の言うとおりに、デジカメでもなんでもいいから撮ってきてDVDに焼いて、体裁だけは整えたいと思うけれどさ……やっぱ、大友がいないと始まらないよな」

「だよ……」

「あいつ、おまえにはなにか言ってる？」

黛はいまにも泣き出しそうな声で、「ていうか、あたし避けられ

てる感じ」

エイジなりに、黛の胸裏にあるものを感じ取って、それ以上聞きだす勇気が出ず、

「そっか」とだけ言った。

「でもいいの。どうせあたし、もうすぐ死んじゃうから」

黛がなにかを振り切るようにして顔をあげると、綺麗な髪がふわりと持ち上がり、夕日を受けて燃えるように輝いた。

「投げやりだな。ドッペルゲンガーでも見たのか」

冗談めかしてエイジが云うと、黛の動きがぴたりと止まった。そうしてじつとエイジを見つめている。

「……おいおい、マジで？」長い間をおいて、エイジは言った。「いや、俺も、なんだよ。でもさ、死ぬとかって話、どうせ迷信だろ」「ドッペルゲンガーって、流行ってるの？」

「んなことはねえだろうけど。お互い、疲れてるんだよ。たぶん、そのせいだ。だって俺、ほかにもへんなの見るし。土曜の夜に、お姉さんに逆ナンされてのこのこついていたら、駐車場でバケモノみたいになっちまってよ……」

「それって、化粧が落ちて、みたいなことじゃなくて？」

「違う、けど、似たようなもんかも」

黛は脱力したように微笑んで、「……今日はもう帰ろっか」

「ああ、だな、そのほうがいい」

エイジは弾みをつけて教卓から下りると、部室を締めにかかった。黛が出るのをまって、鍵を掛けていると、

「ねえ、途中まで、一緒に帰らない？」

黛はどことなく悲しそうな目をそっと伏せた。

虹ヶ丘高校の正門前から六車線の道路を渡ったところが、アーケードの商店街の入り口になっている。クリスマスが近づき、あらゆる店舗が色とりどりの電飾に輝いていた。鼻の先と頬をすこし赤くした黛は、ピーコートにもぐりこもつとするように縮こまって歩いている。エイジが見かねて、潔くタイツでも穿いてきたらと言うと、黛はママにもよくいわれたと言って笑った。

「ママとは血が繋がってないんだけどね。——あたしを産んでくれたひとは、あたしが小さい頃に出て行っちゃった。でね、小学校五年生のときにパパが再婚して、うちに来たのがママ。——梅雨が明けるすこしまえに亡くなっちゃったけど。末期癌だったの」

「そっか……」

「癌って残酷なんだよ。転移に怯えながら手術を受けて、退院しても、再発に怯えながら毎日をすごすの。末期になると、余命何ヶ月とか、はつきり出ちゃうし。伊勢崎は、自分があと数ヶ月で死ぬとしたらなにをすとか、考えたことある？　そういう状況って想像できないじゃん？」

「まあ、な」

「あたしだったら、絶対にパニクる。なにもかも終わりだと思って、すごいイヤなやつになっちゃうかもしれない。きっと、そういう状況に置かれたときに、ひとの本当の姿が現われるんじゃないかって、あたし思っただよね」

エイジは、なるほど、と言って黛の横顔を見つめた。こころなしか、瞳がきらきらとしていた。

「あたし、ママのこと大嫌いだった。なにもかも気に入らなかったの。パパがあの一とに優しくしたりするのを見るのがほんと嫌だった。顔を合わせるのも、話しかけられるのも、おなじ部屋で息をしているのも嫌だった。——あの頃は、どうしてママのことがあんな

に気に入らなかったのか、よく分からなかったけれど、今になって、なんとなく分かるようになった。あのひとを見てみると、実のお母さんに見捨てられたことを思い出して、苦しかったんだと思う。パパにまで棄てられそうな気がして、怖かったんだと思う。それであたし、パパから再婚してもいいかなって聞かれたとき、はつきりやダって言ったの。でも、パパはあたしを無視して結婚を決めて、あのひとを家に連れてきた。あたし、悔しくて、暴力以外のいやがらせはなんでもやった。髪にガムをくつつけたり、ミニールを壊したり、服をやぶったりした。パパには思いっきりぶたれたけど、構わなかった。中学になると、居場所がなくて、家出をするようになった。そんなときに、大友と知り合ったの。……あいつね、真面目そうに見えてけっこう夜遊びとかするんだよ。駅東の裏通りとかに屯してさ。喧嘩もするし、悪戯もする。ただ、シンナーと弱いものいじめはしなかったな。大友とはコンビ二のまえに並んでしゃがんで、夜が明けるまでくだらないことを喋ったりした。——だから、高校の入学式で一緒になったときはほんと驚いた。お互い、進学校に行くほど頭がいいなんて思ってたなかったからさ。ママの具合が悪くなりだしたのも、丁度その頃。最初は、癌だって聞いて、ざまみろって。どんな顔して苦しんでるのが見てやりたくて、見舞いに行った。そして、死病に冒されるっていうのがどういふことなのかを、知っちゃったの。あたし、ママに憎まれてると思ってた。愛されてる訳がないと思ってた。だからきつと、恨みごととか、酷い言葉をたくさん言われたりするんだらうなと思ってた。あたしは、ああ、やっぱりそうなんだって、冷笑しながら、あのひとが死ぬのを見届けてやろうと思った。——逆だったの。ママはわんわん泣いてあたしに謝ってきた。反対を押しきって結婚を決めてごめんねって。パパのことが好きで好きでしかたなかったの、許してって。あたしがグレたの、自分のせいだと思ってすごく悩んでたみたい。それからあたし、病院に行くのが怖くなった。あたしがいなかったら、あのひととパパはもつと幸せな時間を過ごせたはず。そのうえ、あのひとに残

された最後の時間まで、あたしのせいでみすばらしくなってる。あたしはあのひとだけじゃなく、あのひとを愛するパパまで苦しめてたって、やっと気づいた。あたしって、ほんと馬鹿だと思った。けれど、あのひとのところへ行って、謝ることができなかったの。取り返しのつかないことをしてしまったことが、怖くて……。病院は駅の近くにあってね。あたしは学校帰りに傍まで行くんだけど、あのひとの病室を訪ねる決心がつかなくて、いつまでもぼーっと見上げて、ふと気づくと、大友が傍にいて、大丈夫か？ って声かけてくれて。それから、中学のときみたいに、あたしの話をいろいろ聞いてくれた。大友ってほんと面白い。行けとか行くなとかちつとも言わないくせに、あたしより先に目をうるうるさせちゃったり。でも、すごく励まされたの。あたしは大友のおかげで、ママが亡くなる前にやっと仲直りができた」

エイジは、黙って頷いた。そうして、大友のとても大友らしいことがなんとなく嬉しかった。

「あ、ごめん。なんか一方的に喋っちゃって」

「いや……けれど、どうしてそんな話を急に？」

「あたしね、中学のときにいちど大友にコクって、振られてるの。でも、忘れられる訳ないじゃん。あんなに素敵なんだよ？ あんなに優しいんだよ？ あたし、いまでも、大友のこと、好きで好きでしようがない。大げさだっと思って思われるかもしれないけれど、大友の為だったら、あたし死んでもいい。せめて、あいつが苦しんでるなら、ほんのすこしでも構わない、力になりたいの」

「黛……」

かの女は、涙を溜めた目を挑むようにエイジに向けて、

「大友にね、あんた親友いるのって、訊いたことがあるの。そうしたら、あいつは伊勢崎の名前を挙げた。で、あんたはどう思ってるの、大友のこと」

「言うまでもねーよ。……あいつは親友だ。どこに出したって恥かしくない、自慢の親友だ」

「だったら、お願い。あたし、このまま黙って見てらんない」

エイジは髪をかきあげて少し押し黙ったあと、

「でも、どうするんだ。大友はなにも言わない、返事もしてくれない」

「さつき、あたしが神崎にした話、覚えてる？」

「ああ……中学ンときのクラスメートが二人行方不明になって、両親が探偵に消息を探ってもらったけれど、結局、白竜団はヤバいからって断ってきたって……」

「あたし、その探偵ってひとに会って話を聞いてきたの。そのひと、教団の関係者の車に発信機をつけようとしてバレて、テンブル？」

「っていうところへ連れて行かれて、マジ殺されそうになったんだって。そうしたら、高校生の男の子が入ってきて助けてくれたらしくて。その男の子っていうのが、どうも大友っぽいの。うちの制服で、美少年だっていうし、髪型もおなじだし——。でね、男の子がボコった教団のひとに、いなくなった二人の行方を聞いたら、殺されてるってことが分かったの。探偵のひとは、その男の子に、『残念ですけど、もう手を引いたほうがいいかもしれないです』って言われて、両親には『白竜団は洒落にならないから搜索をやめざるを得なかった』っていうとりあえずの報告をしたみたいなの」

「待ってくれよ、その、ウチの制服を着た男の子って、ほんとうに大友なのか？　なんで大友がそんなことに首を突っ込んでるんだ？」

「わからない……だから、それを突き止めようと思うの」

「どうするつもりだ」

「大友ん家の斜向かいに漫画喫茶、あるじゃん。そこの個室の窓から、あいつの部屋と玄関を見下ろせるの。あたし、今日から張り込みするつもり」

「後をつけるのか」

「薫は決然と頷いて、

「でさ、伊勢崎も手伝ってくんない？」

エイジは唇をかんで、アーケードの天井を見上げ、

「こっそりつけまわすような真似はしたくないけど……でも、しょうがないもんな。わかった」

「ありがとう。あんたに相談してよかった」

「大友、今日は家にいるのかな」

「妙子ちゃんにメールで訊いたんだけど、いま、部屋で寝てるって妙子というのは、大友が溺愛する中一の妹である。」

「じゃあ、これから行ってみるか、満喫」

「家は大丈夫？ 泊まりになるかもよ」

「ウチの親なら、メールで適当に言っとけば問題ない。そっちこそ大丈夫か」

「うん。パパには友達の家泊まるっていつてあるし、アリバイ工作もしたから」

二人用のゆったりしたソファと毛布、デスクトップとテレビとDVDプレイヤー、それからカッティングシートを貼った窓——それが小さな洋室にあるすべてだった。黛はソファを這って窓辺に腕をかけると、エイジに手招きをした。並んで外を眺めると、ヘッドライトをちらほら点けはじめた車の流れのむこうに、大友の両親が経営するコンビニが見えた。二階と三階の部分が自宅になっていて、台所とリビングにあたる辺りの窓が煌々としている。建物の脇にコンクリートの階段があつて、二階の玄関につながっている。玄関のうえに明かりが灯り、たくさん飾りを吊るした鉢植えの樅の木を照らしていた。

大友の部屋の窓は、暗くひっそりしている。

「いいとこ見つけたな——」と、エイジは言った。「ここなら張り込みに最適だ。でもよ、あいつ歩きで移動するとは限らないぞ。原チャリ持つてるし。あれ使われたら、どう尾行するんだ」

「大丈夫、下でタクシー待機させてるから。無灯火で追跡とかできる人一晚貸し切りしたいんですけどって言って、寄越してもらったの」「一晚貸切って、おまえ幾らかかると思ってたんだよ」

「支払いなら心配しないで」と、黛は財布からクレジット・カードを取り出した。受けとって見ると Platinum の刻印がある。

「……もしかして、黛さん家ってお金持ち？」

「たいしたことないけどね。いちおうパパ、設計事務所からチェーンの飲食店までいろいろやってるから」

「その割にバッグとか小物とか普通じゃない？」

「ガッコにカルティエとかブルガリとか持っていていける訳ないじゃん。女子ってそういうやつかみすこいんだよ」

「なるほど……」

「ジャンケン」と、黛はいきなり言い出した。あいこが二回続いたあと、エイジはチョコキ、黛はグーで、勝負がついた。

「あたし先に仮眠取るから。三時間交代ね。えっと……いま五時だから、八時になったら起こして。ちゃんと見張っててよ。あ、おなかすいたらそれで出前とかとっていいからね」

「あ、うん」

黛はピーコートをハンガーにかけると、おやすみを言ってブランケットに包まった。エイジは狭くなったソファに座ると、窓枠に頬杖をついて外を見おろした。

牛丼屋の看板や信号機、ヘッドライトの光が、冴えわたる夜気のなかできらきらしている。コンビニには頻繁に客が出入りしていた。大友の部屋の窓だけが、死んだように薄闇に沈んでいる。

とくに目立った動きはない。

エイジはしばらく様子を見たあと、寝息を立てはじめた黛に気遣いながら、パソコンを立ち上げ、ネットに繋いだ。そうしてモニタ―を、コンビニごと楽に視野におさまるように窓辺へ寄せた。

ポータル・サイトのニュースをざっとチェックして、それからグーグルの検索欄に「八尋市」「怪奇現象」と打ち込んだ。エイジは、土曜の晩、雑居ビルのトイレから出てきた二人組の女があさましい姿に変わったことを、心身の疲れによる幻覚だろうと考えていたが、あるいはそうではないかもしれないとも考えていた。そこで、おなじような目撃例がないかを、調べてみたくなった。

けれども、検索結果として現われたのは、ホワイト・ブラストという、昨年のあたまに八尋市および東京湾沿岸で目撃が報告された奇妙な現象のことばかりだった。

一月十七日、午後七時四十五分、空間が一秒ほど、ゼリーのよう
に揺れた。震動によってコップの水が波立つのは当然だが、硝子や
陶器、家具や建築物まで揺れたから大騒ぎになった。高層ビルの屋
上に設置された自動カメラには、きれいな夜景に波紋を描いてゆが
みの広がっていく様子が、はっきりと映っていた。市はパニック状

態になり、これは次元をまたいだ地震であるとか、米軍の陰謀によるものとか、古代文明が人類滅亡の序章としてこれを予言していたとか、さまざまな俗説が流れた。国内はもとより海外のテレビや雑誌にも大きく取り上げられ、ちょっとしたブームとなったが、それも今は昔の感がある。集団ヒステリーにより、実際にはなかったことが、あつたように感じられたとか、皆がいつせいに画像や動画を捏造しだしたことが信憑性を高めたとか、そういう心理学者たちの冷静な分析が議論の主流を占めるようになると、たちまち下火になってしまった。

あれから二年近く経つが、それでも一部のオカルト・マニアたちは相変わらずホワイト・プラストを实在の現象として捉えつづけ、その意味するところと背景について、ネット上で熱っぽく語り合っていた。

エイジは掲示板の議論をざっと追った。面白みを感じないことはなかったが、知的好奇心よりは想像力に訴えてくる質の、厚みのない面白さで、一巡するとすぐに飽きてしまった。近頃は米軍陰謀説も予言説も鳴りをひそめ、政府の秘密機関が極秘裏に行った実験により発生した、という説が有力らしかった。ただ、論者たちが参考資料として引いているウェブページの大半は、個人の見解や憶測を並べただけのテキストに過ぎなかった。

エイジは欠伸をして、寒々しい夜の街を眺めた。止まったり流れたりするヘッドライトの河のむこうには、依然静まり返った大友の部屋がある。あのなかで大友が眠っていると思うと、エイジは胸がしめつけられた。どうしてこんなところから大友を盗み見るような真似をしているんだろうと考えると情けなかった。あの玄関のインタホンを押せば、寝癖を立てた大友が、「いい夢見てたのに起こすなよ」と、不機嫌そうに、けれども歓迎の微笑を浮かべながら出てきてくれそうな気がする。たったそれだけのことで全てが氷解してしまいそうに思える。

あの部屋にいらるであろう大友の、右手の甲には、ナイフで抉った

ような傷跡がある。それはエイジが大友と一度きりやった喧嘩の、原因にまつわるものだった。

エイジはプロボクサーになるのが夢だったから、中学にあがるとすぐにジムに通い始めた。やがて、かれは会長の目にとまり、高校一年の夏休みまえに、受験資格を満たす十七歳になつたらすぐにプロテストを受けてみないかという打診を貰った。いずれフライ級のタイトルを狙う考えがあるなら、こっちも本腰を入れて指導する、という。エイジは天にも昇る気持でジムをあがり、大友にメールを送った。大友からはすぐに激励の文章が返ってきた。

トレーニングが俄然厳しくなつて、夏が過ぎ、十月を迎えた。その日、クラスの委員長として文化祭の準備に追われる大友を、エイジは遅くまで手伝い、下校は七時過ぎになった。たまには違う道を使つてみようという話になり、肩を並べて人工河川の畔を歩いていくうち、対岸の公園にいる七八人の男たちの様子が、どうもおかしいという話になった。誰かを茂みのなかに連れ込もうとしているように見えなくもない。けれども、断定できるほどはつきりしてはならず、普通に遊んでいるような感じもあった。とにかく行つてみようということになつて、エイジと大友は急いで橋を渡り、遊歩道のようになっているその公園の裏手に駆けつけてみたところ、明らかに雰囲気尋常でなかった。ベンチの陰から女の子の異様な泣き声が聞こえたので、暗がりに群がる男たちを追ひ払うつもりで怒鳴つたが、却つて藪蛇になり、ぞろぞろと囲まれてしまった。

エイジは外灯が淡く照らすその女の子を正視するに忍びなかった。ほとんど裸にされ、顔は青く腫れあがり、唇から血が滲んでいた。男たちに激しい憤りを覚えながら、それでも脳裏にはボクシングのことがよぎった。暴力沙汰が明るみに出れば、ジムから破門されかねない。会長はどんな理由があるにしても、一般人を殴ることを決して快く思わないひとだったし、女の子があの状態では、後からそれを言い訳にすることもできない。エイジは「ついてねーな……ちくしょう」と呟いた。

大友は、それを耳ざとく聞きつけたのか、「エイジ、そのへんに公衆電話がある筈だから、捜して通報してくれ……早く」

携帯を使えばいいのに、わざわざそうしろというのは、要するに急場から離脱させるための方便だからだろうと、エイジは思った。

「おまえ、どうすんだよ」

「やるだけやってみるわ。——おい、早く行けって」

大友はエイジを押しやると、男たちに近づいていって、いきなり一人の顔面を殴りつけた。それから、喧嘩が始まった。

エイジは暗澹とした気持で、大友の大立ち回りを見ていたが、ひとりの男がナイフを取り出すのを見て、ついに覚悟を決めた。

飛び込んでいって、ナイフの男のあばらをへし折り、ふたりの鼻を潰し、ひとりの顎を砕いたところで、男たちは戦意を失い、靴音を乱して逃げていった。大友は相手を殴ったときに歯でもあてられたらしく、手の甲からドクドクと血を流していたけれど、それにはほとんど構わず、茂みの蔭で泣きじゃくっている少女の傍へしゃがみこみ、言葉を尽くして慰めた。

女の子が落ちついてくると、大友はその子の母親に電話をかけて迎えに来てくれるよう頼んだ。飛んできた母親に二人は事情を説明し、それから母親が本人に意思をたしかめた結果、警察には届け出ないことになった。母親は大友の手の怪我を心配し、しきりに二人の名前を尋ねたけれど、エイジたちは名乗るほどのものではないからで通し、とうとう逃げるようにして立ち去った。

帰り路、大友はいきなり、

「おまえ、なに考えてんだよ」と、エイジに掴みかからんばかりに怒鳴った。「本気でボクサー目指してるんだろ。拳に怪我でもしたらどうすんだ」

「そんなへたくそな殴り方はしねえって。おまえこそ大丈夫か、臆を傷めたりしてないだろうな？」エイジはハンカチでかく縛った大友の右手を案じて言った。

「俺のことはどうだっていいんだよ。それより、なんで通報しなか

「つたんだよ、バカ」

「通報したら、あの子が乱暴された話が広まっちゃうだろう。だからおまえは無言を言わずにいづらに殴りかかったんだろ。——もう終わったんだし、あの子も助けられたんだし、いいじゃねーか」

それからエイジは押し黙った。胸の奥に、嫌な予感が渦を巻いていたせいだった。案の定、翌日の午後になって、エイジは生徒指導室に呼び出された。他校に、虹ヶ丘の制服を着た若者に殴られて、あごの骨を折った生徒がいる、やったのはおまえじゃないか、たしかおまえボクシングを習っていたよな、などと学年主任が云う。どうやら、少女を襲った連中のほうが被害届を出したらしい。あとで知ったところでは、親が顎を割られたのを見て、慌てて警察に駆け込んだということだった。

エイジと大友は学年主任に付き添われて警察署に出頭し、取り調べを受けたが、誤解はなかなか解くことができなかった。というのも、二人とも少女のことを庇って事実をありのままに言わなかったからだった。エイジは即、ジムを破門になり、大友とそろって家庭裁判所に送られそうになったとき、少女の母親が事情を知って名乗り出てくれて、ことなきを得た。事件は被害届の取り下げというかたちで決着したけれど、結局、エイジは夢を諦めざるを得なくなった。

それから、エイジと大友の仲がぎくしゃくした。エイジは不運を嘆きはしても、男たちに殴りかかって少女を救おうとした大友をすこしも恨みには思っていない。けれども、大友のほうは自分のせいでエイジの夢が潰れてしまったと考えているらしく、そのいじけた様が、エイジには、大友の短兵急な行動に不満をもっていると感じ付けられているように思われて物凄く不快だった。その不快を隠しきれないエイジは、大友の目に、本音をはっきり言わず、うじうじとして男らしくないように映っていたようだった。大友はそれをストリートに自分にぶつけて欲しいのか、エイジにむかって挑発するようなことを云う。エイジはますます見くびられた気がして機嫌が

悪くなる。そうしてついに、怒鳴りあいの喧嘩になった。

「こっちはな、おまえのせいで夢を諦めた、なんて風には思っちゃいねえんだよ」と、エイジは大友の胸倉をつかんで、「なんでおまえ、そんなに卑屈になってんだよ。——なんだったら、言つてやるうか。俺のことを、おまえを逆恨みするようないやうもないヤツだと思ってるからだろ？ 俺はな、おまえにそんな風に思われているのが悔しいんだよ。情けないんだよ」

すると、大友は目を真っ赤にして、

「違うわ、バーカ。俺は、おまえが俺のこと見捨てるわけがないって、そんなことできない奴だって、心のどこかでちゃんと分かって、それなのに調子こいてあいつらに殴りかかって、おまえを巻き込んで、……俺は、そういうヤツなんだよ。親友の夢を、わかっていて潰しちまう最低のヤツなんだよ。だから、おまえに優しくされるとつれーんだよ、どうしていいか分かんなくなっちゃうんだよ」

エイジは、自分との関係をどこまでも曖昧にしようとしめない決意を、大友の眸のうちに見出して、予期せず、眼に熱いものがこみあげてくるのを感じながら、「おまえ、どうしてそんなに潔癖なんだ。女の子が襲われていて、いまにも殴り合いになりそうな状況のときに、そこまで内省しきれなかったからって、誰に文句を言われる筋合いがあるんだよ。——俺は鈍いからこころの機微とかそういうのは分からない。ただこれだけは分かっているんだ。おまえはイイ奴で、俺はそんなおまえが……」

その先は言いづらくて言葉にできなかったが、大友には伝わったという密かな思いがエイジにはあった。それから二人のあいだにわだかまる気まずさの質が微妙に変化したからだ。

あれから一年と少しが過ぎた。

エイジはいま、大友が、飄然とした涼しげな双眸に隠して人にはなかなか見せない、かれ特有の潔癖さに苛まれているように思われてならなかった。その潔癖が大友を自罰的にし、孤独にしている。

自分で作り出したエア・ポケットに、罪悪感に伴いがちな一種の陶醉をもつて埋没していこうとする大友のすがたが、ありありと目に浮かんだ。おまえは間違っていると、叫びたかった。ただコンビニを見つめるエイジのうちに、じれったい気持ばかりが膨らんでいく。

物思いから、ふと我に返ると、黛の携帯のアラームが鳴っていた。モニタのデジタル時計は八時すこしまえを指していた。黛はブラケットのしたでもぞもぞしたあと、がばっと起き上がり、ほっと息をついた。とろんとした目は充血し、顔がすこし紅潮している。

「……すごい夢、見ちゃった」

「大友の夢か」

黛は耳まであくして、「べっ、べっにいいじゃん」

「まあな」

「動き、あった？」黛は身を乗りだして、外を覗く。

「いや、部屋はずっと暗いまま」

「あんた、食事は？」

エイジは首をふり、「腹、減ってないし」

「食べないともたないよ。——ピザでいいよね？」と、黛は携帯をいじり始める。

「いない」

エイジはブラケットを引寄せると、黛と場所を入れかわり、ソファのうえに丸まった。「なんかあったら起こして。あと、よろしく」

それから、なかなか寝付けなかった。出前が来て、個室に焼けたチーズの匂いが充満し、黛のマウスをクリックする音が時々響き、——やっと意識がまどろんできたかと思うと、いきなり肩を揺すられた。

「部屋の電気がついた！」

と、黛が言う。エイジは窓に顔を寄せてみた。なるほど大友の部屋のカーテンが明るくなっている。

「いちおう、タクシーに移動しとくか」

「うん」

個室を出て、カウンターで支払いをし、駐車場で待機させていたタクシーに乗り込み、十分ほどすると、シングルライダーを着た大友が、玄関からふらりと出てきた。自宅の脇に止めてある原チャリのエンジンをかけるのを確かめて、黛は、

「運転手さん、あのひと追って。バレないようにお願い」と、指さして言った。

三〇分ばかり、追跡行が続いた。そうして、公営団地やアパート、一戸建てが雑然と建ちならぶ住宅地に入り、車通りの疎らな道を尾行せざるを得なくなると、事が困難になった。ライトを落とさなければ、気づかれてしまう恐れがある。ならばと消して走っていると歩行者に気づかれない。ごみごみした狭い路地からふと自転車が現れたり、公園から犬を連れた女性が飛び出したりするので、タクシーの速度は自ずと制限される。引き換え、原付は下町風の入りくんだ道に行くのに都合がよかった。運転手はテールランプを見失った。聞けば、このタクシーの会社を経営しているのは、黛の父だという。それで運転手は、黛をお嬢さんと呼んで、言いなりになっている。

「おかしいなあ……確かに、ここを曲った筈なんですけどね」
かれは呟きながら、もう四度も右折した路地へとタクシーを滑り込ませる。

黛はじりじりした様子で周囲を見渡し、
「うー、じゃあ運転手さん、そこ、ちよつと左折してみて」と、小さな公園の角を指さす。「あ、それと、もうライト点けていいですか」

ビームがまっすぐに伸びてゆき、左手の奥から運送屋の倉庫のような建物がよつつ並んで現われた。そのうちの一つに、数台の車やバイク、自転車などが乱雑に横付けされている。

「あれはどういう……?」

エイジが尋ねると、運転手は、
「イベント用の貸し倉庫らしいです。休日にはよく若い人たちが集まって、踊ったりバンドの練習をしたりしてるようですが」

倉庫の、メタリック・ブルーの外壁に、ミニチュアのスポット・ライトのような洒落た照明が幾つもついている。高いところにある

硝子窓から、黄ばんだ光が零れていた。

「ここで停めてもらってもいいですか」と、黛が急に言ったので、エイジは、

「どうかした」と訊いた。

「あれ、」黛は駐車場に止められた一台の原付を指差している。エイジが窓に顔を近づけて見てみると、大友の乗っているのと、色も型式もおなじものだった。タクシーから降り、ハンドルに引っかけられたヘルメットと、ナンバーを確認して、二人は顔を見合わせた。黛は、運転手に、さっきの公園の辺りで待機しているよう指示すると、

「きつと、中にいるよ。入ってみよう」と、エイジのコートの袖を引いた。

二人は倉庫のモダンな外装を眺めながら、映画館を連想させるワインレッドの扉に近づいていって、どちらからともなく脚を止めた。扉のしたから、赤い液体が流れ出ている。

「なにこれ……血なの？」

「ケチャップとか塗料とか、だといんだけどな」

エイジが扉の隙間に手をさしこみ、引き開けると、男がぐらりと倒れた。白地のパーカーの大部分を、まっ赤に染めている。

男の顔面は右半分が潰れて、グシャグシャになっていた。

「ヒッ……」

黛は掠れた呻き声をあげると、エイジの肩に隠れた。

「通報……って、できねえよな、クソ」

やったのは大友かもしれないという不安が、エイジにはある。取り出したばかりの携帯を、内ポケットに落とし、「な、黛」と、可哀想なほど震えはじめたかの女をふりかえって、「タクシーに戻つてろ。俺が様子を見てくるから」

「やだ、あたしも行く」

黛のこわばった顔のなかで、瞳だけが毅然としていた。

「奥はもつと酷いことになっているかもしれないぞ。頼むから、大

声を出したりするなよ」

「わかってる」

気丈な声で黛は答えたが、身体をエイジにぴったりとくっつかせていた。

二人は死体を跨いで、貸し倉庫へ這入った。正面の衝立に黒地の旗が掛けてある。旗には、白の塗料で円と逆さの正三角形が描かれていた。

「これって、白竜団のマークだね」

「ああ……」

エイジは折畳みの机に仰向けに倒れている女の首に手をあてた。脈はない。鉄骨の梁を見上げる瞳孔は開き切っていた。

「集会でもしてたってこと？」と、黛が辺りを見まわす。

「そこに大友が殴り込んできた、とでも考えりゃいいのか」

「そんなッ！」黛はエイジの腕をぎゅうと掴んで、「じゃあ、これぜんぶ大友がやったって言うのッ？ 大友がこんなことするわけないじゃんッ！ あんた、なに言ってるんのよッ！」

「ああ、分かってるよ。とにかく、声を落せ」

「あつ……ごめん……」

そうして押し黙った黛の目尻には、涙が滲んでいた。

エイジは壁づたいにゆっくりと歩いた。足許には、パーカーをまとった死体のごろごろ転がっている。床はまっ赤に濡れて、靴を上げ下げするたびにピチャピチャと音が立った。

「待って……」と、黛が立ち止まる。「なにか聞こえない？」

「ああ……」

耳を澄すなり、ふたりの男の言い争う声に気がついた。その一方が大友であると、エイジはすぐに分かった。

「もうひとりのほうは、誰なの？」

エイジは目を細くして、「神崎、かもしれない」と云った。

「神崎って、おなじ部活の？ ……でも……そうかも」

「ちくしょう。急ぐぞ」

黛はエイジの腕を引いて、

「待つて。行つてどうするの」

「どうするつて……揉めてるンなら、止めないと」

「でも、あたしたちは大友のこと、ずっとわかんないまんまだよ」

「おまえ……止めに入らずに、盗み聞きしろつてのか？」

「大友は、理由もなく人を殺したりなんかしない。それは、あんたも分かつてるでしょう？ きつと、あたしたちには想像もつかないことを背負つてるんだよ。あたし、大友のすることだったら、なんでも信頼できる。なんでも賛成できる。……だから！」

「大友は神崎を殺したりしない、もし殺すとしたら十分な理由があるはず——そう言いたいンか」

「お願い、伊勢崎……」

エイジはがさがさと髪を掻きまわすと、

「クソ、しょうがねえ……」

黛の腕をひいて、トイレの傍のドアからスタジオのようなところへ入り、その小窓から、倉庫の奥のほうを覗いた。

体育館ほどの漠とした空間に、うすく煙が立ち込めている。

中央に、ビロードの黒いクロスをかけた円卓があった。その上に燭台がたくさん並び、蠟燭の灯がちらちらと瞬いている。円卓のまわりには、白いパーカーを血で染めた死骸が幾つも転がっていた。

円卓の明かりが煙にぼやける先に、革ジャンを着た大友の後ろすがたがある。かれは一段高くなったあたりに立っている瘦躯の青年――神崎と向き合っていた。

神崎の顔は、白いフードのしたで、蒼褪めているように見える。

「……君は自分が何をしているのか分かっていない」

「おまえは分かっているとでも言うンかよ」大友の声には、普段のかれから想像もつかないほど厳しいものが含まれていた。「神崎よ、おまえがどんな思想を持ち、どんなふうに関力を使おうと、おまえの勝手だけだな、教団のために動くっていうんなら、おまえは俺の敵だ。容赦しねーぞ」

「大友、君は安っぽいヒロイズムに駆られているだけだ」

大友は鼻で笑い、

「そっくりそのまま返してやるよ」

神崎の顔が、紅潮してゆがんだ。

「人間とはいったいどんなものなのか、歴史を見れば明らかだ。十九世紀のヨーロッパが清朝を侵食するさまは陰湿を極めた。黒人奴隷を解放したリンカーンは、けれどもインディアンに対しては約束を反故にするばかりか略奪さえ辞さなかった。フランスもイギリスも、ユダヤ人を哀れんで対ナチスに立ち上がったんじゃない。自分の国が危うくなったからに過ぎない。――いいや、歴史を引き合いにするまでもない。この街を見れば、人間とは強欲を積み上げてそのまわりに無関心の壕を巡らせるしか能のない生き物だということが疑えないはずだ」

「神崎の話は分からなくもねーけど、そこから先が気に入らないんだよ。どうして人類を全否定するなんて結論になるんだ。おまえにはいつか言ってやろうと思ってた。無欠の正義以外はすべて悪なのか？ 一位を獲れなかった奴はすべて敗北者なのか？ 完璧な者のほかには生きる価値のないゴミなのか？」

「そうだよ、ゴミだよ！」神崎は悲痛な声で叫んだ。「ああ、どうして君には人間の救いのようなさが理解できないんだろう！」

「神崎とはもっと早いうちに、色々なことを話し合っておくんだっただ……」

大友の声には、どことなく悲しげな響きがあった。

「残念だ……ああ残念だよ……」

神崎は、頭を抱え、唸り声をあげる。

大友はおもむろに神崎にむかつて歩き出し、「俺にも、おまえにも、ひとをぶつ殺してでもやり遂げたいことがある。だったら、ここで議論をしてもしょうがねえ。ケリ、つけようぜ」

倉庫にたちこめている淡い煙が、緩やかに流れ始めた。そうして大友の腕を中心に、ゆっくりと渦を描く。渦は轟とひと鳴りして旋風のようになった。

神崎はうずくまるように上体を曲げ、ガクガクと震えだした。パーカーの裾やフードがふわりと持ち上がる。レンズの奥で、双眸が妖しく光った。

薫は小窓に顔を押し付けるようにして、

「なんなの……あれ……」

「わかんねえ……」と、エイジは答えた。「超能力とか、か？」

「あたし、やっぱり行って止めてくる！」

駆けだそうとする薫の腕を、エイジがつかむ。

「やめとけ。あの死体を見ただろ。俺らが行ってどうにかなる話じゃない……」

「でもッ……」

薫がなにかを言おうとして、ビクツと身体を強張らせた。対峙す

る二人のほうから、杭打ちでもしているような轟音があがったのである。エイジが小窓を覗くと、高く跳躍した大友の直下に、神崎の拳が突き立っていた。拳は焼けた鋼鉄のように輝いている。コンクリートの床にみるみる亀裂が走り、破片が飛散して、電が屋根を叩くの似た音をたてた。

神崎が上を向く。宙に漂う大友は、弓を引き絞るように拳に溜めをつくり、鋭く降下して神崎に迫る。神崎が怯えたように両腕で顔を蔽った。その腕を交差させたところに、大友の拳が衝突する。

眼底に沁みるほどの閃光が散った。そうしてエイジに視界が戻ったとき、神崎の身体はサッカーボールのようにバウンドして、三メートルほどうしろの壁に叩きつけられた。

神崎が這うように身体を起こす。眼鏡のレンズは無惨に割れていた。

「うつ……ちくしょう！」

大友はほとんど弾みをつけずに段差を飛び上がると、

「俺、やっぱりおまえのこと、殺したくねーよ。なあ、神崎、ゲー
トの在り処を教えろとまでは言わない、教団とは金輪際関わらない
と約束してくれ。そしたら俺は……ッ！」

突然、言葉を切って横に飛ぶ。直後、幾筋もの光が、レーザーのように疾走し、円卓にあたって小爆発を起こした。

神崎が、肩で息をしながら右腕をのべている。光はそこから放出されたものだった。

「これが答えか。わかったよ。しょうがねえ」

大友は突風のように急加速して、神崎に肉薄し、上体にまわし蹴りを叩き込んだ。神崎は激しく転げ、音響用の機材らしきものを碎いて静止した。

壊れた人形のように、ぐったりとしている。

エイジの傍で、黛はほとんど哀れみを乞うような声で、

「これ以上やったら、ほんとうに死んじゃうよ！　ねえ、伊勢崎ッ
！」

「ああ、クソッ……」

二人はスタジオの扉を抜け、散乱する死体のうえを飛ぶように駆けた。倉庫の奥のほうに続く通路へ折れたとき、背後から、

うああ……

という、物凄い悲鳴が聞こえてきた。声からすると、タクシーの運転手らしい。

「黨のことが心配で、様子を見にきたらしいな」と、エイジは入口のほうを振り返りながら言った。「こうなったら、通報されんのは時間の問題か。ああ、大友のやつ、こんだけ人を殺して、警察に捕まったら、人生終わっちまうぞ……」

黨は、髪をふりみだして駆けていく。エイジは、そのあとを追った。

扉を開けて、倉庫の広い空間に飛び込んだとき、ちょうど左手奥の非常ドアが閉まるところだった。大友はそこから外へ出たらしい。エイジは薄煙に霞む周囲をざっと見渡し、半壊した機材のうえにくったりした神崎を見つけると、駆け寄って、

「おい、大丈夫か」と、肩を揺すった。

反応はなかったが、口元に手をかざすと、暖かい息があたった。

「死んではいないみたいだ」

黨はよほど安心したのか、その場にしゃがみ込んだ。その背がビクとしたように伸びる。どこか遠くで、サイレンが唸りをあげていた。

「やばい。あたしたちも逃げなきゃ」

「だな」

二人は大友のつかった非常口を開き、夜陰へ出ると、雑に並ぶバイクや自動車をよけて車道を目指した。となりの倉庫の軒のうえに大きな月が掛かっている。辺りは、月のひかりが行き渡って、うっすらと明るい。

黨が、いきなり金切り声をあげた。

「大声出すなって！　つか、どうしたんだよ」エイジが問うと、

「だって……あれ」と、黛は倉庫の扉のほうを指さした。

エイジが視線を向けると、顔の漬れた男がいたはずの場所に、黒く滑る肌をもつ、異様な生き物が横たわっていた。

山羊を連想させるねじれた角と鋭い牙があり、半目の眸はルビーのような赤みを帯びている。

「超キモいんだけど……なにあれ……」

エイジの脳裏にまず浮かんだのは、土曜の晩に声をかけてきた二人の女のことだったが、

「よく、わかんねえ」取りあえず答え、「とにかく、ダッシュで逃げろ」と、黛の手を引いた。

午前三時を過ぎてエイジはようやく帰宅したが、それから一睡もできなかった。

今頃、あのメタリック・ブルーの貸し倉庫のまわりには、パトカーや救急車、ことによったら野次馬や報道関係者まで集まってきて騒然としていることだろう——エイジは動悸しつづける胸と、裏腹にぼんやりとする頭をもてあまし、ベッドから起き上がった部屋のテレビを点け、早朝の報道に釘付けになった。ふつうの火災や交通事故でもニュースになるのだから、あのおぞましい一件が大々的に報じられるのは当然のように思われた。

——深夜の貸し倉庫で謎の大量殺人、被害者は五〇名を超える。そんなテロップさえ目に浮かんでくる。

親友がその大量殺人事件の容疑者になることに、どうやら疑う余地がない。エイジは自分のことのように恐ろしくて、膝が震えるのをどうすることもできなかった。

警察に呼ばれて、大友のことを訊かれたらなんと答えよう——そのことをまず考えなければいけなかったけれど、エイジの思考は散漫を極めた。

夢を見ているのではないか、なにかの間違いではないか、友人たちの手の込んだ悪戯ではないのか——エイジはそれらの可能性を執拗に疑った。それでいて、自分の頬をつねってみる気はいっこうに起こらなかった。

落ち着かない気分でテレビを見続けるけれど、各局は依然として事件を報じる様子がない。いつもどおり、野球選手の移籍問題や、芸能人の恋愛沙汰、補正予算の集中審議の模様をつたえるばかりで、キャスターもアナウンサーも、エイジの目に少し間抜けに映ったくらい、爽やかな笑みを浮かべている。

不審ではあったけれど、なぜ報じられないのかについて仮説を立

ててみたり、その仮説を理論的に検証してみたいと思っても、倉庫のなかで見た凄惨な光景が次々と意識に割り込んできて、エイジは十秒として思考力を維持することができなかった。

他にどうしようもなく、時間いっぱいまでニュースをチェックし、鞆を抱えて階段を下りて行き、家族とは顔を合わさず、そつと玄関を出た。母親の、いつてらっしゃいの声に、泣きたいような気持ちがこみあげた。

バスに乗り、冬の朝のうつろな陽光を浴びながら、電線と一緒に流れる百舌鳥を眺めているうち、エイジは黛のことが無性に心配になった。かの女がショックで眠れなかったのは間違いない。様子を尋ねるメールを送ると、

（ありがとう、でも大丈夫だから）と、すぐに返事が来た。（ていうか、あたしらガッコが始まるまえに、相談とかしたほうがよくない？）

警察に呼ばれたときのための、口裏あわせのことを言っているのだろつと、エイジはすぐに思った。校門前で待っているというかの女と、約束どおり落ち合い、体育館沿いの人気の少ないあたりを歩きながら、

「運転手さん、絶対に通報したよな。したに決まってるよな」

「うん……たぶん」

「でも、それにしちゃ妙なんだよ。全然テレビで報道されてない。まわりも普段どおりだし。付近であんだだけの事件があったら、騒ぎになるのが普通だろ」

「確かにね。でも、そういう雰囲気、ないよね」

黛は、朝の日差しに目を細くして、

「まるごと夢だった、なんてことは……ないかな」

「そうだったらいんだけどな、冗談抜きで」

「あたしら、このまま学校へ行ったら、先生とかに呼ばれそうじゃない？ きつと大友のこと聞かれるよ。どうしよう……」

エイジは校門のほうを振りかえり、

「いっそ、バックレるか？ でも、まてよ、俺たちのことが警察とかにまだ知られてなかったら、逆に疑われることになりかねないか……」

「……………」

「どうなっちまうかわかんねえけど、とりあえず学校には行ってみるか」

「うん……………」

二人は、昇降口にむかつてのろのろと歩きはじめた。下駄箱の付近は、生徒たちの快活に挨拶する声が飛び交っている。

「ねえ」

黛がエイジのコートの肘のあたりをつかむ。

「ん」

「大友は今頃どうしてるのかな。あたしたちみたいに、びくびくしてるのかな」

「ビビってるとしたら俺ら以上に、だろうな。だって、あんなだけ人を殺しちゃったんだから。ただ、俺は大友を見ていて、最初からぜんぶ覚悟のうえでやってるように感じたけど。……でも、わかんねえ。つうか、わかんねえことだらけだ」

「……………なんか、大友が可哀想」

エイジは息を飲んだ。黛はいまにも泣き出しそうだった。

上履きに穿きかえて、教室棟の二階へあがっていくと、大友が男子トイレからふらりと出てきたから、エイジはぎよつとした。

「おい、大友！」

駆けよって、腕をつかむと、大友は目を落しながら、「……よう」と云った。

「おまえ、大丈夫なのか？　つか、会いたかった！　色々聞きたいことが……」

大友は小さくばんざいをして、

「とりあえず、手、洗わしてくれ」

「ああ……悪い」

大友は水道の水に手を浸すと、ハンカチで拭って、

「聞きたいことって、部活のことだろ？　メール、ちゃんと見たよ。悪いけど、エイジたちのほうで適当にやってくんねえかな。面倒だ。つつんなら、俺から児玉先生に話をするけど」

「ちがうよ」黛は、厳しい眼つきで大友を見上げた。「あたしたち、昨日、あんたのあとをずーっとつけてたの。あんた、倉庫に入っていたよね。ねえ、あれ、どういうこと？　説明してよ」

すると、大友の顔色が一変した。

「後をつけた？　マジかよ……。二人とも、いい趣味してるな」

「おまえがちゃんと話してくれたら、誰もあんな真似なんかしねえんだよ！」

大友は、苦しげに俯いた。

「ねえ、伊勢崎」

黛がエイジの手首をつかむ。さっきの殺伐とした声が、周囲の生徒たちの視線を集めていた。

「そっか、悪い。こんなところで話すわけにはいかねえよな。……とにかく、こっち来い」

エイジが大友の手をひいて非常口から連れ出そうとすると、大友は、

「待ってくれよ。授業が始まっちゃう」

ちょうど始業五分前のチャイムが鳴り、まわりの生徒たちが散りだした。

「休み時間じゃ、ダメ？」

「バックレないって約束するか」

大友が困惑したようにため息をついたのは、かれが本来約束を破れない男で、迂闊なことを言いたくないからだろうと、エイジは思った。

「どうなんだ、約束してくれるのか、してくれないのか」

「……分かったよ」

大友が洪々という風に答えると、エイジは頷いて、手を離れた。そうして、ポケットに手をつ込んで廊下を足早に歩いてゆく親友の背中を、じっと見つめた。

一時限目が終わるとすぐ、三人は非常階段の踊り場にあつまった。大友は手摺に腕をのせて、北風に髪をなぶらせたまま、黙り込んでいる。

エイジは、その後ろ姿にむかって、

「単刀直入に聞くから、正直に答えてくれ」

大友は、あいまいにうなづいた。

「おまえ、神崎と戦うまえに、ひとを殺してでも遂げたいことがあるって、言ってたな。それって、なんだよ」

「ハア？」と、大友は顔半分、ふりかえって、「なんの冗談だ」

「とぼけんなよ。おまえ、神崎のことボコってたろうが。それであいつはぐったりしちまって、今日、学校を休んで……」

大友はさえぎって、淡々と、

「交通事故、だそうだ。重傷を負ったけど、命に別状はないってよ」「んだと……？」

「嘘だと思っんなら、神崎のクラスのやつに聞いてみるって。……」

おいエイジ、おまえどうかしてるぞ」

「俺のこと馬鹿にしてんのか？」

エイジが大友の肩に手をかける。大友はそれを無視するように、北の空へむかつて目を細くする。

「乱暴はやめよう、ね？」

黛があいだに割って入り、

「ねえ、大友。あたしたち、あんたの役に立ちたいの。あんたの支えになりたいの。だから……」

「いいから、放っておいてくれ」

大友は、冷然として呟いた。途端、黛の双眸に、涙が溢れてくる。「そういう言い方、ねえだろ。こっちは、本気で心配してんだ」

大友はやれやれとばかりに溜息をつく、体を返し、手摺にもたれて、

「おまえら、俺が倉庫に行ったとか言ってたけどさ、俺、行ってねえから。だいたい、倉庫でなにを見たわけ？」

「ひとがいっぱい死んでた」と、黛は拗ねた子供のような口調で言った。

大友はふきだして、

「何人くらいよ？」

「五十人はいつてたぞ」

「おいおいエイジ、しっかりしろよ。そんなことが実際にあったら、今頃大騒ぎだろ。けれど、だーれもそんな話はしてねえぞ。おまえら、幻でも見ていたんだよ」そうして、澄み切った瞳で二人をかわるがわる見つめて、「——そう、ホワイト・ブラストみたいなもんさ。とにかく、つまんねえことは丸ごと忘れちまえ」

「……………」

大友はエイジの肩をポンと叩き、

「もついいだろ。じゃあな」

「待てって。そう言われると、なんだか自信がなくなってくる自分

が情けないよ。たしかに、俺、最近へんなものをよく見るんだ。ドッペルゲンガーとか、黒いバケモノとか……。頭がおかしくなってるのかもって、疑ってるよ、正直。さつき、ついカツとなったのも、そのせいなんだ。ごめん。

だから、おまえにそんな風に言われると、そうなのかなって……。でもよ、このまま、おまえを行かせちゃったら、一生後悔することになりそうで、怖えんだよ」

大友は顔をゆがめ、天を仰いだ。「……おまえ、ドッペルゲンガーを見るのか」

エイジは、急に余裕をなくしたような大友の声音を不審に感じながら、頷いた。

「黛、まさかおまえも？」

「……うん」

大友は舌打ちをして、手摺に拳をたたきつけた。

「とつぜん、どうしたの？」

「黛、それにエイジも、俺の話をよく聞いてくれ」大友は、朗読でもするように声を改めて、「駅東の黒田ビルの三階に、『ミッドナイトブルー』というヒプノセラピーの店がある。そこの先生に、ドッペルゲンガーのことを相談するんだ」

「お……おい、ドッペルゲンガーってなんなんだよ。放っておくとどうなるんだ？ おい！」

大友はいきなりエイジの胸倉を掴むと、

「いいから黙って俺の言う通りにしろ。頼むから……」

「わかったけど……おまえ、やっぱりなにか隠してるな」

「そんなことはどうだっていいんだよ。いいか、二人とも忘れるなよ、ミッドナイトブルーだからな。そうだ、今日行け、今日！」

大友は念を押すと、非常口の扉をあけ、逃げるように廊下を駆けていった。

エイジは釈然とせず、二時限目を挟んで、大友のクラスを訪ねたが、大友は具合が悪いと言って保健室へ行ったということだった。早退するつもりだろうと直観し、すぐに保健室にかけつけたけれど、ひと足違いで帰ってしまっていた。

仕方なく、エイジと黛は、学校が引けると、事情のほとんど分からないまま、駅東の、塔婆のように雑居ビルがひしめく一角へ這入っていった。黒田ビルは付近の交番に尋ねてようやく見つかった。モルタルの外壁の、塗装が粉を吹き、雨どいの割れたところから苔が生しているような、頼りない建物だった。

三階の窓に、「ヒプノセラピー・ミッドナイトブルー」と真新しいカッティングシートが貼られ、電話番号が添えてある。エイジたちは消費者金融や麻雀店のロゴが入った硝子の扉をひらくと、動きのあまり滑らかでないエレベーターをつかって、三階へあがった。待合室の白漆喰の壁は、日蔭のせいで陰気な鼠色に染まっていた。そのなかにあつて、オレンジの本棚や薄緑の長椅子がかえって薄気味悪く見える。客はほかにひとりもない。受付のひとに来意を説明し、五分ほど待たされたあと、二人は助手らしき若い女性に呼ばれ、診察室のようなところへ通された。

ブラインドから西日がこぼれて、板敷きの床と観葉植物にひかりの縞を描いている。施術用と思われる革張りの寝椅子が二つ並び、タオルがかけてあった。左手のスチール・デスクには、ファイル・ケースや筆立て、アンティーク風の小物やノートパソコンが雑然と置かれている。そのむこう側のドアが開き、白いハイネックのセーターに、ベージュのロング・スカートの、痩身の女性が入ってきた。かの女は二人に微笑みかけて、

「いらつしゃい。話は太友君から聞いてます。さあ、掛けて」と、丸椅子を勧めた。

ストレートの黒髪が胸のあたりまで垂れている。ノーメイクだが、美人とっていい整った顔立ちだった。それでエイジはかの女の年齢を推測しかねた。透きとおるような白い肌が二十歳を過ぎたばかりのように見える一方、落ち着いた物腰は三十前後を思わせる。

黛はこの小綺麗な女性が大友と知り合いであることが気に入らないらしく、顔に不機嫌をはっきりとあらわし、

「失礼ですけど大友とはどういう関係なんですか？」と、いきなり切り出した。

女性は面食らったように数秒、黛を見つめていたが、やがて意味を諒解したと見えて、

「あなたが心配するような仲じゃないから、大丈夫。だいたい、こんなおばさんと勘ぐったら、大友君が可哀想じゃない。——えっと、黛さん、だよね。そっちは伊勢崎くん？ 初めまして、セラピストの加納八重子です」

「あの、どうも」エイジは落ち着かず、ぎこちなく言った。「ドッペルゲンガーを見るって話をしたら、大友が顔色をかえて、ここを訪ねろっていうんです。で、来てみたんですけど……、ドッペルゲンガーって、やっぱ、ヤバイもんなんですか？」

加納は考えを整理するためか、しばらく膝のうえに組んだ指のあたりに視線を落としていたが、

「心理学では『自己像幻視』^{オトスコレイ}といって、自分の身体意識が外部に投影される現象、という風に説明されているの。その原因はなにか、とか、見たことでどういう影響があるのか、について、色々な説があるけれども、私たちはこういう風に考えている——人間は眠ったり泣いたり、創作したり人と関わったりすることで、ネガティブな感情やストレスを処理するのだけれど、どうしても追いつかない場合が出てくる。そういうとき、抗うつ状態になったり、不眠になったり、精神に諸々の不調をきたす。ドッペルゲンガーはそうした心の失調からくる症状のひとつ、と捉えているのね。

人間の精神にはもともと、安定を保とうとする働きがあって、大

きすぎるストレスが掛かったり、葛藤を抱え込んだりすると、その部分を意識から切り離してしまうことがある。そのひとは一見、心のバランスを取り戻したように見えるんだけど、切り離された部分はネガティブな感情のはけ口を求めて暴走してしまうことがあるのよ。それは、多重人格として現われることもあるし、ドッペルゲンガーのかたちをとることもある。

あなたたちを脅かす訳じゃないんだけど、ドッペルゲンガーを見たひとは死ぬっていう風説、聞いたことあるでしょう？ それは、切り離された精神の一部が、主体を侵食して、そのひとに自殺を促したり、死の危険がせまるような場所に誘ったりするからだ、私たちは考えているの。……あなたたちは、危険なことに関わっているみたいだけど、もしかしたら知らないうちにドッペルゲンガーに誘われているのかもね。

とにかく、あなたたちはドッペルゲンガーから悪い影響を受けないように、それを押さえ込む必要があるわ。対処の方法はいろいろあるんだけど、一時的なものかもしれないから、クスリを使って様子を見るのがいいと思う。症状がなくならないようだったら、そのときにまた相談しましょう」

そうして加納は薬袋をふたり分、抽斗から取り出した。

「わたし、精神科医の免許はいちおう持っているんだけど、ここは病院じゃないからほんとうは薬を処方しちゃいけないの。だから、このことは内緒にしておいてね」

「あ、どうも……」

「ちよつといいですか」と、黛は袋を受けとろうともせず、「ドッペルゲンガーの話はわかりましたけど、先生は大友のことをどこまで知っているんですか。どうして大友がこんな場所を知ってるんですか。教えてください」

加納は苦笑して、

「じつは私も、大友君のことはよく知らないのよ。むこうは私のこと、よく知っているみたいだけど」

「もしかして、あいつに口止め、されてませんか？」

「あのね、」加納はため息をついて、しばらく考え込んでいる様子だったが、「……だめ。やっぱり話せない」

「なにか知ってるんですね」エイジは身を乗り出した。「お願いします、教えてください。あいつはいつたい何をしようとしてるんですか？ この街でなにが起こってるんですか？」

「言えない……だって、あなたたちを危険に近づける訳にはいかななもの。私たちにできることはなにもないのよ」

「大友は超能力みたいなのをつかって戦ってましたけど、あれ、なんんですか？ 先生、ほんとうは知ってるんですよね？」

「……今日はこれまでにしましょうか」と、加納は立ち上がって、隣室へ引き取るうとする。

「お願い、待って」黛は追いつがって腕を掴んだ。「あたしたちに、大友のこと見捨てろっていうんですか？ 先生は大友のこと、見捨てられるんですか？」

加納はとつぜん、柳眉のあいだに皺をよせて、

「言ったでしょう、わたしたちにできることはなにもないの！ それともあなた、大友君のために死ねるとでも言うの」

黛は、静かに頷いた。

「だったら、やってごらんなさい」加納は筆立てからハサミを取り出すと、机に叩きつけ、「これで自分の心臓をひとつきにしてみなさい。できたなら、その男の子にわたしの知っていることを全部話してあげる」

黛は壮絶な目で、加納を睨んだ。

「できないでしょう？ でも、責めてる訳じゃないのよ。こういうのって、仕方ないことなの。わかったら、二人とも帰りなさい」

加納が踵をかえたとき、黛はいきなりハサミをとりあげて、胸に突きたてようとした。エイジはぞつとしながら、咄嗟にその手首を掴んだ。ボクシングで鍛えた反射神経がなかったら、刃先は肉を抉っていたかもしれない。

「ばかつ！ なにしてんだよ、おまえ！」

「離してよ！ あたし、口先だけじゃないから！ 本気だから！」
ハサミの刃は、暴れる黛のてのひらに食い込んで、赤いしずくを
床に散らしている。

「わかつたから、もうやめて」

加納は悲痛な声をあげた。

「ごめんなさい。あなたが、そこまで思い詰めているとは思わな
かった。いま救急箱をもってくるから、手をうえに上げていて。いい
？ 知っていることはちゃんと話すから、もうバカなことしちゃう
メよ」

薫はガーゼと包帯を巻かれた手を、ブレザーの袖のなかに半分隠すようにして、

「約束ですよ」

加納は仕方ないという風に頷いて、救急箱に蓋をし、

「まず、分かって欲しいんだけど、私はこの街のことや大友君のことをなんでも知っている訳じゃないの。大友君がどうして私のことを知っていたのか、そしていったい何をしようとしているのか、それは分からない。私がほんとうの意味で知っているのは、二つのことだけ。『天と地の間には、おまえの哲学など思いもよらないことがあるのだ、ホレーシヨ』というシェークスピアの言葉と、大友君がとてもいい子だっていること。——いえ、誤魔化すつもりでこういう云い方をしているんじゃないの。最後まで聞いて。」

私は、去年まで、政府系の研究所で仕事をしていたの。具体的には、ポルターガイストを引き起こす子供の脳波を測定したり、精神分析をしたりして……要するに、超能力というものを真面目に研究していたのよ。ポルターガイストって、ほとんどの場合、思春期前の情緒が不安定な女の子が引き起こすの。それで、ひとの情緒を不安定にすることで、超能力を発揮することができるんじゃないかと、その研究所は考えていたのね。

その超能力のことを、私たちは『ソート・エフェクト』と呼んでいた。人間はみんな超能力を持っている、なんて言ったら、あなたたちは信じないでしょう？ ほとんどの人は、一生懸命念じてもスプーンを曲げることはおろか、方位磁針を揺らすこともできない。けれど、それは能力のないことの証明にはならない。平均的な人間の超能力は、微弱すぎて測定できないだけなの。それが、ポルターガイストみたいに、極端な感情の動きが加わると、俄然力を発揮することがある。

ところで、あなたたちは、ドッペルゲンガーを見たのよね。さつき、ドッペルゲンガーを見たひとは死んでしまうみたいな話をしたけれど、実は死なない人もいるの。ゲーテなんかがそうね。そういうひとたちの幾人かは、ドッペルゲンガー、つまり意識から離れて自動性をもった精神と、折り合いをつけて、それを創造的な力に変えることに成功したのかもしれない。——実は、ドッペルゲンガーを、『ソート・エフェクト』に利用できるということが分かっているの。ドッペルゲンガーは、ネガティブな感情の渦のなかから生まれてきて、つねに感情の捌け口を求めている。その強力な情念のエネルギーを、超能力に転化させるという訳なの。あなたたちは、大友君が超能力のような力を使っていたと話していたけれど、それは間違いなくこれだと思う。

で、大友君はその力をつかってなにと戦おうとしているのか——ごめんなさい、そのことは本当に知らないの。ただ、それと関係があるかどうか、わからないけれど……最近、黒い皮膚をもったバケモノを見たというクライアントさんが急に増えている。私ね、実は思いあたることがあるの。研究所にいた頃、所内のサーバーが不調をきたして、機密のファイルが誰でも見られるような状態になってしまったことがあるの。すぐに管理部のひとが来てすべてのパソコンを締め切ったけれど、そのとき私、知らずに落したファイルをすでに開いてしまっていて……一枚のPDFファイルに、クライアントさんが訴える怪物とよく似たものが、確かに載っていた。

その研究所についていうのが、どこの外郭組織なのだからわからないようなところだったの。厚生省でもなければ、文部科学省でもない、防衛省でもなかったわ。もしかしたら、ここって、とんでもない国家機密にかかわっているのかもね、みたいに、同僚と冗談を言い合ったりしていたけれど、……今思うと、ほんとうにそうだったのかも知れない」

「『黒い皮膚をもったバケモノ』って、あのときの……」と、黛はエイジに言った。

「貸し倉庫の入口に倒れてたアレか！——先生、その怪物って、白竜団っていう宗教団体と、関係してたりしません？」

「それは分からないけれど、ここには精神的なやすらぎを求めて来るひとが多いから、新興宗教に関わるひとなんかも結構いるかもしれないわね」

「わかった。白竜団はバケモノカルトなんだよ」と、黛は決め付けて、「さっきの、超能力の話ですけど、ドッペルゲンガーと折り合いをつければ、その、能力が覚醒するわけですか？ 折り合いをつけるには、どうすれば？」

「研究所では、特殊な錠剤をつかって制御していたけれど、……あまり薦められない。制御すると言っても、情念を焚きつけて力に変えるわけだから、ソート・エフェクトを使うごとに、ものすごく精神的な負担がかかるの。薬を服用してソート・エフェクトを使い続けていると、発狂することになるかもしれない」

「その薬、先生のところにあるんですか？」

加納は首を振った。「——市販の鎮静剤で代用することもできるんだけど、品切れが続いていて、しばらく手に入らないかもしれない。薬局のおばさんの話だと、白いパーカーを着た若いひとが一時、凄い勢いで買い漁っていたらしいけど。……そういえば、白竜団の信徒ってみんな白いパーカーを着てるわね」

「どうして白竜団の連中が、ドッペルゲンガーを制御するクスリを買い集めてるんですか？」

「分からないわ。麻薬の代わりになるようなものじゃないんだけど、エイジは前髪のなかに指を差しこみ、床の木目に視線を落とした。そうして脳裏に浮かんだのは、神崎のことだった。神崎は、教団から鎮静剤をもらって、超能力を発揮させていたのではないか。

教団が大量に鎮静剤を買い集めたということは、それだけたくさん超能力者を抱えようとしているということかもしれない。大友は明らかに、そうした教団と敵対している様子だった。大友に今後も関わっていくつもりなら、戦う力がなくてはかえって迷惑をかけ

ることになりかねない。エイジは、ここまで考えを進めると、

「ほかに、ドッペルゲンガーを制御する方法はないんですか？」

「古典的でベーシックな方法があるけれど……下手をすればほんとうに死ぬことになる。研究所でも数人の被験者が亡くなった。まるで呪いにかかったみたい。二人は自殺、三人は事故死、ひとりは病死だった」

「それ、教えてください」

「私の話、聞いていなかったの？」と、加納は呆れたようにエイジを見つめて、「ひとが六人も死んでいる方法なのよ。教えられるわけないでしょう」

「先生、さっき、なんでも話してくれるって言いましたけど？」
「加納は額を重たげに支えていたが、

「わかった……わかったわ……」やがて顔をあげ、「あなたたち、どうせこれから、誰になんと言われようと、大友君のことに関わっていくつもりなんでしょう？ あなたたちをどこかの頑丈な部屋に閉じ込めておく訳にはいかないものね。いいわ、説明してあげる。それを聞いて、どうするか決めたらいいわ。」

私たちは、歴史上、聖人と呼ばれた人たちの多くが、『悪魔からの誘惑』を経験している、ということに注目したの。キリストが最後の試練としてサタンから誘惑を受けたことは有名な。キリスト教系に限らず、仏陀も、おなじような試練を経ている。そして、それを耐え抜くと、悟りを開く……。もちろん、宗教的な寓話としての意味もあるんだと思うけれど、ドッペルゲンガーを安定化させる過程は、これととてもよく似ているの。

ドッペルゲンガーが現われたら、じつとその眼を見るの。するとドッペルゲンガーを構成している心的な因子が、そのひとを支配しようとして、幻覚を見せはじめる。甘い誘惑とは限らない。拷問にちかいかたちを取る場合もある。この誘惑に耐え、最後まで沈黙を守りとおせば、そのひとの勝ち。ドッペルゲンガーを意識の支配下

に置くことができる。けれど、心を乱されて我を失ってしまったえば、そのひとは逆に、ドッペルゲンガーに屈してしまい、とても危険な状態になる。さっき話したでしょう？ ドッペルゲンガーを見たひとは死ぬ——その風説どおりになりかねない。

黙りとおすだけなら簡単だって、あなたたちはそう思うかもしれないけれど、誘惑を受けている最中は、夢のなかにいるのと一緒に、本人は幻を見ているとは気づいていないの。現実そのものと感じている。沈黙を守らなければ、という目的意識さえ見失ってしまうこともある。幸い、それを忘れずにいたとしても、そのひとの心のかにドッペルゲンガーが形成されるに至った原因に関係することで誘惑される訳だから、はつきり言くと、心のいちばん弱いところを千枚通しで抉られるような苦しみを味わうことになるわけ。

想像してみて。この試練を耐え抜くには、人生を棄てたり、自分のいのちを断つたりするくらいの覚悟が必要だって、わかるでしょう？」

「それって、どう考えてもアレじゃないスか……」

「でも、耐え切ったひともいるんですよね？」 薫が尋ねる。

「私が知っている限りでは、大友君ぐらい。ほとんどみんな、心身に不調を来たして死んでいく……。試練というより、ドッペルゲンガーの目を見つめることで起こる深刻な事故と考えたほうが適切なくらいよ」

エイジと薫は押し黙った。そうして大通りの自動車の音が部屋に染みこんでくる。やがてドアがノックされ、

「先生、予約のお客さまがお見えです」という声が聞こえた。

加納は二人をかわるがわる見つめて、

「試練に挑むのはやめておきなさい。どうしても挑みたいならまた相談に来て」

エイジが料金のことを尋ねると、加納は要らないと言った。処方したクスリは研究所から持ってきた余りだし、セラピーらしいことはなにもしてないし、他ならない大友の頼みだから、ということだ

った。エイジと黛は礼を言って、サロンを出た。

冬の短い日は暮れがかり、桃色と藍の壮大なグラデーションを、ビル群のかたに横たえている。

帰路を急ぐひとで雑踏し始めた駅東の通りを歩きながら、エイジは、

「ムリだな」と、苦々しく呟いた。

黛はなにも言わなかった。

「大友みたいに、人間のデキてる奴なら別だけどさ、俺らじゃ、とてもじゃないけど、ムリだって」

「うん……」

「黛の気持は分かるけどさ……別の方法、考えよう。な？」

「……………」

「ドッペルゲンガーの目は見ない。これ、約束な」

「あんたも、だよ」

「つか、はつきり言うけど、俺、無駄死にするつもりはねえから。」

——黛おまえ、絶対にひとりで挑戦したりするなよ。いいな？」

「わかってるってば」

バス亭で、エイジは黛と別れた。それからしばらく、人込みに紛れていくかの女を、見守った。

その晩、エイジは久しぶりに両親と一緒に夕食をとったので、父親が幾らか珍しがった。兄弟はいないから、三人きりの静かな食卓である。伊勢崎家には、ほかにミッキーという年老いたゴールデン・レトリバーがいる。エイジは、四歳のときにやってきたかれと、旅行やクリスマスなどの家族の思い出をすべて共有している。そのミッキーも、十三歳という老齢になって、足腰が覚束なくなり、石油ストーブのまえでただうつらうつらしていることが多くなった。エイジがときおり声をかけても、のっそりと首をもたげて潤んだ目をむけるだけで、無愛想なものだった。

それが、この晩にかぎって、のっそりと歩きだし、食事を終えたばかりのエイジの脚に鼻先をすりつけてきた。エイジは老犬の頭をしばらく撫でてやってから、部屋にひきとって、遺書の下書きにとりかかった。

けれども、ボールペンを握ってはじめて、書くことがあまりないと気がついた。両親にはありがとう以外に言うべきことがなかったし、大友や黛には、どんな言いかたをしようともかれらを苦しめることにしかならないように思われて、結局やめにした。かわりに数学の参考書をひらいたが、内容は意識の表層を上滑りするばかりだった。

それでも休憩を挟みながら粘り強く三角関数と格闘し、ふと携帯電話を見ると、午前一時にさしかかろうとしていた。椅子にもたれて、眉間のしたを指で揉みほぐし、それから目覚ましのスイッチをいれようとベッドを振りかえって、アツと声を漏らしそうになった。ドッペルゲンガーが、五十センチと離れていないベッドに浅く腰かけて、エイジを見つめている。睫の一本々々、生え際の産毛まで瞭然としていた。ドッペルゲンガーが着ている薄墨色のスウェットは、エイジがボクシングに没頭していたころによく身につけたもの

だった。かれはロード・ワークから戻ってきたばかりのように、顔や喉元にうつすらと汗をうかべていた。

エイジはとつぜんのことに胸を突くような動悸を起こしたが、呼吸を整えながら、意を決してかれの黒い瞳をじっと見つめた。そこに、いつものような、ひとを小ばかにした笑みはない。かわりに、双眸のむこうに底知れない虚無が横たわっている。縹渺たる薄闇の海原を連想させる、寂しくて虚ろな目だった。そこに吸い込まれていくような感覚が萌し、すこしずつ大きくなっていく。

黙って見つめるうち、酒に酔ったように頭がぼんやりとした。ふと気づくと、見慣れた部屋は消えうせ、闇が辺りを蔽いつくしていた。そうしてドッペルゲンガーのふたつの目だけがくつきりと浮かんでいる。毛細血管、睫、ピンク色の目の縁——それらをつぶさに見つめていると、ふっと意識が遠くなった。……

日比谷公会堂で友人とコンサートを観た帰りのことが、鮮烈に浮かびあがった。八尋市内で地下鉄に乗り換えたときにはすでに十時をまわり、車内の人影は疎らだった。途中の駅で電車がとまると、立ち上がった隣の男が、雑誌を置いていった。エイジは暇つぶしのつもりでそれに手を伸ばし、なにげなく視線を落して、胸をつまらせた。それはスポーツ雑誌で、表紙を占めているのはファイティン・グ・ポーズをとった若いボクサーだった。見出しには——昨年十一月、プロテストに合格し、四戦四勝、すべて三ラウンドまでにノックアウトを決めている超高校級の……などである。エイジは、ひとつ年上のかれのことをよく知っていた。去年の夏、スパarringでかれと互角以上に戦い、むこうのトレーナーに息を飲ませたものである。記事の終わりのほうに、かれが遠くないうちにフライ級のタートルマツチに挑み、歴代最年少のチャンピオンになるだろうという、評論家のコメントが紹介されていた。

エイジは舌打ちして、雑誌を力任せに捻じると、思いきり床に叩きつけた。あの事件がなかったら、表紙に載っていたのは自分だっ

たかもしれない——そんな風に思うと心の底からドス黒い衝動がつきあげてくる。

駅を出ると、脚は自然に、かつて通っていたジムの近くへとエイジを運んでいった。夜空のした、ガラス張りのジムは不夜城のように輝いていて、サンドバックに拳を叩き込んだり、縄跳びをしたりする練習生の姿がはつきりと見えた。エイジも、つい去年まで、そこで毎晩汗を流していたけれども、いまでは敷居を跨ぐことさえ許されていなかった。エイジは惨めな気持ちをかみしめながら、顔見知りのトレーナーや練習生たちをしばらく見守った。そうして、後ろ髪を引かれながら帰路についた。

ボクサーになりたいと強く意識するようになったのは、いつごろだったろう——エイジはよく想い出せなかったけれど、自分に大きな影響を与えてくれた人のことだけは、忘れられない。それは十歳離れた従兄だった。小学校に上るか上らないかの夏休み、山梨にある父の実家で、はじめて顔を合わせた。かれは一見、寡黙で穏やかな人のように感じられた。ところが、エイジが近郷の子供たちに虐められて泣きながら帰ってくると、はじめのうちは優しく慰めてくれたが、抵抗せずにやられっぱなしだったと言うと、顔色を変えた。その怒りは、虐めた子供たちにはなく、エイジに向けられた。

「なんでやりかえさないんだ、あん？」

エイジは戸惑った。むこうは六人組だったし、年もひとつふたつうえだった。なにより、ずっと穏やかだった従兄の豹変ぶりが恐ろしかったのである。

「全員、ボコボコにしてこい。詫びを入れさせるまで帰ってくんない！」

そうして外に放り出された。エイジは虐めっ子と従兄との板挟みになって、その日は夕方まで橋のしたに隠れて泣いてすごした。心細くて仕方なかった。

翌日になると、従兄はこんなことをエイジに話して聞かせた。——立ち向かっていけば、むこうだって絶対にビビる。だって、エイ

ジくんとおなじ人間なんだから。あとは我慢較べだ。大丈夫、年下の子をよつてたかつて虐めるような連中は、心が弱いに決まっているから、エイジくんさえ絶対に引かなければ、勝てる。

そうして従兄は、効果的な殴りかたを丁寧に教えてくれた。エイジは言われたとおり、従兄のてのひらにむかつて、幾度も拳を叩きつけた。従兄はとうとう、たまりかねたように手のひらを振りながら、

「いい感じ。エイジくん才能あるかもよ。よし、行ってこい」と送り出してくれた。

エイジは歯を食いしばり、狂犬になったつもりで、六人組に喧嘩を売った。最初は小ばかりにしているような雰囲気だった子供たちが、エイジが一昨日とは様子が違うと分かると、少しずつ後にひくような態度を見せはじめた。エイジは、従兄の言ったとおり、彼らがエイジを怖がっているのだと直観した。エイジはなかでも背のおおきな子を選んで思いつき殴りつけ、泣かせ、詫びを言わせた。すると、ほかの五人は一目散に逃げてしまった。

心臓をどきさせたまま帰ってきて、顛末を従兄に報告すると、かれは抱きしめるようにして喜んでくれ、なんども頭を撫でてくれた。エイジはこのときほど誇らしい気持ちになったことはなかった。そうして、勇気をふりしぼって怖いものと戦うことには、魂が震えるほどの価値があると思った。従兄はそのことを自分に教えたくて、心を鬼にしたのではないか——幼いなりにそう感じていた。エイジはファイティング・スピリットを、この従兄から学んだのである。

その従兄が、プロボクサーを目指していると知って、エイジはかれへの憧れの延長上に、自分の夢をそつと置いた。従兄はエイジが十歳のときにプロテストに合格し、みるみる実績を積んでA級ライセンスを取得した。チャンピオンになるという従兄の夢がいよいよ絵空事ではなくなって、エイジはいても立ってもいられないくらい興奮した。従兄はタイトルマッチの前座試合に出ることになり、エイジは両親や親戚と一緒に、応援にかけつけた。

エイジは、従兄を英雄のように思っていて、かれが負けるとは想像していなかっただけに、試合には衝撃を受けた。一ラウンドから動きに精彩を欠いた従兄は、顔面に次々と拳を叩き込まれ、あつという間に顔半分を血と汗でまみれさせた。眼つきはうつろで、顎からはマウス・ピースを噛みしめる力が感じられなかった。エイジはえもいわれない嫌な予感に駆られて、声を振り絞った。そのとき、従兄は足を取られたように転倒し——二度と起き上がらなかった。くも膜下出血を起こしていたのである。

——そうだ、あのときだ。

エイジは目を見開き、思った。造花に包まれた従兄の肖像を見上げて、しゃくりあげながら、誓ったのである。虐めっ子をやりこめただけで、あれだけ喜んでくれた従兄である。自分がかれの果たせなかった夢を遂げれば、最高の供養になるに違いない。自分が従兄をどれだけ敬愛していたか、分かって貰えるに違いない。エイジはこの考えに燃え上がった。そうして、葬式が終わると、伯父に無理を言っ、グローブを持ち帰らせてもらった。

ボクシングに必要なものをすべて片付けてしまいたいま、エイジがただひとつ保管しているのはこの形見のグローブだった。練習に没頭していた頃は、就寝するまえに箱の蓋をひらいてピエロの鼻のように赤々としたグローブを眺めるのが日課だったけれど、いまではつらくて手に取ることさえできなかった。かつての夢の象徴には、望みを断たれた苦しみと、従兄のダウンする寸前の惨めなすがたが詰まっていた。

エイジはうめきをあげそうになった。ドッペルゲンガーの亡霊のような顔に、内出血のあざが無数に浮かび上がっていき、やがて従兄そのものとなった。そうして、かれの双眸には怯えの色があつた。従兄はあのととき、相手との厳然たる力量差を痛感し、脳の奥には得体の知れない激痛を抱えて、瞬間的にはほとんどパニックというべき状態にあつたに違いない。——勇気というのは、一種の狂気である。勝てるわけがないと思っていた年上の虐めっ子たちに立ち向か

ったことのあるエイジは、そのことをよく知っている。痛みや喪失への恐怖を克己心で押さえつけるのではない、狂うことで忘れるのである。立ち止まって考えれば、狂気は消失し、とたんに恐怖にとられてしまう。それがおそろしいから敢えて狂い続けるのである。従兄はこの狂気を奮い起こして、死への恐怖を追い払おうとしたに違いない。だが、実際のところ、かれはボクシングを継続するような精神状態ではなかっただろう。スリップする寸前の表情に、それが端的に現われていた。恐らくは——凄まじい恐怖を噛みしめながら、顔面に次々と拳を受けていたのである。

眼前の従兄が血の涙を流している。くちびるは蒼褪め、齒はガチガチと鳴り、救いを求めるようにエイジを見上げている。エイジは思わず、口元に手をあてた。顎が震えていた。目に涙が溜まっていたのがわかる。けれどもそれは哀れみや悲しみのためではなかった。従兄の心中を思うと、怖くて仕方なかったのである。エイジは従兄のこの表情をあえて考えずに過してきた。そうして、従兄の無念を晴らすという、美しいが空虚なストーリーに酔い、チャンピオンになる夢をがむしゃらに追った。けれども、？悪魔的な恐怖？は、心の深淵の底から、エイジを静かに見つめつづけていたのである。……

幾度も、声を漏らしそうになった。エイジには、ドッペルゲンガの瞳が恐怖の概念そのものに感じられた。そこから伸びる無数の黒い触手が、耳や鼻、口から侵入してきて、エイジの心臓を引き千切ろうとするかのようにだった。エイジはほとんど茫然自失したまま、沈黙をつづけた。それは確固たる意志にもとづく無言ではなく、言うべきことがない、ただ嵐が過ぎ去るのを待つしかないという消極的の沈黙だった。ドッペルゲンガーと戦っているというよりは、運命を天に委ねてただ祈りを捧げているような心地だった。

眠るように死ねるのなら、こんな苦しみはさっさと終わらせてしまいたい——エイジの精神に深く食い込んでくるのは、恐怖よりむしろそういう形の誘惑だった。そうして、従兄の虚ろな目の奥に

も、エイジはおなじような誘惑の存在を感じとった。けれども、従兄は意識を喪失するまで立ち続けた。降参してすぐに病院で見てもらいたいという、きつとあつたに違いない衝動を、従兄は最後までかみ殺した。

そのとき、エイジの胸に衝撃が走った。従兄は恐怖に翻弄されてはいたが、屈したわけではなかった。恐怖に打ち勝つて、前のめりに死んでいったのである。ひとたびリングにあがって、自分から降参するボクサーはひとりもない。それは、誰もが相手を殴るためではなく、ファイティング・スピリットを極限まで研磨するためにリングにあがるからだ。エイジはその根本義に突然気づいたのである。従兄はただ、死ぬことによってしか勝利できないその勝負を避けなかった、ボクサーの本分を貫いた、それだけのことなのだ。むしろ、エイジが従兄を痛々しいと思ったり、哀れんだりしたら、従兄は困つたように襟足を搔くかもしれない。

従兄は、偉大な勝利者だった――そのことに気づくなり、エイジは名状しがたいやすらぎに包まれた。従兄の顔をしたドッペルゲンガーは、穏やかに微笑んでいる。いつのまにか部屋を被っていた闇は払われ、カーテンの隙間には冬の朝のひかりがわだかまっていた。エイジは立ち上がって、ドッペルゲンガーを抱擁した。そうして、自己像の腕もまた、エイジの背中を穏やかに包んだ。

ドッペルゲンガーは、懐かしいあの物静かな声で、「よく頑張ったね、エイジくん」と言い、風に吹かれたように消えた。階下の台所からは、俎板のうえで野菜を刻む小気味いい音が響いてきていた。

エイジは図書室で借りた桜の園を、部室にもちこんで読みはじめたけれども、女地主のラネーフスカヤが馬車で帰ってきたところで早くも誰が誰だか分からなくなり、億劫になつて顔をあげた。するとドアがサツとひらいて、黛がだしぬけに、

「あんた、知ってる？」

「なにが」

黛は携帯電話を操作しながら駆け寄つてきて、

「この動画なんだけどさ……」と差し出した。「スカイプのネットラジオを見たひとがユーチューブに転載したんだって」

エイジは要領を得ないまま、ハートや星のストラップをたくさん提げたその携帯を受け取つて、液晶モニタを見つめた。

ボーダーの長袖シャツを着た、髪の高い男が映っている。男は、——これから白竜団のテンプルに突撃しますがなにか？ と手書きしたスケッチブックを立てて、咳払いをした。

『いや、真面目な話なんすけどね——』と、かれは話しはじめた。『うちのヨメがあのかかるの集会に出かけていったまんま帰つてこないんすよ。えつと……先月の十六日から。で、警察に相談したんだけど、いままで家出したことがあるかつて訊かれて、あるつて正直に答えたらなんかもう帰つてくれみたいな空気になつちゃつて。ネットで被害者家族会とか搜したけど見つからないし。しょうがないから、これから突撃してきます。で、あいつらヤバいつて噂じゃないスか。俺も、ヘタしたらぶつ殺されると思うんすよね。だから、ここに記録を残しておきます。俺が帰つて来なかったら、あいつらにヤラレタと思って下さい。じゃ、アデユウ！』

エイジは目を細めて、黛を見ると、かの女は、

「アップされたのが昨日の夕方なんだけど、このひと、帰ってきてないんだって。で、この動画はユーチューブから削除されてしまっ

ていて、いま映ってるのは、このひとの友達のサイトに載ってるやつなの。それでね、このひと、カラー・ギャングのOBで、所属していたグループのひとたちがブチ切れて、白竜団のテンプルに今晚、殴りこみするって大騒ぎしてるんだって」

「おまえ、よく知ってるな」

「だっていま、掲示板ですごい祭りになってる」

「……………」

「ねえ、あたしらも行ってみない？　なにか分かるかも」

「あんな、」エイジは携帯電話を返し、気が乗らないというように窓のほうを向いて、「カルトとヤンキーの揉めごとなんか見に行きたってしょうがないだろう」と、言いはしたが、脳裏には、もしかしたら大友も来るかもしれないという考えがチラついていた。

「違うって、あたしたちも乗り込むの。あたしの友達のカレシが、カラー・ギャングに入ってて、そのひとに話したら、連れてってやつてもいいって。そのかわり、なんでもいいからオレンジのものを身につけてこいだって」

「やめとけて。おまえ、車に押し込められて犯られちゃうぞ」

「だからあんなのこと誘ってるんでしょう。大丈夫、サングラスかけて帽子被ったら女だって分かんないと思うし……………」

エイジは渋い顔をして、

「……………つか、マジで？」

黛は頷いて、マジで、と言った。

改造のセルシオがホイルを軋ませて停まったのは、きらびやかに輝く市街の夜景から空間を抉り取ったように暗然とした、大きなコンクリートの建物のまえたった。所有権の問題だから再開発から取り残され、幽霊ビルなどと呼ばれて、若者が肝試しにやってくることで有名な場所だったが、いつからか白竜団の人間が入り浸るようになり、いまでは教団の施設のようになってる。

練馬と名乗るドレッド・ヘアの男は、サイドブレーキを引き上げ

ると、後部座席のエイジと黛をふりかえって、ニタツと笑い、

「着いたぜメーン」と言った。それから助手席の、スポーツメイカのロゴのような剃り込みを入れた男と、八尋市最大のカラー・ギヤングをデイスってるとどうなるか思い知らせてやるなどと言って盛りあがり始めた。

「……友達のカレシっていうのはどつちよ？」

エイジは上腕にオレンジのバンダナを巻きながら、そつと黛に尋ねた。

黛はキャップを被り、オレンジの襟巻で口元を隠すようにしながら、

「えつと、練馬サン。カッコよくて超おもしろいって、友達は言ってたんだよ……」

「まあ、タチの悪そうなひとたちじゃないし、べつにいいんだけどさ……」

エイジはセルシオから降りると、乱雑に停められた車やバイクのヘッドライトが交錯するなかに立って、闇夜にむかって聳える？ テンプル？を見上げた。

二階や三階の窓から、教団の紋章を描いた旗をかけたり、スローガンを殴り書きした垂れ幕をおろしたりしてあった。それらがビルの上に充溢したひかりを下から受けて風に戦っている様は異様だった。まるでこの一角だけが、時代から隔絶されてしまったかのようだった。

一階の出入口はすべてシャッターが下りている。脇の、地下駐車場へ続く通路に、オレンジのものをどこかに配した尖ったファッションの男たちがぞろぞろとつめかけていた。手には鉄パイプや金属バット、角材などをさげ、口々に恫喝するような声をあげている。

エイジと黛は、それらの連中にそつと混じって、地下駐車場の奥からガラス張りのドアを抜け、砂埃を被ったエスカレーターをあげり、建物のなかへ入っていった。

柱や建築資材のようなものに括りつけられたライトが、辺りをま

ばゆく照らしている。男たちは、そのひかりを浴びて、ガラスやコンクリートの破片の散乱するフロアを歩いてゆく。

エイジはふと脚をとめた。威勢のよかった行列の前方のほうで、急に静かになったからである。かわりに、妙などよめきが起きている。

「なんだろう」と、黛はサングラスを額にあげて、人込みのむこうを見透かすように目を細くする。

「わかんねえ。とにかく、行ってみよう」

「うん」

エイジは瓦礫を踏んで行列をまわりこむように進み、カラー・ギヤングたちを立ち止まらせているものを目の当たりにして、愕然とした。

男が、椅子に縛り付けられている。ボーダーのシャツを血塗れにした、髪の高い男である。男は事切れて、がつくりと頂垂れていた。

「ねえ、伊勢崎。このひとつて……」

「ああ、間違いねえ。動画のひとつだ」

エイジがそう見てとったとき、逆光の闇から、無数の白い人影が亡霊のように現われて、カラー・ギヤングたちに嘲るような声を浴びせた。

わずかばかりの罵声の応酬を経て、乱闘の始まる気配が濃くなってきた。エイジには、フードを被った教団の連中が半殺しにされるのは確実と思われたが、鉄パイプや木刀をふりあげて踊りかかろうとするカラー・ギヤングを目のまえにしても、信徒たちが顔色ひとつ変えないのを見て、不気味に感じた。……

転瞬。

先頭にいる男のパーカーが突風に煽られたかのようにばさばさと鳴ったかと思うと、殺到した五六人のカラー・ギヤングが地雷でも踏んだように弾き飛ばされた。

フロアを転げるブルゾンの男の、肘から先がなくなっている。これは断面を抱えこむようにして、のたうちまわった。飛沫いた血が、

床と柱に凄惨な模様をえがいている。

他の連中も、瓦礫に叩きつけられてぐったりしたまま動かなくなったり、頬を裂かれておびただしく出血したり、あるいは首からうえを吹っ飛ばされたりしていた。

カラー・ギャングたちは、ほとんど瞬間的に、恐慌に陥った。練馬とその連れが、我先にと来た道を駆けもどると、それが呼び水になって、男たちは雪崩をうって逃走する。

「ぼうつとしてんな。俺らもばつくれんぞ」

エイジは黨の手をひいて駆けた。

靴音がコンクリートに高く反響するうしろから、——ひとりも逃がすな！ という教団の人間の指図する声が聞こえてきた。エイジはゾツとしながら、ライトアップされたフロアの中央部から離れていき、柱の陰の暗がりにも身をひそませた。

「ちよつと、なに？」

黨が押し殺した声をあげる。

「様子を見たほうがいいかもしれない……ほら」

エイジはエスカレーターの辺りを指さす。そこにはすでに、白いパーカーの集団が立ちはだかっていた。挟み撃ちにあつた格好のカラー・ギャングたちは、逆上したような怒号をあげて信徒に襲いかかる。——そのうち幾人かは包囲網を突破してエスカレーターを駆け降りていったようだが、少なくとも者が得体の知れない力に吹き飛ばされ、あるいは潰された。辺りが、みるみるうちに鮮血で染まっっていく。エイジは顔をしかめた。

「あ……あ……」

振り返ると、黨はよほどショックを受けたのか、蒼白になり、身体を震わせている。

「おい、しつかりしろ」

エイジは黨を揺すりながら、周りを見まわした。戦意を喪失したカラー・ギャングが、蜘蛛の子を散らすように逃げていき、それを、白いパーカーの男女が追いかけていく。あちこちの暗がりから、暴

行の騒音と痛々しい絶叫があがった。エイジはフロアの奥になるほうが人の気配の薄いことに気づいて、そっちにむかって黨の腕を引いたが、

「ヤダ！ 出口とまるで逆じゃん」

かの女は怯えきった目でエイジを見上げた。

「この状況でエスカレーターへ近づいていたら間違ひなく殺される。いまはとにかく、教団の奴らをやりすごすことだけを考えよう、な？」

「イヤッ、離してよ」

エイジは焦燥しながら、黨をどう宥めようか考えているうち、足音がこつちに近づいていることに気がついた。柱の背から覗き見ると、白いパーカーを着た痩躯の男が、ライトの眩しい光を浴び、目をぎらつかせて辺りを窺っている。

その男の様子に気をとられているあいだに、黨に手をふりほどかれ、逃げられてしまった。

「あっ、おい、待てっ」

エイジは舌打ちをしながらコンクリートの破片を拾いあげると、柱の陰から飛び出していき、黨のあとを追いはじめた白いパーカーの背中に力任せに投げつけた。男はのけぞり、血走った目をエイジにむける。

エイジは照明のしたを転げるように駆けてゆく黨の無事を祈りながら、

「オラ、かかってこいよ」と、男にむかつて中指を立てた。

男は仲間に合図をおくりながら、猛然とせまってきた。エイジはそのむこうからも複数のパーカーが集まってくるのを確かめると、フロアの奥をめざして走った。体力には自信がある。最悪、逃げ場をうしなうことになっても、ドッペルゲンガーの試練に耐えきったことで、超能力を発揮できるかもしれないという漠然とした考えもあった。

明かりから遠ざかると、目が思うように闇になれてくれず、たび

たび瓦礫に躓きそうになった。裏口から外へ逃げるつもりだったけれど、どこまで行っても打放しのコンクリートが続き、非常口らしきものは見あたらない。エイジはやむなく、幅の広い階段を駆けあがって、まったくの闇に埋もれた二階のフロアを、手探りで進んでいった。

依然、背後には、教団の連中の騒がしい気配があつた。かれらはエイジの居場所を見失っているらしく、その苛立ちが殺伐とした声に現われている。エイジは息を潜めながら、身を隠せるところを求めて四顧した。

そうして目についたのは、帯状の淡いひかりだった。近づくにつれて、それが僅かに開かれたアルミ製の扉から洩れているものだと気がついた。中をのぞくと、二十畳くらいの広いスペースに事務机や棚が並んでいて、ガラスの破れた窓から月光と街のネオンが差し込み、案外明るかった。エイジは後ろ手にドアをゆっくり閉めて、明かりの届かない隅のほうの、机の影に隠れた。

壁のむこうから、ひとの頻りに行き来する物音が聞こえてくる。エイジはそれに耳を澄ましながら生きた心地がしなかった。やがて人の気配が遠ざかると、窓辺に寄って、外を眺めてみた。向かいのコンビニのまえに野次馬らしい若者がたくさん集まって、建物を見上げている。恐らく、ネットの掲示板を見て興味をそられたのだろう。エイジはその掲示板に惨状を訴えれば、だれかが通報してくれるかもしれないと考えて、携帯電話を取り出した。――が、夕方には確かに立っていた関係スレッドがすべて削除されてしまっていた。エイジはとっさに、したで殺されていた男の動画が消去されたことや、貸し倉庫の一件が世間からまったく無視されたことを関連づけて考えてみたが、ひとつとして憶測の域を出るような仮説は浮かんでこなかった。ただ暗躍する不気味な影の存在をはっきりと感じ取って、ゾツとなった。とりあえず黨に状況を尋ねるメールを送って、コートの内ポケットに携帯を仕舞ったとき、背後でドアがガチャリと鳴った。

振り返ると、闇に、パーカーのフードを被った女がほの白く浮かんでいる。

「見いつけた……」

かの女は無邪気な声をエイジに投げかけ、蒼然と月光の射すほうへ歩き始める。

エイジは息を飲んだ。女のロングブーツが薄明かりのなかで、突然、鳥の脚のように変化したのである。身体は漆黒の羽毛に包まれ、背中には大きな翼が生えていた。顔は人らしい形をとどめていたが、皮膚は鱗のような質感に変わり、眼は赤く爛々としている。

それが窓の傍を過ぎると、パーカー姿の女に戻る。女はそうして、化物になったり人間の姿に戻ったりしながら、エイジに近づいてきた。

「おまえ、ナニモノだよ……」

女は不気味に微笑んで、

「どうせ死ぬんだから、聞いたってしょうがないでしょ」と、その足が止まった。表情が急に引き締まる。「この感じ……あんた、ソート・エフェクト使いなの？」

エイジは答えようがなく、黙っていた。

「わかった……？スピリット？を目覚めさせたばかりで、力をうまく発動できないんでしょ？……悪いけど、殺すよ」

異形の女は腕をのべて四本の指をひろげた。そこにまばゆいひかりの球体が現れ、幾筋ものレーザーが拡散して襲いかかってくる。

エイジは間髪をいれずに飛び退いた。目前に光があつまり、床を砕く。

わき起った熱風が、エイジの髪をふわりと撫でる。

「ウアア！」

女は奇声をあげると、非現実的な速度で突っ込んできた。くりだす手刀が青白い光を帯びている。エイジはしゃがんでそれをかわすと、カウンターの要領で拳を女のボディに叩きこんだ。――が、女にダメージを負ったような気配はなく、それどころか態勢を崩すこ

とさえなく、ぎろりと赤い瞳を剥いた。

女が独楽のように身体をひねったと思った瞬間、エイジはまわし蹴りをわき腹に食らい、事務用の棚に背中から叩きつけられた。息がつまり、星がチラつく。

骨に染みるような激痛に耐えて身体を起こしながら、女が飛ばしてきたようなレーザーを強く念じてみるが、一条の光も起こらない。昂じるばかりの焦りを嘲笑うように、女はゆっくりと迫ってくる。

「じゃあね」

女は小ばかにするような調子で言うと、ふたたびエイジにむかつて手のひらを広げた。そこへ、光の粒子が集まって、球形を成していく。

エイジが観念して目をかたく閉じたとき――

（念じるんじゃない、想像するんだ……）という、謎めいた内なる声が聞こえてきた。（おまえは敵のソート・エフェクトを弾き返すことができる。眼のまえに頑強な壁を思い描くんだ……）

「こ………こうか？」

エイジは鋼鉄の板を克明にイメージした。金属性の光沢、冷たい肌触り、重量感――そこへ、鈍い衝撃とノイズが走る。転瞬、女が痛々しい悲鳴をあげた。エイジは目を見開いた。黒い異形は身体じゅうから赤黒い体液を吹き、うずくまっている。エイジは直感的に、女の攻撃をそっくり反射することに成功したのだと思った。

立ち上がると、ふたたび内なる声が耳に響いてきた。

（ソート・エフェクトは防御だけでなく、むろん攻撃にも使える。

灼熱の焰をイメージしてみろ……）

言われたとおり、火を吹く溶鉱炉を思い描くと、とつぜん、エイジの眼前に赫々と輝く火柱が起こった。女はその焰に飲み込まれて、断末魔をあげる。

そうして火の粉を吹き上げながら散りゆく骸をまえに、エイジは強烈な虚脱感に包まれた。

（心配するな。いきなり大きな力を放出したから、疲労しただけだ

……)

また、内なる声である。

「なんなんだ、あんた」

（おまえの？スピリット？だよ。聖守護天使とかハイヤーセルフなどと呼ぶものもいるが、細かいことはどうでもいい。要は、おまえを支える存在だ。名は召喚者——つまりおまえが付けることになっている。好きに呼べばいい）

「あんたを召喚した覚えはないが」

内なる声は、笑った。

（ご挨拶だな。未明に命がけの格闘をしたばかりだろう。もう忘れたのか）

「……ドッペルゲンガー、なのか？」

（過去形で訊かれたなら、イエスと答えられるが。——それからひとつ忠告しておこう。調子に乗って俺にイタい名前をつけるとあとで後悔するぞ）

エイジは苦笑した。

「あんたのことは、ケイって呼びたい。構わないか？」

（従兄の名か。……ああ、もちろん）

黨からメールの返信がない。エイジはそれを黨がこの建物から逃げ切れていない証だと考え、眩暈を押して部屋を出、来た道を戻り始めた。階段を下り、スプラッター映画さながらに死体の散らばるフロアを横断し、エスカレーターの付近に差し掛かったとき、下層からドオン……という異様な物音があがった。

コンクリートの破片が天井から落ちてきて、ぱらぱらと鳴る。エイジはほとんど飛ぶようにしてエスカレーターを駆けおりた。

照明のオレンジの光が、広漠とした地下駐車場に薄く降りている。コンクリートの支柱の連なるむこうに、エイジは幾つかの人影を確かめた。ガラス張りの回転ドアを抜けると、ふたたび重低音が響いてきて、支柱のひとつが鉄球をぶつけられたように折れ曲がった。

近づくにつれて、様子が判然としてきた。黛が、パーカーを着た若者たちにかこまれて、肩で息をしている。曲った支柱の根元には、上半身のぐちゃぐちゃになった死体が転がっていた。

「……ああッ！」

黛は髪をふりみだして、腕を払った。すると、——駐車場の地面に亀裂が広がっていき、その先にいた信徒たちが瞬間的に身体を針金のように捻じ曲げられ、血を噴出して崩れた。

衝撃波の直撃を免れた教団の連中が、逆襲とばかりに躍動する。

「あぶね！」

エイジは地を蹴ってパーカーのひとりに肉薄すると、拳に火焰の渦をつくり、側頭部に叩きつけた。振りぬいた先で、パーカーの頭は首から千切れて火の玉のようになっていた。

拳に残った焰を、エイジは、黛に迫ろうとする連中の背にむけて放射した。数匹の大蛇のように疾走する火炎が、パーカーを抱くように絡みつき、シャワーさながらに火の粉を散らす。

連中は火だるまになってのたうち、絶叫していたが、やがて動かなくなった。

黛はエイジと目をあわせるなり、顔をくしゃくしゃにして、嗚咽を始めた。

「よかった……生きてた……」

エイジは微笑んだ。そうして、危機を脱した安堵から、疲労感を拭えなくなり、その場に座り込んだ。

「ごめんね……あたしが無理言って誘ったのに、あんたのこと置いて逃げちゃって……最低だよ……」

「気にすんなって。とにかく、無事でホッとしたよ」

「うん……」

黛はエイジの傍に座ると、マフラーで涙を拭いながら、

「……あれ？ 帽子、なくしちゃった」と言った。

「おまえ、ドッペルゲンガーの目、見たな」

「あんだだつて」

「よく耐えられたな。俺はなんとも叫びそうになった」

「あたしも。出ていったお母さんとの想い出がいっぱい押し寄せてきて……。でも、大友のことを想って、耐え抜いたよ。あんたは、なにを見たの？」

「死んだ従兄のこと」

「そっか……」

エイジは、地下駐車場の出入口のほうをふりかえった。遠くに、サイレンの音を聞いたような気がしたのである。

「やばいな」

「これって、警察？ 近づいてきてるよね。あんだ、立てる？」

「無理っぽい」

黛は脱力したように微笑んで、「あたしも」

エイジは大の字になって、天井のオレンジの輝きを見上げた。そうして、どこことなくミッキーの遠吠えに似た音色の押し寄せるのを感じながら、ゆっくりと目を閉じた。

夢も残らない深い眠りの谷間に、断片的の記憶がある。エイジはまぶたと睫のむこうに人工の乾いた光を感じながら、その断片をパズルのように並べ始めた。

あの地下駐車場で警官たちに囲まれ、パトカーに乱暴に乗せられて、警察署内の留置所に押し込まれた。そのとき、携帯電話は取り上げられてしまったが、なぜか名前や住所は一切聞かれなかった。一緒に留置所に入れられた、カラー・ギャングの生き残りたちは、頭を抱えてうずくまったり、感冒にかかったように震えたりしていた。無惨に人が殺されるのを目の当たりにし、自分もそうなりかねない恐怖を味わったのだから、ショックを受けるのも無理はない、とエイジは考えながら、こみ上げてくる虚脱感をどうすることもできず、それからの時間のほとんどを寝てすごした。

鉄格子のむこうを人が行き来する慌しい気配に、ときおり眠りを妨げられた。そうして、オレンジのスカジャンやダウンジャケットを着た青年が、スーツ姿の大柄な大人たちに挟まれ、連れていかれるのを、幾度か目撃した。エイジのいる雑居房の扉もたびたび開かれた。その度に、一人二人とつれていかれ、エイジが喉の渴きを覚えて身体を起こして、気づいてみると一人きりになっていた。

警察に逮捕された人間がどういう経過をたどって裁判なり釈放なりに至るのか、エイジはよく知らなかったが、いずれにしても、あの廃墟ビルの一件が、尋常の手続をもって処理されと考えることは難しかった。貸し倉庫のことがある。ネットの書き込みや動画のことがある。それらの事実や情報を隠蔽しようとする存在の影はよほどに大きいと思わざるを得ない。その触手はきつと警察にも及んでいるはずで、エイジはこのまま大人しく囚われていることの危険を考えずにはいられなかった。

格子に近づいていって、そつと廊下を眺める。―― 黛はいま、ど

うしているだろう。もし黨が脱出を試みるようであれば、エイジは呼吸を合わせるつもりでいた。それを遂行するだけの力が、いまの二人にはある。そうしてエイジは、国家権力へ判然として敵対した先に待っている運命がどんなものかを想像して空恐ろしかった。

警察官は命がけで任務に当たるよう教育されていると聞いたことがある。かれらはエイジと黨の脱出を食い止めるために身体を張ってくるかもしれないし、場合によっては拳銃を使うことも辞さないかもしれない。警官殺しは重罪である。エイジは目のまえが真っ暗になるような気分だった。

鉄格子のあいだから廊下の先を見つめているうち、急に反対側のほうで騒がしくなった。振り返ると、手錠をかけられた練馬が、背広の男たちに悪態をつきながら連れて行かれるところだった。一瞬だけ、視線が交錯した。それから練馬はごく自然に眼を逸らして、背広の男たちと揉みあうようにしていたが、エイジの眼前までくると急に倒れるような様子を装って身体を鉄格子に寄せ、

「……おまえと黨のことは絶対に売らねえ。だから、早まっちゃいけねえぞ」と、囁きかけてきた。

「えっ……」

「いま顔に『ポリ公どもを皆殺しにしてやる』って書いてあったぜ。馬鹿なことはやめとけて。惚けとおせばすぐ釈放になるんだからよ」

練馬はひとさし指と中指を立ててピツと振り、達者でなメーン、とクールに言い残すと、背広の男たちに引きずられていった。エイジは、威勢がよかったわりには形勢が悪くなると真先に逃げ出した練馬だけに、絶対に売らないの言葉はあてにならないと思ったが、その分、却って毒気を抜かれたようになって、苦笑いを浮かべながらの後ろ姿を見送った。

倦怠感の残る身体を寝台に横たえると、コンクリートから冬の厳しい冷気が沁み出してきて、思わず身震いが出た。そうして騒がしかった留置所からほとんどの物音が払拭されていることに気づいた。

空調の音にときおり、遠くで開閉する扉の響きが混じる。人声はない。それらの単調な物音の構成に眠気を誘われながら、ぼんやりと青褪めたコンクリートの壁を見つめていると、頭上に籠もるような足音が鳴りはじめた。エイジは身体を起こし、鉄格子のむこうに顔をむけた。ちょうど、トレンチ・コートを着た映画部の顧問——児玉が、背広の男を伴って、歩いてくるところだった。

児玉はエイジにむかって心配するなという風に軽くうなづき、背広の男にみじかく声をかけた。男は機敏に敬礼をかえすと、鉄格子の錠に鍵をさし込んで、ここから出なさいという仕草をした。——エイジは事情が飲み込めなかったけれど、二人の態度に穏やかなものを感じて、大人しく扉をくぐった。

「感心せんな」

鉄格子の並ぶ通路を歩きながら、児玉は言った。

エイジは、高校に連絡が行った結果、児玉が未明にも関わらず迎えに来てくれたのだらうと考えて、

「すいません……」

児玉は、内ポケットから携帯電話を取り出すと、おまえのものだらうと言ってエイジに手渡し、

「で、鎮静剤を使ったのか。それともドッペルゲンガーを制御することに成功したのか。ソート・エフェクトのことはどこで知った」

意外な質問の連続に、エイジは思わず双眸を細くした。

「あの……」

児玉は尖った顎をエイジにむけて、軽く鼻を鳴らすと、

「大友の力になりたい一心で、か。気持ちは分かるが……感心できん」

「センセ、大友のこと、なにか知ってるんですか？」

「おまえたちより詳しく知っていることも、幾らかはある。知りたいたら聞かせてやる。さもないと、おまえはともかく、黛のほうは納得せんだらうからな。ここで暴れられたらかなわん」

冗談とも本気ともつかない顔で、児玉は言った。

「あの…… 黛は」

「すぐに会わせる」

児玉は、階段をあがるとリノリウムの廊下を左に折れて、第三会議室と表記のついたドアを開いた。窓際の折りたたみ椅子に、黛が腰をおろし、湯気のたつマグカップを両手で包むように持っていた。黛はエイジたちに気づくと、それを置いて立ち上がり、駆け寄ってきた。

「どうよ、疲れはとれた？」

エイジが言葉をかけると、黛は困ったように微笑んで、

「まだちよつと、眠い……」

児玉はコートを脱ごうとする手を止め、

「だったら、帰って寝たほうがいい。今日の放課後にでも、改めて話してやる」

黛は途端に目をぱちりさせて、

「いえ、平気です。いま聞かせてください」

「伊勢崎、おまえは大丈夫か」

児玉の尋ねる傍から、黛がへっちらだよねと誘導するように言う。エイジは苦笑して、

「お願いします」と答えた。

児玉は呆れたように首を振ると、二人に椅子に腰掛けるよう言うて、

「さて、なにから話したのか——」と、白み始めた窓のむこうに目をやった。「しかし、おまえたちも、よほどに戸惑っただろう。」

なにも知らないで、エレクトロ・ブラッドたちの暗躍する現実に接したのだからな」

「エレクトロ・ブラッド？」黛が首をかしげる。

「おまえたちが、あの廃墟ビルで殺害した、黒い皮膚の異形どものことだ。普段は人間の姿形をしているが、月あかりを受けるとあのですがたを晒す」

「アイツら、いったい何なんスカ……」というか、どうしてセンセが

そんなこと知ってるんですか」

「もしかして、先生ってオカルトマニア？」

薫が訝しげに言うと、児玉は苦笑いを浮かべ、

「順を追って話したほうがよさそうだな。二人とも、誰にも喋らんと約束してくれるか。俺は教員免許を持っているが実をいうと教師じゃない。一等陸佐、軍人だ。所属している部署の諸々の事情があって、虹ヶ丘高校に席を用意してもらった」

「事情って……」

「一言ではとても説明できない。まずはこの街——人工島『八尋』が建設されるにいたった本当の事情から話そう。表向きは経済振興や土地開発ということになっているが、それは予算を取るため、マスコミや世論を説得するためのカムフラージュにすぎない。日本政府にはもつと重要な目的があった。今からおよそ三十二年前、政府はふたつの極秘プロジェクトに着手したのだが、そのひとつが永久機関の開発だった。……二人とも、現代史の授業をまじめに受けていたなら、こんな解説を聞いているはずだ——当時は原油価格の高騰と地球温暖化が世界規模の問題になっていて、石油への依存から脱却し、持続可能なエネルギーへ少しずつでも移行していくことが求められていた、と。が、各国の本心を言えば温暖化対策など実はどうでもいいことで、少しずつ資源の枯渇していく現実のなかでどう生き残っていくのかこそが問題だった。資源戦争などには乗り出さず、長期に渡って利用できる新しいエネルギー資源を見出して充分に確保できればそれがいちばんいい。そこで先進各国は自然エネルギーの活用や核融合技術の開発などを進めたのだが、それぞれ効率性やコストの点で問題があった。そうした流れのなかで日本がひそかに着手したのが永久機関の研究と実用化だった。——たしかに、古典物理学の枠組みにおいては永久機関なぞ絵空事に過ぎないが、たとえばブラック・ホールの表層で粒子と反粒子の対生成が起こった場合、片方の粒子が事象の地平線のむこうに落ち、もう一方がブラック・ホールを離れるという現象も起こりうるのではないかとい

う可能性が、ホーキング等によって指摘されている。その場合、対消滅は起こらない。ブラック・ホールからは光さえ脱出することができないのだからな。つまりだ、宇宙のエネルギーと質量の総和がゼロだとしても、分断されて未来永劫交わることのないふたつの領域には、それぞれ永久機関が成立する余地があることになる。――

俺は文系だから詳しいことは説明できんが、とにかく政府はこういった最先端の量子論を手がかりにして永久機関の研究を進めた。ところが、機関の建設と稼動には、核実験なんぞ比較にならないほどの危険性がともなうことが分かった。首都機能の密集する東京都心を建設予定地とするわけにはいかず、かといって、ほかに候補地を探そうにも、極秘裏に進めている計画への協力を自治体に打診してまわるなど、できるわけがない。やむなく東京湾のほぼ中央に人工島を築き、その地下に永久機関を建設することになったのだ」

「ということは、八尋市の地下には……」

兎玉は頷いて、

「永久機関をつかった大規模な発電所がある。現在も稼働中だ。その電力は南関東一帯に供給されているが、大半を消費しているのは、八尋の地下に構築された量子コンピュータのネットワークだ。これが、三十二年前に日本政府が着手した極秘プロジェクトのもうひとつという訳だ。」

ところでおまえたちは、小さいころ、ランプの精に願いごとを三つだけ叶えてやると言われたらなにを頼むかと訊かれて、叶えてもらえる願いごとの数を見尽蔵に増やしてもらうと答えたことはないか。量子コンピュータの開発に成功した日本政府が取った態度も、そうしたものだった。政府は量子コンピュータの技術を厳重に管理する一方、その桁違いに優れた演算能力を駆使して数々のシミュレーションを行い、さまざまな分野における応用科学の研究をすすめた。そうして得られた最新の技術は、日本の企業にのみ開示された。日本の産業界はこれによって一時は喪失しかけた国際競争力を取り戻すことができたのだ。八尋市の極端ともいえる目覚ましい経済成長

は、じつはこうした背景からもたらされたものだった。

言わなくても分かるだろうが、日本政府は情報や技術の漏洩をも二もなく警戒した。そこで我々自衛隊の諜報機関の一部が、八尋で展開している極秘プロジェクトに加わって、その方面をサポートすることになった。我々は八尋市に防諜の網を敷き、海外の政府系スパイや産業スパイの摘発に取り組んできた。……ときにはプロジェクトの実情を探ろうとする内外の報道関係者に多種多様の圧力をかけて妨害したこともあった。我々はそれなりにうまくやっていたが、去年あたりから少しずつ状況が変化し、手にあまるようになってきた。

初めのうち、我々のセクションはソート・エフェクトのことも月明かりの黒い異形——エレクトロ・ブラッドのこともまったく知らなかった。ただ、情報の収集にあたっていた末端のエージェントが次々と謎めいた殺されかたをして、衝撃を受けるばかりだった。それでも様々な方面から情報があつまってくるにつれて、どうも去年初頭に起こった？ ホワイト・ブラスト？ がそもそもの発端になっているらしいということが分かってきた。

結論から言うと、あれは永久機関が暴走した結果起こった事故だった。我々は心理学者たちの説を頭から信じて、ホワイト・ブラストを単なる集団ヒステリーとしか見なしていなかったから、まったく注意を払っていなかった。後になって、永久機関の制御班と、量子コンピュータのシュミレーション班が、ホワイト・ブラストごと事故を隠蔽しようと、著名な心理学者たちに働きかけをしていたことが分かった。我々はすぐに調査を開始し、永久機関の事故の原因が、何者かによるハッキングにあったことを突き止めた。サーバに残っていたIPアドレスをたどってみて、我々は愕然とせざるを得なかった。アクセスは、シュミレーション班が管理している仮想現実空間のなかから、だったのだ。つまり、量子コンピュータによって制御されているシュミレーション世界のなかの人工智能たちが、あの事故を引き起こしたことになる」

児玉はふと接ぎかけた言葉を飲んだ。その理由にエイジはすぐに気がついた。ドアがノックされたのである。それから這入ってきたスーツ姿の妙齡の女性が、トレイから湯呑みをとって三人のまえにひとつずつ置いてくれた。エイジは、児玉がこの女性に軽く頭をさげるのを見て、自衛隊ではなく、警察の関係者なのだろうと思った。児玉が急に話を止めたのは、八尋市の極秘プロジェクトに関することが、警察の末端には知らされないきまりになっているからではないかと考え、女性が退室するのを待って、児玉に尋ねてみた。すると児玉は苦笑いを浮かべて、

「そういう建前になっているが、むこうも大体のことには気付いているらしい。実際のところ、エクリプス機関——八尋市の極秘プロジェクトを管理する我々秘密組織のことだ——は、あらゆる手をつかって、白竜団に関係するトラブル、とりわけエレクトロ・ブラッドのことを隠蔽しようとしてきた。何故なら、それらのことが知れ渡ってしまったら大混乱が起こり、我々としても奴らの跋扈するに至った経緯をいつまでも隠し通しているわけにはいなくなるからだが、もう限界にきている。一切のことが明るみになるのは時間の問題だろう」

　　黨は湯呑みから顔をあげると、

「もしかして、動画が削除されたのも、掲示板から関係スレッドが消えてしまったのも……」

「そうだ——」と、児玉は言った。「エクリプス機関の関係部署が、各方面に働きかけた結果だ」

「貸し倉庫のことが公にならなかったのも？」

エイジの問いに、児玉は黙って頷く。

「俺たちがそのことで警察に呼ばれなかったのも、大友が逮捕されなかったのも」

「そういうことだ。だいたい、なんの罪状で大友を逮捕するというんだ。エレクトロ・ブラッドなる言葉は、六法全書に一度たりとも出てこない。やつらは人間でもなければ動物でもない、そもそも生

物がどうかすら定義されていない。それを殺害、いや、毀損したからといって、なんの罪が成立する」

「けれども、大友は……」

「ああ、神崎という同級生に重傷を負わせたことは我々も把握している。だが、神崎のほうにも大友を殺害しうるだけの力があり、かつ、大友に対して明確な害意を持っていたのだから、大友には正当防衛の成立する余地がふんだんにあると言える。——いずれにしても、我々はエレクトロ・ブラッドにまつわるトラブルを法律に基づいて処理していたら、とてもではないが状況に適切に対応していることができない。八尋市のこれらの実情は、刑法が想定している範囲をまったく超えてしまっているのだ。そのような訳で、八尋市は現在、きわめて特殊な法的環境のもとに置かれている。率直に言う、こういうことだ——エクリプス機関の関係者は任務を遂行するうえで必要とあれば一部の法律を無視することが認められているし、警察や司法に介入する権限も与えられている。だからおまえたちを留置所から出してやるくらい雑作もないことなのだ」

「あの、カラー・ギャングのひとたちは……」

「ああ、尋ねると、児玉は不機嫌そうに鼻を鳴らし、

「この街で？ 見てはいけないものを見てしまった市民？ が皆たどるコースに行くことになる。機関の施設へ送られて、？ 精神に疾患を生じたもの？ として？ 治療？ を受ける。——要するに、おまえさんたちが見たものは幻覚だったんだということを納得させてから市民生活に戻すわけだ。だが、施設の収容余力はもうないと聞いている。大半のメンバーが数日以内に釈放になるかもしれないな」

そうして渋い顔のままお茶を啜ると、

「話が逸れてしまったが、肝心のエレクトロ・ブラッドが跋扈するに至った背景のことだ。で、どこまで話したか……」

「えっと、」と、黛がこめかみを指で揉みながら、「そう、永久機関にハッキングをして事故を起こさせた犯人が、量子コンピュータのネットワーク上に構築された仮想現実世界に住んでいる人工知能

だっただってところまでです」

児玉は微笑し、「だてに進学校には通ってないな」と黨を褒めて、「エクリプス機関は量子コンピュータをつかつて複雑なシュミレーションを行い、次々と新技術を開発していったが、研究は自然科学だけでなく社会科学の分野も対象としていた。具体的には、経済学や政治学、社会学などだ。これらのシュミレーションを行うのに一番いい方法は、人間の社会を高度に再現し、任意の条件を与え、人間に見立てた人工智能たちがそれにどう対応していくのか、経過を観察することだ。そうして得られる詳細なデータは、万金をもつてしても換えがたいものだ。なにしろ、未来を覗き見るようなものだからな。日本政府は、適正に行われたシュミレーションの結果が示唆するところに忠実であるかぎり、政策上の過ちとは無縁でいられる訳だ。

いま、人間の社会を高度に再現すると言った。古典経済学では、人間を『必要な情報を全て知ったうえで最も効率的な経済行動をとる』——つまり、二軒並んだスーパーにおなじ品質の大根がそれぞれ置いてあったら、決まって安いほうを選んで買うはずのものと想定している。ところが実際の人間は情報をすべて知ってはいないし、いつも合理的という訳でもない。そんなのは小学校にあがったばかりの子供にだって分かることだ。そして実際に、古典経済学はたびたび機能しなかった。量子コンピュータによるシュミレーションがどれだけ豊かな成果をもたらしてくれるかは、単位たる？人間？の複雑性をどれだけ高いレベルで再現できるかにかかっていると言っ
てよかった。

そこで、シュミレーション班は、地球環境に限りなく似せた仮想現実世界に、優れた学習能力をもつ人工智能を無数に配置し、自ずから社会を形成し文明を発展させていくに任せて、人間に可能なかぎり近い人工智能——のちには人工意識体と呼ばれることになったが——のサンプルを取得する計画を立てた。そうして、人間世界に換算すると一千年にあたる歳月を一週間で経るように設定したその

世界が適切なシュミレーション環境であり続けるよう、『神』として度々干渉を行った。

残酷なことだが、人工知能とはいえ、人間のように愛情と知性を持ち、現実の生活や政治のなかで美しい理想を実現しようと悪戦苦闘してきた意識体たちは、デウス・エクス・マキナとまるで逆の、サタンやアーリマンのような存在を神として仰がねばならなかった。神たるシュミレーション班にしてみれば、エデンの園を眺めていたところで遊びにしかないから、どうしてもその箱庭に不条理の戦争や災害、疫病を起こさない訳にはいかなかった。それだけに、仮想世界の住人たちが、シュミレーション班とその背後にある人間世界の存在を知ったとき、それらを憎悪せずにいるのは難しかっただろうと、容易に想像がつく。

かれらの一部は、密かに人間世界への逆襲を計画し、まずは人間と並び立たなければならない——つまり、仮想世界から現実世界へ進出しなければならないと考えた。そこで目をつけたのが、ソート・エフェクトの理論だ。そもそも、ソート・エフェクトとはなにか。概念と具象のあいだに働く共鳴作用、心理学ふう言えば共時性のことだ。その仕組みを簡単に説明すると——この空間は幾つかの次元によって構成されている。奥行き、幅、高さ、それに時間を加えた四次元までは、誰でも体感的に認識できるが、実はそれ以外にも無数の次元軸があつて、それらが空間構造をひそかに支えている。そのうちのひとつは、抽象具象の軸だ。この軸は、精神と物質をその両端に置きながら、統合してもいる。そして、ふたつはときに共鳴を起こす。物質から精神へ振動が伝播すると『第六感』として、精神から物質へ影響が伝わると『超能力』として働くというわけだ。シュミレーション世界の人工意識体たちは、情報のあつまりで、言わば概念上の存在だ。だが、この軸を物質の側へ移動することによって、生身の身体を得ることができる。そのためには、空間構造にある種のショックを与える必要があつた。そうして彼らは利用できそうなものを現実世界から物色し、永久機関に狙いを定めたとい

う訳だ。かれらの目論見は成功し、ホワイト・ブラストにより抽象と具象の境界が希薄になった。普通の人間には、どうということもないように思われたが、空間には歴然とした痕跡が残った。ソート・エフェクトが強力な威力を発揮するようになり、人工意識体たちは具象化した。我々は、こうして実体をもつに至った人工意識体たちを、エレクトロ・ブラッドと呼んでいる。

仮想現実のなかに置かれた人工知能はもともと人間に似せて作られただけに、普段のエレクトロ・ブラッドは人そのものだが、月明かりのしたでは悪魔のような姿になる。その理由は、連中がシュミレーション世界のなかで形成してきた宗教に關係していると考えられている。かれらは人類とおなじように、古代には二元論を教義の中心にすえた原始的な宗教を崇拜していた。光の神と闇の神、天使と悪魔の終わりなき闘争を、世界観の土台としたわけだ。ところが、我々の父祖が自分たちを善なる神のしもべとしていたのと異なり、かれらは自らを悪魔の眷属であると定義した。かれらはそれだけ創造主を憎み、また憎まれていると考えていたのだらう。仮想現実のデータを管理していたサーバーはホワイト・ブラストのときに大破してしまい、いまとなつてはシュミレーション班がかれらをどんな風に扱っていたのか知る由もないが、そこから、おおかたの想像がつくというものだ。よほど悪趣味な研究者が混じっていたのかもしれないな。たとえば、仔猫をバラしてその動画をウェブで公開し、ひそかに愉しむような……。

いずれにしても、仮想現実の住人たちは自分らが悪魔の子であり、それゆえ絶対なる神に敵対し続けなければならないという、悲壮な信念のもとに歴史を重ねてきた。かれらにとって、目の眩むような光と熱で人々を責めさいなむ峻烈な太陽が、かれらに艱難を与えつづける残酷な神を象徴するものであった一方、その烈日を受けて静かに、しかし気高くかがやく月は、かれらの美意識を刺激してやまなかった。かれらが太陽を憎悪し、月を崇拜するに至ったのは、ごく自然のことだったと言えるかもしれない。かれらの神話において、

月は真実を象徴するもので、その光には幻想と虚構を払拭する効験があるとされていた。そうした古い時代からの信仰が、エレクトロ・ブラッドの特徴に影響しているのかもしれない。かれらは真実を照らし出す月のひかりを浴びると、本来の、悪魔としての姿を晒す……かれらにしてみれば、なにも不思議なことは起こっていない訳だ」

エイジは悪魔になったり人間に戻ったりしながら近づいてきた女のことを思い出し、後味の悪さを噛み締めながら、

「……そういえば、あいつらはそろって白いパーカーを着てましたけど、それにもなにか理由があるんですか」

「『白竜団』というのがそもそも連中の崇拝する主要な宗教のいち宗派で、神秘主義の傾向があり、過激なことで知られていたらしい。信徒は修道院のようなところで禁欲的な共同生活をいとなみ、厳しい精神修養をおこない、そうしてソート・エフェクトの能力を鍛える。教団の者は、フード付きの白いローブをまとう仕来りのようだ。それでパーカーを着ているのだろう。」

連中の、逆さの正三角形を円で包んだ白い紋章は、宗派に古くから伝わるもので、神に抗う混沌の力を象徴しているという。具体的には、ソート・エフェクトのことで、古い時代にはその概念を白い竜の意匠で表していた。

このソート・エフェクトの理論は、元々かれらが発見し、発展させてきたものだ。エクリプス機関はシュミレーション班を通して初めてその概要を知り、現在も急ピッチで基礎研究を重ねているが、残念ながらこの分野に関してはエレクトロ・ブラッドのほうがよほど進んでいると言わざるを得ない。ソート・エフェクトを発動するには強力な情念が必要だが、現時点において、我々はドッペルゲンガーを制御するほかにその必要を満たす方法を知らない。一方で、エレクトロ・ブラッドにはドッペルゲンガーが構造的に生じ得ないらしい。研究者によると、悪魔の子を自任するエレクトロ・ブラッドの精神が調和ではなく混沌をその常態としているからだという。連中のここには安定を保とうという働きがほとんどなく、したが

つて、抑圧や分裂が起こらない。むきだしのネガティブな感情が常に意識の表層を渦巻いている。それだけに、人間とは比較にならないくらいソート・エフェクトの発動に適した精神の構造をしているとも言える。

ただ、弓は絞れば絞るほど威力を増す道理で、潜在意識の玄室に押込められて内圧を極限まで高めた拳句に生じるドッペルゲンガーは、感情のエネルギーの大きさにおいて、平均的なエレクトロ・ブラッドを軽く凌駕している。そのことをよく知るエレクトロ・ブラッドたちは、薬を用いるにせよ古典的な方法によるにせよ、ドッペルゲンガーを制御することに成功した人間をひどく恐れている。むしろ、ドッペルゲンガーに悩まされている人間をいち早く見つけ出し、教団に引き入れようとしてさえいる。そういった人間は元々、心に深い闇を抱えているだけに、エレクトロ・ブラッドの反人間的な思想に共鳴しやすいところがあるに違いない。……神崎という生徒が、教団と関わるようになっていった理由も、その辺りにあったのかもしれないな。

いずれにしても、白竜団に対して何らかの手を打たねばならんことは論を俟たない。……が、生憎、エクリプス機関は市民を守ることを従来からの任務とはしていない。あくまで八尋におけるプロジェクトを管理運営していくための組織だ。それで、機関の内部は、今後の対応を巡って、二つに割れた。財界や関係省庁の意向を汲み、従来どおりに隠蔽を続け、あくまで粛々とプロジェクトをすすめて行くべきという派と、エレクトロ・ブラッドの暗躍する現実を非常事態として認識し、これが国家レベルの危機へと拡大しないよう迅速に対策を進めていくべきという派とに、な

「先生は、どっちなんですか」と黨が訪ねる。

児玉は、自分は軍人だと断って、

「我々諜報部はもともと自衛隊の組織だ。安全保障や災害救助へのモチベーションがある。エクリプス機関がプロジェクトを管理するための組織であるなら、安全性の確保や事故時における市民へのケ

アもその任務に含まれてしかるべきという考えだ。だが、組織の決定には従わねばならん。我々は上層部と交渉を重ねた結果、機密の保持は揺るがせにできないが、諜報部等が独自にエレクトロ・ブラッドへの対策を進めることについては許可してもいいということまで漕ぎつけた。

できうるものなら全市民を避難させたうえで第一師団を八尋市に展開し、掃討作戦といきたいところだが、機密の保持を考慮するとそうもいかない。一個小隊すら動員することは難しい。いずれすべてが発覚すると分かっているとしても、それまでは隠蔽の手をゆるがせにはできないのだ。仮に大規模な軍事行動を取ることが可能になったとしても、我々は依然、エレクトロ・ブラッドについて知らないことが山ほどあり、機が熟しているとは言えない。我々はあらゆる角度から対策を検討してみたが、その結果、ソート・エフェクトの素養のある人間を内外からスカウトしてエレクトロ・ブラッドに対応させるという計画がいちばん現実的だという結論に達した。なかでも中高生は情緒が不安定になりがちで、ソート・エフェクトを発動するのに適している。そういう理由から、諜報部の人間が八尋市内の高校のいくつかに送り込まれ、ソート・エフェクト使いや、そのような素質を持った生徒の調査を行っている。……俺がおまえたちを迎えに来た理由が、これで分かっただろう。どうだ二人とも、我々に協力してくれないか」

「えっ……、バイト代が出るなら」と、エイジは言ってみた。

児玉は締まった頬に微笑のさざなみをつくつて、

「しっかりしているな。が、そのことなら心配するな。危険な仕事に当たってもらうのだから、当然、相応のものは出る」

黨は待ちかねたというように身を乗りだし、

「だったら先生は大友のことも調べたんですね。大友について知っていることを、教えてください」

「何度も言うが俺は教師じゃ……まあいい」児玉はひとくち噤んで湯呑みを置き、「無論調べた。それも徹底的に、な。実際のところ、

大友は我々が最も注目するソート・エフェクト使いだ。かれは圧倒的な力をもっている。我々としては是非とも味方に引き入れたい。

——もうその懸念は持っていないが、かりに大友がエレクトロ・ブラッドたちに加担するようなことにでもなったら、かれを暗殺しなければいけないとまで考えていた」

「ちょ……それ、どういうことですか」

黛が色めきたつと、児玉は穏やかに、「繰り返すが、もう、その懸念は持っていない。大友がエレクトロ・ブラッドに敵対しているとはつきり分かったからだ。しかし、だからといって、大友の重要性が減じた訳ではない。——俺はこう見えても諜報部ではそれなりに偉いほうでな。その俺が末端のエージェントに混じってこうして現場まで出てきたのは、ひとつには、大友のことを若い奴らに任せおけない事情があったからだ。というのも、我々は大友のエレクトロ・ブラッドに対する活動に関心と期待を寄せている。大友とどいう関係を築くことになるにせよ、我々の目的に適うかぎり、かれに最大限の支援を行うつもりだ。必要とあれば銃器を提供してもいいし、警察を含む行政に介入してもいい。それも、迅速に。そのためには、虹ヶ丘高校の担当者に相応の権限をもった人間をあてねばならん。で、俺にはその権限があったという訳だ。

前置きが長くなった。大友について知っていることを話そう。おまえたちには荒唐無稽に聞こえるかもしれないが——結論から言うと、我々は、大友が未来から時間を遡ってやってきたかもしれないと疑っている。果たしてそんなことが有り得るのか、俺にはなんとも言いようがないが、少なくとも、我々の手にしているいくつかのデータや情報を分析してみる限り、その荒唐無稽な仮説がいちばん整合すると認めざるを得ない」

「未来から……大友が、スか？」

児玉は頷いて、

「というより、大友を残し、街全体がやや不完全なかたちで時間を遡ったと言ったほうが適切かもしれん。我々はホワイト・ブラスト

以降、街に起こるあらゆる異変を二度と見落とさないようにするため、定期的に詳細な検査を行っているが、その結果、今月始め、なんの前触れもなく、炭素年代測定の数値にブレが生じたことを確認した。市内で採取した微量のサンプルが、一夜にして半年強分の放射性崩壊を起こしていたのだ。それから、JR八尋駅前の時計台の針と歯車が不自然に磨耗しているという報告があった。ほかにも、街に設置されている防犯カメラの幾つかに、夏の市街と思われる謎の映像が記録されていたことが分かった。——その後、一週間ほどして、我々は大友からひそかに採取した毛髪や制服の繊維を炭素年代測定にかけたのだが、驚くべきことに、そのすべてがサンプルとおなじ異常値を示していた。

それらの事実を整理すると、こういうことになる。

『八尋市は来年の夏ごろから今月初頭まで時間を巻き戻された可能性が高い。そして、大友はその影響を受けなかったと考えられる』

これがいったい何を意味するのかについて、確実なことはなにひとつ言えない。我々としては調査を重ね、経過を見守ることしかできないが、この街がどうなっていくにせよ、決して軽視することの許されない事象だと考えている。……本人から直接聞けばいいんだがな」

「大友にそういう話は……」

エイジの言葉に、児玉は首を振った。

「まだしていない。とりあえず、『おまえが背負い込んでいることについて、我々は色々協力できることがあると思う。よかったら相談して欲しい』という言い方で仄めかしはしたが、あいつは詮索されたくないという気持ちが強いのか、返答はないままだ。——おまえたちは大友の友達なんだろう。引き続き、気にかけてやってくれないか。危険を伴うことになるかもしれないが、俺としてもできる限りの援助はするつもりだ」

「頼まれなくても、そのつもりです」と、黛は言った。それから、少しうつむいて、「……ていうか、すいません、先生のこと、どこ

まで信じたらいいんですか？」

「こういう状況だ、俺を疑いたくなるのも当然だろう。無理に信じるとは言わん。が、困ったことがあったらいつでも相談しろ。もつとも、学校のことは自分でなんとかしろよ。この先、状況が落ち着くことがあれば、映画もしっかり創作してもらおう。これでも大学時代は本気で映画監督を目指していたからな、つまらんものを撮ってきたら承知しないぞ」

児玉は微笑みながらコートに袖を通し、二人にも準備をするように言つと、

「家まで送つていこう」と、腕時計に目を落とした。「もつとも、制服に着替えたらずぐに出てこいよ。学校に間に合わなくなる。…

…朝食はマクドナルドでいいか？」

エイジは、立ち上がって大きく伸びをすると、窓のむこうに目を細めた。高層ビルのかなたには、檸檬にかがやく雲が悠然と棚引いていた。

エイジは携帯のメールをざっと確認すると、パタンと折りたたんで溜息をついた。児玉から一連の信じがたい話を聞かされてから、三日が経っているが、大友の消息はまったく掴めていない。昨日の放課後、黛と一緒に大友の自宅を訪ねて妹の妙子をつかまえ、話を聞いてみたが、大友はここ数日帰宅していないということだった。それから心当たりのある場所——加納のサロンやバイクショップ、大友の中学時代の友人たちをまわって、大友についてなにか分かったらすぐに知らせて欲しいと一々頼んだのだが、今のところ、これという連絡は入っていない。

その一方で、白竜団に關係するトラブルは急激に増加しているようだった。というより、海外のサーバーに白竜団を糾弾するサイトが林立し始めてから、教団に関わった人たちのあいだで情報の共有が急速にすすみ、トラブルが表面化しやすくなってきているらしいかった。むろん児玉たちは隠蔽の手を方々に伸ばしているのだろうが、なかなか海外まではまわらないと見える。エレクトロ・ブラッドのことは知る人ぞ知る、という様相を呈し、あるいは噂に尾びれがつき、怪談の要領でウェブ上を活発に流通しはじめている。

黛がメールのなかで、

——この街、すごいことになっちゃいそうな気がする。

と、言っていたのは、そのあたりのことだろうとエイジは思った。けれどもバスの車窓からそとを眺めれば、普段どおりの冬の八尋市街が横たわっている。裸の街路樹を揺する寒風も、陰気な感じのする曇り空も、クリスマス商戦を待ちかねるように着飾ったデパートや店舗も、エイジの胸にくすぶるいやな予感に呼応するような気配はすこしもなかった。そのせいで、エイジは虚構の世界に生きているような、独特の違和感に包まれていた。

遠近のクラクションが、四方に渦を巻いている。市役所まえの通

りが渋滞するのはいつもどおりだったが、それでも流れが普段よりのろいようだった。工事でもやっているか、さもなければ事故でもあったのだろう。エイジは遅刻が気になりになって携帯で時間を確認し、それから何気なく顔をあげたとき、後部ドアの付近でボールに寄りかかっている小柄な少女と、視線を交錯させた。少女はボールをつかむ手を頭の支えにして、振り返るようにエイジを見つめていた。その姿勢に、なんとなく甘えるような雰囲気があった。けれどもかの女はすぐにハツとした表情になって顔を伏せた。

このとき、エイジは右手を持ち上げかけていた。少女は四五日前にエイジのクラスに転入してきたばかりで、まだ喋ったことはなかったけれど、手を振って「オッス」くらい言ってみようと思ったのである。けれども、すぐに下を向かれてしまったので、エイジはもてあました右手を仕方なしに顎へもっていつて、剃りのこしを撫で、それから空あくびをした。

かの女はアイラという名前で、欧州のほうの血が半分入っているという噂だった。小柄なことを別にすれば、なるほどと思う容姿である。ミルク漬けにしたような肌の白さと、唇の新鮮な果実を思わせる赤みは明らかに東洋人のものではない。鳶色の髪をショートにしているためか、すらりとした首が映えていた。美少女という表現のよくにあう可憐な顔立ちだったが、伶俐さと気の強さを連想させる翡翠の瞳がいかにも貴族的で、かの女になんとなく近寄りがたいものを添えている。

その瞳が、慌てたように伏目になった。いまはブレザーの後ろ姿が、すし詰めの乗客の隙間からやっと見えるくらいだが、エイジはその背中からしばらく視線を離すことができなかった。

渋滞はいっこうに流れない。

エイジは窓をひらき、クラクションや罵声が陰々としているそとに乗り出し、ごみごみと自動車の連なるむこうを見渡した。そうして、どういう訳か、信号の灯っていないことに気がついた。市役所まえの大きなティー字路へ車が雑然と進入して、収拾のつかない状

態になっている。

そのうち、バスの前後のドアが開いた。エイジはそれを、運転手が匙を投げたしるしと受け取って、立ち上がりながら、なんとなくアイラの後ろ姿を求めた。かの女はすでにバスを降り、街路樹のしたを歩き始めている。漠然と目で追っていると、かの女の髪が朝のひかりを絡めてふわりと踊り、——また視線が合った。

市街の信号はすべて停止しているようで、交差点が機能せず、道路という道路はどこも車が数珠繋ぎになっていた。渋滞に見切りをつけて車を路肩に乗り捨てていくひとが後を絶たず、そのことがいつそう流れを悪くして、街ぜんたいが駐車場になったような有様だった。その混乱を眺めながら、エイジは登校した。

休み時間、携帯電話でポータル・サイトをひらき、ようやく事情が見えてきた。

八尋市は特殊な道路交通システムを採用している。人工衛星をつかって収集した交通量の情報を、市のコンピューターが一元的に処理して、信号の切り替えをコントロールし、渋滞がなるべく起こらないようにしている。そのシステムがトラブルを起こしたことで、信号が全面的に停止してしまったらしい。

その障害も、発生から三〇分ほどで復旧が済み、現在は正常化している——そうポータル・サイトのニュースは伝えていた。

「……だよ」

と、エイジは黨に要約して教えてやった。かの女は大渋滞を不審がって、エイジのクラスへ話をしにやってきたのだった。

黨はエイジの説明にいまひとつ釈然としない様子で、

「ねえ、これってさあ、エレクトロ・ブラッドの仕業なんじゃない。だってあいつら、永久機関？ とかにもハッキングを仕掛けちゃうんですよ。市のシステムをいじるくらい、ワケないんじゃないの」「どうだかな」

「そうに決まってるって」と、黨は断定をくだし、「だってさ、今日、児玉先生来てないし。きっと対応に追われてるんだよ」

「来てない？」

黨はウンとうなづき、「さっき職員室で聞いてきた」

「……………」

エイジは机に頬杖をついてすこし顔をしかめた。

「そうそう、それで思い出した。あたしなんで職員室に行ったかっ
ていうと、部室の鍵を借りにいったの。なんか、ツバサがね、新入
部員を紹介したいから、放課後、みんなに集まって欲しいって」

ツバサというのは、高島翼のことである。このあいだは生徒会の
用事で部活に来れないという断りのメールをエイジに寄こしてきた
が、元々、かの女は大友とともに映画部の創設に奔走した中心人物
である。一年のときはエイジたちとおなじクラスで、大友と一緒に
後期のクラス委員を務め、その縁で大友とは仲がいい。

「だったら、天草にも声かけないとな。ていうか、あいつ、大丈夫
なのかな」

天草はインフルエンザにかかり、二日のあいだ休んでいた。その
まえの日、咽喉をやられてひどい声を出していたのを、エイジは憶
えている。

「さっき廊下ですれ違ったよ。マスクしてたけど一応生きてる」

「そっか、じゃあ良かった」とエイジは笑みを浮かべた。それから
すこし間を置いて、「……ところでさ、大友のことはなにか分かっ
た？」

黛は急に目元を淋しそうにして首を振った。

「部活が終わったら、そのへん、まわってみるか？」

「そうしたいけど、昨日まわったばかりだし、さ」と、黛は俯いて
「あたし、あとで児玉先生に電話して聞いてみる。情報とか入って
るかもしれないし」

「そうだな。あと、白竜団のアンチサイトのチャットとか掲示板は
どう、ロムってる？ ヒントになるような話題でも出てくるとい
いんだけど……」

「今朝から五分おきにチェックしてるし」

黛は、というより依存症になったように気になって仕方ないと打
ち明けて、

「てゆうか、あんた知ってる？ 力に目覚めたの、あたしたちだけ

じゃないみたいだよ。なんかね、いるみたい。月の明るい晩、アクマに襲われそうになると、とつぜん現れて助けてくれるんだって。被り物を被った二人組の女の子」

「被り物？ モロ怪しいな」

黛がなにか言おうとしたとき、チャイムが鳴った。「やっぱ。次、音楽室だった。伊勢崎、部活すっぱかさないでよ」

「おまえこそ」

エイジは飛ぶように駆けていく黛を見送って、教科書を取り出した。そうして冬のひかりが霽っぽく差し込む窓際のほうをなんとなく眺めたとき、アイラが自分を見ていることに初めて気がついた。日直の起立の号令と椅子のいっせいに床をこする音が教室の空気を爽やかに揺する。エイジは腰をあげながら、転入生がほんの一瞬だけ、肩越しにぎこちなく微笑んだように思った。

放課後――

黄ばんだ陽ざしが、机のうえのメッセンジャーバッグを暖めている。そのバッグにのろのろと教科書を仕舞う天草の顔つきは悲惨で、まるでピラミッドの建設にかり出された古代の奴隷のようだといふように思った。眼は落ち窪んで爛々としている。無精ひげが青ざめた顔に散っていて、死期のせまった結核患者の趣があった。もっともエイジは結核患者というものを実際に見たことがない。いればきつといまの天草のような哀愁の気配を漂わせているに違いないと想像するばかりである。

天草はバッグの肩紐を身体にまわした。それがエイジには切り石に繋がれた荒縄のように見えてならなかった。

「ちよつと、大丈夫？」

黛が、天草を支えようとする。

「俺に近づいちゃいけねえ……」

天草は咽喉をぜいぜいさせながら、しわがれ声を出した。

「うつすとか気にしなくていいよ。インフルエンザでしょ。……ていうか、あんたもしかして、ヤバい病気なの？」

「病気じゃねえけど、ヤバいと言えばヤバい」天草は唇の端をすこしゆがめ、弱々しく咳き込んで、「……俺に触れつと、感電するかもしれない、ぜ」意味深な笑みを浮かべる。

「はあ？」

「どうかしたのか」と、エイジは事情を尋ねた。

天草は病み上がりのうつろな目をまっすぐエイジにむけて、

「話せば長くなる……道々、聞かせてやるぜ……俺が病床のうえで繰り広げた壮絶な戦いの物語を、な……」

そうしてときおり、背中を強打した相撲取りのような唸り声をあげながら、よたよたと教室を出て、階段を下りはじめた。

この男が訳の分らないことを言うのは、

（いつものことだから……）と、エイジは眉をさげて不審がる黛にそつと囁き、天草の、動き出していっそう悲惨の気配を強くしたうしろ姿を追った。

「世界には……」と、天草は階段の手すりに寄りかかりながら、苦しそうに言った。「世界には、自分とურიふたつの人間が七人、いるそうさ。そいつはインド人かもしれないし、フランス人かもしれない。俺が未明に出くわしたヤツはどうも日本人らしかった。俺の部屋に無断で入ってきやがってな。薄ら笑いを浮かべた、感じの悪いヤツだった。俺は、『なんだこのやろう』と言ってやろうとしたさ。が、咽喉がこんな調子だから、うまく声が出なかった。それで仕方なくガンをくれた……朝五時まで！ わかるか、得体の知れない侵入者と、朝五時までガンをくれあっていたときの、この俺の気持ちだ！」そうして天草は肩を震わせ、「心細かったさ……泣きそうになったさ……なんか、そいつにガンくれてるうちにいろいろ嫌なことを思い出しちまって、ブルーな気分になってさ……」とうとう目を蔽って嗚咽をはじめた。

エイジは思わず息を呑んだ。「で、それからどうした？」

「話してみると、案外いいヤツだった」と、天草はけろりと言った。「声が出なかったから筆談だったけど。漫談なぞかけごっこを一時間くらいやって、それから名前をつけてくれと頼まれた。俺はこいつを相方にして吉本からデビューする気になったから、一生懸命考えたさ。候補を二つに絞ったところで、ヤツの意味も尊重すべき、それがコンビというものの正しいあり方だと思ったから、聞いてみることにした。ノートに『たこ八郎とヘモグロビン、どっちがいい？』と書いて見せたら、ヤツは露骨にいやな顔をして、『……じゃあ、たこ八郎の線で』と言うから、なんか腹が立ってきて『ヘモグロビン』に決めてやった。ヤツはいま、俺のハートのなかに生きている。そう、いまや相方以上の存在、いわば、心の友なんだ……」どうせ信じないだろ、と天草はすべてが冗談であるかのように微

笑する。

「いや……信じるよ」

と、エイジが答えると、天草は面食らった顔をして、それから頷いた。

「この世には計り知れないことがたくさんあるって、ばあちゃんがよく言ってた。その言葉の意味が、今朝やつと分かった」

昇降口を過ぎ、渡り廊下を通って旧校舎へ入ると、辺りが急に静かになった。開け放たれた非常口のドアのむこうに、煙をあげる焼却炉が見える。プリントやビニール袋が、風に舞い上げられて、駐車場の車のそばや白樺の並木のあいだを転がっている。

天草が、おもむろに右手を伸べると、その指先から紫電が迸り、ビニール袋が一瞬のうちに焰に包まれた。かれはエイジたちを振り返って、

「ヘモグロビンに教えてもらった」

「実は、あたしたちもなの」

黛は、悪戯っぽく微笑むと、天草の傍から外に身を乗り出し、サツと腕を振るった。すると、土煙がまっすぐに走っていき、その先にひらひらと舞っていたプリントが粉々に飛び散った。

「伊勢崎、あんたも見せてあげなよ」

エイジは促されるまま、駐車場を転がっている紙袋に狙いを絞った。焰を心に描いた途端、紙袋はボウと音をたてて燃え上がり、魔術のように消滅した。

天草はじつとそれらを見つめていたが、急に子供っぽい笑みを浮かべ、

「俺、めちゃくちゃテンションあがってきた。……正直言えよ、おまえらも、だろ」

「高校二年になって中二病の夢が叶うとは思わなかった、的な？」

「あたし、その感覚はわかんないわ……」

黛が冷やかに言うと、天草はやれやれという風に首を振って、
「この先、浪漫とサスペンスとがたくさん待ち受けているかもしれ

ないってのに、おまえどんだけ夢がないんだよ。……しなびたババアか？」

「ハアン？」

「落ちて着けて」と、エイジは睨みあう二人をなだめ、「でもよ、この調子だと、俺ら以外にも能力に目覚めたやつは確実にいるだろうな。第一、大友がそうだし」

「なに、大友もなのか」

エイジは階段を上りながら、大友や児玉のことをかいつまんで話して聞かせた。始めのうち、天草は愉快そうに聞いていたが、やがて深刻さが分かってきたのか、表情をひきしめた。

「やっぱり、いるよね——」黛は部室の錠をはずしながら言った。

「午前中、話したじゃん？ 被り物を被った二人組の女の子のこと。その子たちも絶対そうだと思う」

「じゃなかったら、エレクトロ・ブラッドと渡り合える訳がないもんな」

エイジは部室に入ると、教卓のうえに鞆を置いて、スチール椅子に腰掛けた。窓のむこうには、打掛を敷いたような、うつくしい夕焼け雲が広がっていた。

天草は窓辺のロッカーに上がって腹這いになり、携帯電話をいじりながら、

「二人組の女の話なら、俺も聞いている。ていうか、知り合いの知り合いが、その二人組に助けられてんだよ。そいつから、携帯で撮った動画を貰ったんだ。……ちよつとホラー入ってるけど、見る？」

エイジは黛と一緒に天草の傍までいって、手元をのぞきこんだ。

画質は粗かったけれど、外灯が舗道や木立を淡く照らしている様子は確認できた。夜の公園らしい。

カメラが急に動くと、白いウールのコートを着た小柄な少女と、モッズコートの少女が映り込んだ。小柄のほうはピンクのうさぎの被りものをつけ、もう一方は大仏のマスクを被っている。

ふたりの足許には、黒い異形——エレクトロ・ブラッドが倒れて

いた。

フレームの外の、撮影している側のひとが、涙声でお礼のようなことを言った。すると大仏のほうで、

「ねえ、このぶつぶつ、なんていうか知ってる？」と、頭を指差した。「知らないでしょ？ うふふふふ！」

高笑いしながら、うさぎの手を引いて噴水のむこうへ走っていく。うさぎのほうは被り物のサイズが合わないのか、頭をおさえてよたよたと駆けている。

天草は携帯を畳み、

「……な、怖えだろ？」

「シュールと言えはシュールだな」と、エイジは答えた。

「あたし知ってる。ラホツ！」

「いやいや、そこはこの際どうでもいいだろ——」そうして天草は声を落とし、「実は俺さ、これに関係して、ちょっと嫌な話を聞いちまったんだよ」

「嫌な話？」

天草は、ああ、と頷いて、

「下の階に演劇部、あるだろ。その部長がおなじクラスなんだけどよ、そいつからモノを頼まれたんだ。……三日くらいまえ、高島と転入生がやってきて、映画部で使うから被り物を貸してくれとか言ってきたらしいんだよな。それでそいつは、うさぎと大仏とジョージブツシュなら貸せると答えたそうだ。そしたら二人は、まず最初に兎を選んで、それからだいぶ悩んだあと、大仏のほうを持っていったらしい。で、演劇部のほうで大仏とうさぎが急に必要になったらしくて、返して欲しい、おまえもたしか映画部だろ言っというてくれて……」

「言われてみれば、大仏の子の声って、ツバサに似てたかもしれない」

「なんだか雲行きが怪しくなってきたな」

エイジが目を細くしたとき、ドアがだしぬけに開いた。そうして

高島が、

「お、ま、た、せ」

などと売れないグラビアアイドルのようなことを言いながら上機嫌で部室に入ってきたので、三人はつい黙り込んだ。

「あれっ、なに、この空気。やだ、みちるまで。そんな目で見ないで……」

高島はほとんどスキップのようだった足を途端にとめた。その手はなぜか、胸のまえでクロスしている。あたかも、そこからビームが飛びだしてこの異様な沈黙を粉々に砕いてくれるとでもいうように。

艶のあるストレートの黒髪が、肩のすこし下まで伸びている。クリアフレームの眼鏡がよく似合う、美人系の知的な感じのする顔立ちのせいで、誰もがかの女の個性を知ると愕然とする。その眼鏡も伊達ではないかという疑惑があった。かの女は裸眼で数百メートル先の看板をすらすらと読んでみせたことがあり、一説ではモンゴル人やマサイ族にもひけを取らない視力を誇るという噂だった。疑惑はその豊かな胸にもかかっている。水泳の授業のとき、かの女の胸が、スクール水着の下にあつてなぜか俎板のようだったという、複数の目撃証言を、部員たちは耳にしていた。

その疑惑が初めて持ち上がったとき、天草は、真相を確かめるべく、エイジと大友に協力を求めたことがある。けれども大友の、（そつとしておいてやろうぜ……）のひと言で、うやむやになっていた。

要するに、高島は元々疑惑の多い部員だった。

「高島ア、おまえには色々と言きたいことがある——」天草は病み上がりの身体を起こして、敢然と言い放った。「だが、それは後回しだ。新入部員に罪はねえ。おまえの疑惑のせいでおいてけぼりを食ったんじゃ、いい面の皮だからな」

ちょうど、高島につづいて入ってきて、ドアを静かに閉めた人形のような少女が、なんとなく居心地を悪そうにして突っ立っていた。

「新入部員のひと？」と、黛が声をかけると、

「あつ、はい……」

少女はぱたぱたと駆けて、高島の後ろに半分隠れるようにして立った。

「だつてさ。副部長、いろいろ教えてやんなよ」

黛にうながされて、エイジは、

「確か、おなじクラスだったよね」

少女——アイラは頷いたなり、碧の瞳を伏せてしまった。

「ねえ伊勢崎くん。この子、可愛いと思わない？」と、高島はなにかを含んだような表情を浮かべ、アイラの肩に手を置く。

エイジが、うん、まあ、と曖昧に答えると、アイラは困惑したように高島を見上げた。その首にすこし赤みが差している。

高島はまるで子供を諭すように、ほら自己紹介、と言った。少女は、三人にむかって、ぎこちなく、

「えつと……菖蒲谷アイラです……よろしく……」

「あたし黛みちる。よろしくね。でね、これが副部長の伊勢崎エイジ。そっちの死にかけのエジプト人みたいなやつが天草零」

黛が指をさしながら、紹介する。

「それにしてもあんた、カラコン入れてるの？ほんと、白人みたいだね。あ、むこうの血が半分入ってるんだっけ」

「えつ……あの……」

「誰が？死にかけのエジプト人？だ、オイ」と、天草は唾液をとばして抗議する。「わけのわかんねえこと言うから、新入部員が戸惑ってるじゃねーか。でもまあ、固くなるのも分かる。なあ、あんたぶっちゃけ伊勢崎が怖いんだろ？確かに、こいつはどヤンキーみたいな目つきしてる。でも実際は、カンチョーしても全然怒らないナイスガイだ」

「こっちはな、おまえが怒ると余計やりたがる性格だと分かっているから、無視してんだよ……」

「えつ……俺、おまえがいつも平然としてるから、こいつ器だけ

えなと思つてひそかに感動してたんだぞ……」

高島が嫌そうな顔をして、

「ねえ、伊勢崎くんと天草くんって、しょっちゅうそういうことしてるの?」

「しねーよ……」

「ほんとう?　なんか、あやしいー」

「怪しいのはおまえのほうだ」と、天草は双眸をぎらつかせて、「俺は今日、演劇部の部長からおまえへの伝言を頼まれたんだ。例のブツをそろそろ返せ、ってよ」

「ブツう?」高島はアヒルのような口つきになって、首をかしげる。「とぼけるんじゃない」と、天草は一喝した。「兎と大仏の被りもんだよ。……ところで高島、最近、巷じゃあ、月夜に黒いばけもんが出没し、ひとを襲うんだそうだ。で、兎と大仏の被り物をした二人組の少女が、とつぜん現れて助けてくれるんだとよ。知ってたか?」すると高島はあからさまに目を泳がせて、

「なんの話かしら」

「はつきり聞くけどさ、それってツバサとアイラちゃん、じゃないの?」と、黛。

「ワタシ、ニホンゴ、ワカラナイ……」高島はいかにも残念だという風に首を振った。

「このニセチチ女が……」と、天草が吐き棄てるように呟くと、高島は血相を変えた。

「しつ、失礼なこと言わないで!」

「おまえ、日本語がワカラナイんじゃないのかよ」

高島はハツとした表情になり、それから悔しそうに俯いた。

「ネタはあがつてんだ。さあ、白状してもらおうか」

「うつつ……」

高島は、言葉を探すように視線を落とす。そのブレザーの袖を、アイラが掴んだ。

「ツバサ、みんなには私から話すから」

「でも……」

「みんなから、？力？を感じるの。だから、もう隠さなくていいと思う」

「ほんとうに？」と、高島は表情を晴らした。「それなら、被りものをあと三つ用意しなきゃね」

「オイ、なんの話だ。まさか俺たちにも被せる気じゃないだろうな」天草は冗談ではないと言わんばかりの語調だったが、その割には頬のあたりに満更でもなさそうな笑みが漂っていた。

「あのね、聞いて」アイラは深緑の瞳で、エイジたちを一人ずつ見つめ、「ねえ、みんな、憶えてない？ この街を襲う運命のことを、私たちの戦いのことを」

エイジはその言葉を冗談として受け止められない自分を妙に思った。そうして脳裏に浮かんだのは、児玉から聞かされた一連の話だった。その文脈のうえにアイラの謎めいた言い草を置いた途端に、足許がぐらつくような、名状しがたい感覚に囚われて、鳥肌が立つたけれども、だからといって、記憶の櫃のなかに、呼応するようなものはひとかけらとして見あたらなかった。

エイジはそつと黛と天草の横顔をたしかめた。そこには単なる戸惑い以上のものが確かに表れている。それはかれらがアイラの言葉を軽々に受けとってはいけないという理屈を越えた認識を共有していることを示していたけれど、そのために起こる不審の念が先にくるためか、天草の目元などには、警戒に限りなく近い感情が露出しているように見えた。

「みんな、私の正体は憶えてない？ —— 見せてあげるから、来て」アイラは部室のドアに走り寄って、藍色の薄闇に蔽われた廊下へ出ていった。エイジたちは顔を見合わせ、それからかの女のあとに続いた。

硝子窓のむこうに、夕暮れの街のひかりが瞬いている。地平線にあつまって繚乱したビル群のうえに、化石のような月が寂然と浮かんでいた。それらの光がうつすらと射す廊下の真中に立ったアイラ

は、胸に手をあてて薄く目を閉じる。

すぐに、かの女のつま先の辺りから、波紋のような歪みが生じ、それがゆっくりと身体を這い上がり、やがて全体像が大きく揺らぎ、ぼやけた。そうしてふたたびピントが合うように不明瞭さが払拭されたとき、アイラは姿を一変させていた。

髪は銀にちかいブロンドに变じ、身体は豊かな純白の羽毛で覆われていた。その背には、天使を連想させる大きな翼が生えている。

かの女はゆっくりと瞼をひらく。瞳はガーネットのように赤く輝いていた。

「私、エレクトロ・ブラッドなの。ソート・エフェクトのちからで、月光の下でもこの姿を隠すことはできるけれど、とにかく、これがほんとうの私……」

「コスプレ、とかじゃねえよな……すげえ」天草は驚きを隠そうとしなかった。

「つまり、菖蒲谷さんは……」

エイジが言いかけると、アイラはそれをさえぎって、

「アイラでいいから」

「いや、でも……」

「お願い、アイラって呼んで。エイジに他人みたいに呼ばれたくないの」

かの女の声がほとんど哀願するような調子だったので、エイジは息を飲んだ。

「……わかった。つまり、アイラは、量子コンピュータのなかの世界で生まれて、ホワイト・プラストにより実体化した意識体のひとつ、ってことだよな」

「うん」

「見たかんじ、白竜団のやつらと全然ちがうよね？」 薫は目を細める。

「あのひとたちは悪魔崇拝者で、私は天使崇拝者だから、ちがう姿になったのかも。ごめん、私も、詳しいことは分からない……」

「でも、エレクトロ・ブラッドの宗教って基本、悪魔崇拝なんだろう？」

エイジが訊くと、高島が、

「この世界にだって、悪魔崇拝のひとはいるじゃない。だったら、エレクトロ・ブラッドのなかに天使を崇拝するひとがいてもおかしくないでしょ？」

「ていうかさ、だれかに見られたらどうすんだ、これ——」天草はそわそわと階段のほうを見ながら言った。「とりあえず、部室に戻ろうぜ」

「ああ、だな」

エイジは、全員がなかに入るのを待つて、ドアを閉めた。そうして振り返ると、アイラは制服姿に戻っていた。そうして柳眉をよせ、天草の肩に手をかけている。天草は上体を傾けて咳き込んでいた。

「大丈夫？」

「なに、たいしたこたあねえ……」と、天草はかすれた声を出した。「私、癒してあげられると思う。ちよつと、いい？」

アイラはおもむろに、天草の咽喉へ手をかざした。そこに、霞のようなひかりがぼうつと生じ、皮膚に染みとおつていく。

天草は顎をあげてうつとりとした表情になり、目を閉じた。

「おお……なんか気持ちいいな、これ」

その声からいがらっぽさがだいぶ抜けている。

アイラの手元からひかりがパツと消え、

「どう、よくなった？」

「なんともない……」と、天草は普段どおりの声で答えた。「うお、すげえ！　なんか知らないけど、サンキュ！　じつは結構苦しかったんだよ……」

「だったら喋んなきゃいいのに……」と、黛は呆れたように言った。「でもさー、アイラちゃんすごいね。それもやっぱりソート・エフエクトなわけ？」

うん、とアイラは頷き、「それから、？　ちゃん？　はやめて。アイ

ラって呼んで欲しいの。みんなから、そう呼ばれていたから」

「呼ばれて、いた……」エイジは噛みしめながら復唱し、「ごめんアイラ、いくら考えてみても、初めて逢ったのは、やっぱり転校してきた日だと思うんだよな」

黛は、考え込むように腕を組み、それから、

「……ねえ伊勢崎。児玉先生がさ、八尋市のあちこちに不完全な私たちで時間を巻き戻された形跡があるって、言ってたじゃん。アイラとあたしたちが会ったのって、その、巻き戻された時間のなかで、だったんじゃない？」

黛の言葉によって、エイジの脳裏に浮かんだひとつの観念が、燎原の火のように広がっていった。

「アイラ、そういうことなのか？ 巻き戻された時間の記憶が、アイラにはあるんだな？ なあ、大友ってヤツのこと、知らない？」
アイラは睫を伏せて、

「……私も、なにもかも覚えている訳じゃないの。ほんの断片だけけれど、大友くんのことにははっきりと憶えてるよ。ずっと私たちのリーダーだった。……ただ、大友くんや、みんなのことを思い出すと、私、すごく不安になって、胸が押し潰されそうになるの。もしかしたら、私たちは、巻き戻された時間のなかで、……とても悲しいことを体験したのかもしれない」

「それって、要するにどういうことなんだ？」

「伊勢崎、落ち着けって」

エイジは天草に腕をつかまれて我にかえり、アイラの肩を両手で激しく揺さぶっていたことに初めて気がついた。アイラはいまにも泣き出しそうな顔をしていた。

「あ、……ごめん」

アイラは首を振って、「いいの、謝らないで。私、エイジが大友くんのこと大好きだって、ちゃんと知ってるから」と、ぎこちなく微笑んだ。

「わたしたちも、大友くんのことはずっと気になってた」と、高島

は言った。「エレクトロ・ブラッドを退治しているうちに、消息が分かるんじゃないかなって思っていたけれど、なかなか、ね……」
「おまえら、やり方がヌルいんじゃないか？」天草はひだりの眉をつりあげた。「そのへんで悪さをしようとしてる、その、なんつんだ、エレクトロンをよ、片っ端からとっ捕まえてさ、ビシビシやってさ、洗いざらい吐かせりゃいいじゃん」

「……えっ、拷問するってこと？」高島は目をみひらいた。

「だってよ、他にねえだろ。なあ伊勢崎、おまえどう思う？」

エイジは髪をかき、ため息をついて、「大友は嫌がるだろうな、そういうの。でも、やってみる価値はあるんじゃないか」

「伊勢崎くん、本気なの？」

「あたしも、賛成する」と、黛ははっきりと言った。

「いようし、決まりだな」と、天草は影の差す横顔をへんにぎらつかせて、「したら、どっかから、鞭とローソクと、蝶々みたいな怪しいマスクを探してこねえと」

「あっ、そういうノリなのね……」高島は安心したように言った。

「わたししてつきり、電球を口につっこんだり、ペンチで爪をぎゅうってやつたりとかだと思ってた」

「そこまではしないけど、脅かすくらいはしてもいいだろ」と、エイジ。

黛は窓のむこうを眺めて、「これから繰り出してみる？ よく晴れてるから月もバッチリ映えると思うし。きつと探しやすいよ」

「あっ、ごめん」と、アイラが小声で言った。「私、七時までに帰らないといけないから……」

「おうちの都合？」

黛が尋ねると、アイラは頷いて、

「内環状線のイーオンの交差点に、菖蒲谷病院ってあるの、知ってる？ 私、その理事長夫婦の養子になってるの。お義父さまも、お義母さまも、私がエレクトロ・ブラッドだってこと知らないし、あまり心配をかけたくなくて……。いつもおふたりのお休みになる

のが九時半だから、それ過ぎなら……」

「それに、あんまり早くからパトロールしても、なかなか見つからないかもしれない」と経験のある高島が言う。「深夜から明け方のほうが遭遇率高いよ」

「じゃあ、いったん帰って夕飯を済ませて、それから集合するか。十一時くらいに」

エイジが提案すると、黛が、

「そうだね。でさ、待ち合わせの場所、どうする？ あ、あたしんちのマンションでもいいよ。パパが従姉に貸してた部屋があるんだけど、転勤でニューヨークに行っちゃったからちようど空いててさ、いま、あたしが使ってるんだよね。だから、少しくらい早く来ても平気だし」

「へえ。どこにあんのよ？」と、天草。

黛は、すぐそこ、と東南のほうを指差す。「U F Jの斜向かいにスカイタワーレジデンスってあるでしょ。その406号室」

「うわ、いいとこだな、さすがブルジョア。……俺ん家遠くて、いちいち帰るのめんどくせーから、直で行かせるよ。つか飯食わせるよ」

「直はべつにいいけど、飯とか、ずうずうしくない？」

「わたしもいきたい！」と、高島が右手をあげる。「いい、みちる？」

「もーわかった。二人ともおいで。あたしなんか作ってあげるし！

……で、伊勢崎はどうする？ 直で来る？」

「せっかくだけど、帰るわ」

「なんだよ伊勢崎、相変わらず付き合い悪いな」天草が横から声を挟む。

「今日は親がいないから、犬の世話をしなきゃなんないんだよ。けれど、なるべく早くそっちに行くから」

「うん、わかった。待ってるね」

「しゃーねーな。そんじゃ、部室しめますか」天草はバッグを肩に

かけて、軍手をはめた。

エイジが窓の鍵をチェックしていると、アイラが声をかけてきた。

「ねえ、帰りもバス？」

「うん」

「よかったら、一緒に帰ろ？」

「いいよ」

紫紺に暮れなずむ空には、ピンで留めたような星がひとつふたつ、輝いていた。

「エイジはみんなと騒いだりするのがあまり好きじゃないんだよね」
それも誘いを断った理由のひとつだろうとアイラは言った。まるでエイジについての知識と実際が一致していることを愉快に思うような、得意らしい調子があった。

「ねえ、どうして？　じつは皆のことが嫌いだったり？」

「そんなことないって」

エイジは答えて、それから自分の、孤独と静けさをひそかに嗜好する傾向を、どうしたら誤解のないように言い表せるだろうか、少し考え込んだ。

バスが環状線の高架橋にあがると、窓を塞いでいたコンクリートの防音壁が途切れて、光の海が一望のもとに広がった。エイジはそれを眺めながら、

「……馬鹿騒ぎをしていると、大事なことを忘れてしまいそうな気がして怖いのかもれない」

「大事なことって、なに？」

アイラはお伽噺の先をせがむ子供のような目をしていた。エイジはなんとなく照れくさかったけれど、できるだけ誠実に説明してやりたくもなかった。

「毎日を生きていると、それが偶然か必然かは別として、とにかくいきなり襲われたりすること、あるじゃん。目の醒める瞬間、とても言えばいいのか。衝撃のなかにはつきりと真実味が見える感じって、わかるかな。そういうときに、まんまと不意を衝かれて動揺するのが嫌なんだ。——馬鹿騒ぎをしているあいだに、避けることのできない運命がすぐそこまで忍び寄ってきてるんじゃないかとか、なにか大切なことを見落としているんじゃないかとか、考えちゃうんだ」

「エイジはいつでも全力で戦えるように、落ち着いていたいんだね」

「そんな大げさなことじゃない。ただ、静かなところのほうが居心地がいいってだけで」

エイジはアイラの瞳に映る自分の顔を見つめながら、かの女が親しげにしていることの背景になにがあるのか、ふと知りたくなった。アイラのほうも、それと察したのか、やや目を落とし、

「……巻き戻された時間のなかで、私とエイジがどういう関係だったか、気になる？」

エイジは、うん、と答えた。

「あのね、……やっぱり言えない。だって、それって私の気持ちを伝えるのとおなじことなんだもん。恥ずかしいよ……」そうしてアイラは急に顔をあげ、「時間が欲しいの。決心がついたら、ちゃんと話すから」

「ああ……わかった」

エイジは努めてとくべつの関心を寄せていない風を装いながら、話題を変える先を模索して、

「……そうそう、聞きたいんだけどさ。俺たちが巻き戻された時間のなかで一緒に過ごしていたとして、どうしてアイラだけにその記憶があるんだろうな」

「私も全部憶えている訳じゃないよ。それに、初めのうちはまったく忘れていたの。今月の頭ごろ、うちの防犯カメラに妙なものが映っているって、警備会社のひとから電話があつて。たまたま受けたのが私で、その映像ファイルをメールで送って貰ったの。ひらいてみたら、いちめんの廃墟に、夏の白っぽい陽射しが注いでいた。それを見たとなんに、とても言葉では表現できない、複雑な感情が、胸に溢れてきた。そうだ、私、大切なことを忘れているって、みんなに会いにいかなきゃって」

「いちめんの廃墟……つまり八尋市は近い将来、そんな風になっちゃうってことか？」

はつきりしたことは判らない、とアイラは俯きながら言った。「そのときは、ただ、みんながドッペルゲンガーに苦しめられている

かもしれないって強い危機感だけがあった。すぐ、お義父さまに、虹ヶ丘へ転校したいっていうお話をして、それから市内のプロテスタントの教会をまわったの。ツバサが洗礼を受けていて、よく教会に通っていたことを思い出したから。かの女はやっぱり、ドッペルゲンガーに悩まされていた。私はかの女につききりで、覚醒を手伝ったの。苦しい道になることはわかっていたけれど、どうしてもクスリじゃなく、心のちからでドッペルゲンガーを従えなきゃいけないって、ツバサに話した。よく判らないけど、私、そうしなきゃいけないって感じたの。

こっちに転校してきて、大友くんが一人で白竜団と戦っているとはじめて知った。児玉先生がそのことを執拗に調べたがっていることもなんとなく気がついた。みんなが私を全然憶えていないことも分かった。私、児玉先生のことがかうまく思い出せなくて、それがかつに動けなくなっちゃって、みんなに話をするタイミングがくるのをずっと待っていたの。さっき、エイジもみちるも、天草くんも、ドッペルゲンガーをちゃんと制御していると知って、ほんとに安心したんだよ」

「そうだったんか。——けれども、どうして映画部にソート・エフ・エクト使いが集まったりしたんだろう。神崎もそうだし」

「こっちの世界には、『類は友を呼ぶ』っていう諺があるでしょ。私たちの世界にもそんなことがある。私みたいな天使崇拝者は、むこうでは絶対少数なんだけど、不思議とそういうひと同士が確率を超えて知り合ったり集まったりするの。それから……これは想像なんだけど、大友くんは映画部を立ち上げるとき、ソート・エフ・エクトの素質のあるひとを選んで誘ったんじゃないかな」

「大友が？ どうして？」

「大友くんはずっと前から、ドッペルゲンガーの制御に成功している。たぶん、その危険性もよく知っていたんだと思うの。だから、ドッペルゲンガーに悩まされそうな友達を、目の届くところに集めて、部活を通して定期的に会えるようにしておきたかったのかもしれない」

れない。だって、大友くんってそういうひとじゃない？」

「じゃあ、どうしてあいつは、『放っておいてくれ』なんて言うんだろう……」

「それは、分らないけど……でもきつと、大友くんには事情があるんだよ。——今晚、白竜団のひとを捕まえて、びしばし話を聞くんだっけ。なにか分かるといいよね」

エイジは曖昧に頷いた。脅しつけて話を聞きだそうとするようなことは、大友の心底嫌うやり口だった。たとえ相手がエレクトロ・ブラッドだとしても、かれは賛成しないだろう。

「だって、しょうがねえし……」と、エイジは開き直るように呟いて、「でき、大友について、ほかになにか憶えてること、ない？」

ひとつだけあるけど……、とアイラは気まずそうな顔をした。

「頼む、それ教えて」

アイラは窓のそとに視線を転じ、

「……エイジって？ ツンデレ娘？ が好きなんだってね。大友くんに教えてもらったよ」

その言葉で、エイジの脳裏に春先の記憶がぱつと蘇った。放課後、部室で、大友と一緒にローマの休日を鑑賞し、それから帰り道にどんな女が好みだという話になっていつになく盛り上がった。そのときにエイジは思い切って、中学のころ友人に借りてギャルゲーをやリ、ツンデレ娘に熱をあげたことを打ち明けた。するとその日から一ヶ月ばかり、大友はエイジになにか親切をするたびに、

（あんたのためにやってあげたんじゃないんだからね！ 変な勘違いしないよね！）と付け加えることを忘れなかった。

更には、エイジの十七の誕生日に、大友は「おめでとう」と言つてリボン付きのCDをさしだしてきた。帰宅して包装をむいてみると、有名な声優のツンデレっぽい台詞をあつめたマニア向けのものが出てきた。

翌朝、どうだったと尋ねる大友に、エイジは少し悩んでから、（ぶっちゃけ、悪くなかった……）と囁いたのだった。

そのときに大友が浮かべた、勝ち誇ったような笑みを思い出し、エイジはつい涙ぐんだ。

車内アナウンスが、停留所の近いことを報せた。エイジが鞆を脇に抱えて立ち上がると、アイラは急に、

「きッ、気をつけて帰んなさいよね!」と、慳貪な口調で言った。

「なにそれ」と、エイジは微笑んだ。

「へたでごめんね。私、ツンデレとかよく分らない……」アイラは急にしゅんとした顔つきになって、「でもさ、ツンデレの子って好きなひとに投げやりで冷たいことを言って、そのまま二度と逢えなくなったりして、後悔するようなことになったらどうしようとか、不安になったりしないのかな。——私は、やっぱり素直でいたい」

エイジは息を飲んでアイラの思いつめたような目を凝視した。やがてバスは停まり、ドアが開いた。エイジはやつとのこととで、

「……それ、なんとなく分かるよ」

とだけ言い、バスを降りた。そうしてふたりは窓越しにしばらく見つめあった。

*

古代ローマの政治家である大カトーは、あらゆる演説や手紙の最後を、「それにしてもカルタゴは滅ぼされるべきである」の言葉で締めくくったという。これに対抗するように、おなじくローマの將軍のスキピオは「それにしてもカルタゴは温存されるべきである」と訴え続けた。神崎には、大カトーこそ尤もで、スキピオの寛容を理解することは難しかった。ローマはカルタゴと地中海の覇権を巡って百年争い、ピレネーを越えてやってきた名將ハンニバルの軍勢に国土を二十年ちかくも蹂躪され、筆舌に尽くしがたい苦しみを味わったのである。

神崎は病床の枕元にローマ史の書籍を伏せると、募る憤懣をいかんともできなくなった。地中海にふたりの覇者が並び立つことはない。どちらかが滅びざるを得ないのである。もしカルタゴが勝利を収めていれば、カルタゴの為政者たちはためらわずローマを廃墟にしたことだろう。――まるで、エクリプス機関が、量子コンピュータのなかに作り出した人工知能たちのコミュニティを、徹底して研究のために利用し続けたように。そこに、人間社会の持つ本質が、よく現われている。優位に立てばどこまでも弱者を搾取するのが人間である。そのことは神崎の小学校時代の経験が裏付けている。クラスメートたちは嗜虐の渴きを満たすために生贄を選ぶ。選ばれた児童は登校を諦めるかさもなければ首を吊るかの二者択一に迫り込まれる。その過程には慈悲のかけらさえ見出すことが難しい。かれらは幼いゆえに残酷なのではない。むしろ幼さのゆえに、人間の本質を純粹なかたちで露にしたのである。人間がそうしたものである以上、この街においては、人間か、さもなければエレクトロ・ブラッドのどちらかが滅びるしかない。わかりきったことだった。であ

るからには、神崎はこう言わなければならない。「それにしても人間は滅ぼされるべきである」

大友は、神崎が認めたたったひとりの同級生である。大友はそのことを誇りに思うべきだ。しかるに、それほどの大友が、どうして人間の側に立とうとするのか、神崎はまったくもって理解できない。かれはこのままでは、人間を愛し、人間に裏切られた、悲劇のひとの系譜に連なることになるだろう。例えば、キング牧師やガンジーのような。それが神崎には残念でなかった。大友は甘くて愚かしいところもあるが、それでも来たるべき新しい時代を担わなければならない人物のひとりであると、神崎は信じている。その大友を切り捨ててしまうことは難しかった。

孤高のひとである神崎はつねに理解されなかった。それは宿命だから仕方ないとかれは諦めている。かれは自分にむけられた微笑を学校のなかに見出すことがなかなかできなかったけれど、まれに見るその透きとおるような笑みは、いつも大友の端麗な顔のうえに揺らいでいた。その微笑は時間をかけて、神崎のうちにわだかまる敵愾心を融かし去ってしまったのである。

神崎は全身打撲の痛みをしかめながら、ゆっくりと寝台から降りた。そうしてブラインドの操作棒をひねり、高層ビルが冬の夜空にひろげる天の川さながらの輝きを眺めた。病室の窓にあたる寒風が切るような音を立てている。耳をそばだてながら、神崎は次第に、じつとしていられないような、焦燥とも高揚ともつかない胸騒ぎを覚えた。なにかが動き出している。風がそれを神崎に告げていた。

脇腹にズキンと痛みが走り、鋭く呻きながら身を屈めたとき、硝子窓にうつすらと、痩せた男の上半体が映った。その腕が伸びていて、枕の傍のローマ史をとりあげる。男はパイプ椅子に腰をおろして、平然とページを繰り始めた。男の顔かたちは神崎と異なるところがなかった。

「君の力が必要なんだ……」と、神崎は狼がうなるように言った。

「けれど……生憎、教団から貰ったクスリは病院のやつらに取り上げられてしまった」

ドッペルゲンガーは唇の右端をつりあげて、「僕に挑むつもりならいつでも挑めばいい。けれど、そのまえにひとつだけ指摘してあげよう。君は理想を追い求める志士ではない、情念の亡者だよ。正しい動機を持つ者なら、試練に挑むのは、必ずしも望みのないことではないかもしれない。でも、復讐に燃える者は自らの熱にやられて火達磨になるだけだ。……わかっているんだろう？」

「だとしても、僕は僕の道をゆくしかない」

ドッペルゲンガーは咽喉を鳴らして笑った。

「馬鹿な。所詮エレクトロ・ブラッドは外道の集団に過ぎないんだよ。まだ人間のほうがマシじゃないか。どう考えたって、君が行こうとしているのは悪魔の道だよ」

「だったら、僕は悪魔として生きるまでだ！」

神崎は身体じゅうの疼きに耐えてふりかえり、敢然とドッペルゲンガーの双眸を見据えた。

*

エイジはミッキーに散歩をさせると、老犬用の柔らかい缶詰をあけてやり、それからシャワーを浴びた。外出の身支度をして、散歩のついでに買ってきた弁当を居間の電子レンジに入れ、温まるまで、暗い和室をぼんやりと眺める。母親は今朝、友人と箱根の温泉に行くとかで、数日家を空けるなどと話していた。父も出張かなにかで二三日いないので、留守番をよろしく頼むということだった。エイジは冷蔵庫の野菜室をひらき、中性脂肪をつるさく注意されている父が奥にこっそり忍ばせている発泡酒のミニ缶を役得とばかりに取り出すと、ちょうど温めあがった弁当と一緒に炬燵にならべ、テレビをつけた。

ブルトップを起こして半分ほど飲み干し、弁当の包装を破く手をふと止めたのは、よく見かける民放の女性アナウンサーが普段とは明らかにちがう切迫した調子で原稿を読み上げていたからだだった。その下に、（ニューヨーク夜間取引で原油先物価格が暴騰、一時バレル当り一五〇ドル超え）のテロップが出ている。エイジは妙に胸騒ぎがして、リモコンに手を伸ばし、音量をあげた。

「……本日午後二時、現地時間の午前六時、フランスのドロール県にあるトリカスタン原子力発電所が臨界事故を起こしました。これを皮切りに、世界各国でおなじような事故が相次いでいます。アメリカはオハイオ州のデービス・ベッセ原子力発電所では大規模なメルトダウンが発生し、現在、半径一〇〇キロ圏内に避難勧告が出されています。……ニューヨーク原油先物の夜間取引市場では、相次ぐ原発事故により火力発電に使われる原油の需要が大幅に増加するとの思惑から買い注文が殺到し、今年の最高値を記録しました」

それから、上空から撮影していると思われる黎明の都市風景が映し出された。黒々とした湖のほとりに広がる市街のかなたが空襲でも受けたように赤く輝き、そこから墨色の煙が濛々と立ち上ってい

る。リポーターはメインローターの爆音に対抗するためか、物凄い形相で声をはりあげていた。かれは、一連の事故がハッキングによるテロの可能性も否定できないというアメリカ政府の消息筋の見方を紹介して現地報告を終えた。

エイジは食い入るようにニュースを見ていたが、やがてかき込むように弁当を食べ終えると、カーテンの傍から黒々とした目で自分をみつめるミッキーに「行ってくる。帰りは遅くなるかも」と声をかけ、コートをとりあげて袖を通し、ハーフブーツをつっかけ、マウンテン・バイクを表に出した。

湯上りの喉元を零下にちかい空気になぶられて、エイジは身震いをしながら、テレビが報じた「一連の原発事故」のなかに日本のその含まれていないことを妙に思った。仮にエレクトロ・ブラッド達の仕業だとするならば、かれらが最も憎んでいるだろう日本の原発を標的にしないのはどう考えてもおかしい。そこに、より大きな悪意の企みを、エイジは感じ取っていた。無論、これらの懸念が飛躍に基づくものであることは分かっている。エイジは耳朵を引っかく夜風をいとわず、強くペダルを踏み込んだ。

飛ぶように流れていく夜の市街は、不自然なほど静まり返っていた。車も歩行者も、交通量が極端に少なく、信号を待たなくても余裕で六車線の道路を横断できた。年末年始の深夜過ぎならともかく、平日の一〇時くらいにここまで街がひっそりとしていたことは、エイジの記憶になかった。

私鉄の駅ビルの裏通りはまったくの無人で、映画館とパチンコ屋のネオンが淋しくちらついている。廃墟のように暗く聳えるビルのむこうに、大きな月が浮かんでいた。ただ風の音がわずかに鳴るばかりの静かな夜が、人口の密集地であるはずの街を包んでいる。エイジはその狭い裏道を、トップギアで疾走し続けた。

街の様子を本気で訝しく思い始めた頃、少しずつ自動車や歩行者とすれ違ったり追い越したりするようになり、そうして表通りに出た瞬間、溢れんばかりのひかりを顔に浴びて、目が眩んだ。――ぎ

ゆうぎゆうに渋滞した車のヘッドライトが、歩道を真昼のように照らしている。交差点ちかくの電光標識を見上げると、「木更津方面、川崎方面へ避難する際は、なるべく公共の交通機関をご利用ください」とあった。エイジは息を切らしながら、「なんの話だよ……」と呟いた。

黨の住む高級マンションのエントランスから、続々と出てくる家族連れらしき人たちは、一様に地下鉄の入り口のある交差点のほうへ小走りになって向かっていった。どの顔にも、緊迫した色がある。エイジはそれらを見やりながら、自転車置き場にマウンテン・バイクを入れ、黨に連絡をいれた。それから住人の流れに逆らって一流ホテルさながらのロビーに入り、エレベーターをつかって四階へあがると、番号の一致するプレートを求めて大理石を敷きつめた廊下を駆けた。

部屋は順番どりの場所にあつた。インタホンを押すと、待つていたように黨が顔を出す。

「いい匂いがするな。カレー作ったのか」

「まあね。まだあるよ、食べる？ ていうか、なに暢気なこと言つてんの。いいからあがつて」

エイジはブーツを脱いでスリッパにつま先をかけながら、

「その交差点の掲示板に、避難するなら公共交通機関をつかえとか出てたぞ。どうなつてんだ？」

黨は呆れ顔で振り返つて、

「もしかして、あんたつてテレビ見ない人？ あ、こっちにむかつてる途中だったのか。あのね、太平洋艦隊の一部が東京湾に接近してるんだつて」

「艦隊つて、アメリカの？ どういうことよ」

「わかんない。ホワイトハウスの報道官？ ていう人は、国防上の必要からそうしているという主旨の談話を出してるんだけど、日本政府に事前の連絡がなかったから、もしかするとヤバイことになるんじゃないかって、軍事評論家のひとたちがそろつてコメントして

て、それでこの騒ぎになってるみたい」

「は、なんだそれ」

「原発事故のニュース、見たでしょ。原因はハッキングによる誤作動らしいんだけど、すべてのアクセスは八尋島の地下からって断定されたんだって。大統領は今日の正午ごろ、首相に電話をかけて、迅速に問題を処理するよう要求してきたんだけど、日本側はこれを拒否したか遂行できなかったかで、アメリカを満足させられなかったみたい。アメリカには、日本がテロ組織を匿っているように見えるんじゃないかな。ほら、日本だけ原発事故が起こらなかったじゃん」

「で、アメリカは艦隊を東京湾に寄せてなにをしようとしてるんだ」
エイジが大きなリビングに入るなり、ソファに座ってテレビの報道番組を鋭い目つきで見ていた天草が、

「ミサイル攻撃とかじゃねえの？」

「ンなアホな。映画じゃあるまいし」

「伊勢崎くん、このことはよく考えたほうがいいと思う——」安楽椅子に脚をくむ高島は眼鏡のぐあいをなおし、「日本からのテロ攻撃でアメリカ人がたくさん死んでる。なのに日本はアメリカに全面的に協力しなかった。それに、八尋の地下には量子コンピュータとかの施設があつて、極秘の研究をたくさんやっていて、兎玉先生たちがそれを十全に防諜していたんだよね。アメリカの情報関係者にしてみたら、超うさんくさく感じると思う。放置したら更なる害がアメリカに及ぶかもしれないんだもの、アメリカ政府としては厳しく対応せざるを得ないんじゃないかな」

「アイラが、市街が廃墟みたいにか言ってたけど、それでってことなのか？ ……アイラはまだ来てない、か」エイジはリビングをざっと見渡し、それから壁にかかった時計を見た。一〇時をいくらか過ぎている。

天草はソファから乗り出してカーテンをずらし、そとを眺めながら、

「つか、この渋滞騒ぎじゃあバスもタクシーも使えないだろ。アイラ来れんのかな」

「大丈夫」高島が平然と言う。「あの子、空を飛べるから。月が出ている晩に限り、だけど」

「そういえばアイラって綺麗な羽根が生えてたもんね。そっか、飛べるんだ……」黛は羨ましそうに言った。

「ところで、これからどうするんだ」と、エイジはみんなに問いかけた。「今日は解散して、家族と一緒に避難したほうがいいんじゃないか。米軍がミサイルを撃ち込もうとしているんだったら、とにかく八尋市から脱出しないと……」

「そう簡単にいくかね……」と、天草が窓を覗いたまま、苦い顔で言う。「だってよ、エレクトロなんだらって連中は腕利きのハッカイを揃えてるんだろ？ そいつらが復讐のためにアメリカを挑発して八尋市を攻撃させようとしてるんだとしたらだ、市民をまんまと逃がすようなおマヌケはやらねえだろ。俺が連中の一員だったら、交通をマヒさせずにはおかねえもん……ほら見る、信号が消えた」

エイジが窓辺に駆け寄ってその事実をたしかめ、舌打ちを漏らしたとき、テレビのスピーカーが特徴のあるアラームを鳴らした。ふりかえると、画面の上部にテロップが表示されている。

（八尋市の交通管理システムに大規模な障害が発生。市の全域で渋滞の恐れ。……）

そのしたで、キャスターが横から手渡されたニュースに目を落とすなり、

「えー、ただいま入ってきたニュースです。八尋市の宗教法人『白竜団』の信者と思われるグループと、警察当局が、繁華街にある宗教施設の付近で銃撃戦を行っている模様です。尚、詳しい情報は入っておりません。繰り返します……」さらに横からディレクターらしき男が紙を差し出すと、それを受けて、「続報です。……銃撃戦は現在、JR八尋駅の構内や、港湾地区などでも行われており、交通機関の一般利用者や付近の住民などに多数の犠牲者が出ている模

様です」

「カオスだな……」エイジは呟いた。

「各々方。かくなるうへは豪勢に酒盛りでもやって、きやつらと一戦交え、華々しく討ち死にするでござるか？」

天草は、大河ドラマめいた爽やかな口ぶりとは裏腹に、顔をしかめている。

「あ、ヘネシーあるよ。もってくる？」と黛はそれほど乗り気でない様子で言う。

「もう！」高島は眉を八の字にして、「こういうときこそちゃんとしようよ」

エイジは黛を見やって、

「児玉先生とは連絡が取れないか」

「さっきも電話したけれど、出なかった。部活の帰り、留守電にメッセージを残しておいたんだけど。超忙しいっぽい」

「一等陸佐殿から事情を教えてもらって、それからどうするんだ」と、天草は言った。「街の平和のために、白竜団の連中と戦うのも？ 分からなくてもないけどなあ、焼け石に水だと思っぜ」

エイジは目をフローリングに落とし、それから昂然として、「この際、はっきり言うけれど、街のことは二の次に考えてる。俺が心配しているのは、大友のことだ。あいつは絶対に動く……根拠はない、ただの勘だけださ。俺はあいつがどこにいるのか知りたい。あいつがなにかをしようとしているなら、手伝ってやりたい」

「おなじく！」と、黛。

「そういうことなら、俺も付き合っぜ——」天草はソファに前かがみになって、「うちのことは心配っちゃ心配だけどよ、帰っても多分なんにもできねえし。まあ、近所の小学校にでっかい避難用のシエルターがあるつつう話だから、大丈夫だろ。けれどよ、どうする。大友は動くはずだと言っても、どこへ、が分からないじゃ、どうしようもねえ」

「だから、伊勢崎くんは、児玉先生のもとになにか情報が入ってる

かもしれないって考えて、連絡は取れないかって訊いたんでしょ？
あ、わたしも行くよ。大友くんの為になることなら、きつと街のためにもなると思うし、もしかしたら危機を止めることだってできるかもしれない……」高島は微笑んだ。

全員が頷きあったとき、ベランダに続くサッシ窓がこつこつと音をたてた。黛が近づいていって、カーテンを脇に寄せると、古い絵画から抜け出てきたような天使がガラスのむこうに立っていた。都市の夜景を背にしたその天使は純白の羽根をたたみ、刹那のうちに白いコートをもとった美少女へと姿を変える。黛は手を振って、それからサッシの鍵をはずし、かの女を迎え入れた。

「遅くなってごめんね……」冷たい強風と一緒に入ってきたアイラは鶯色の髪を手でなおし、しゃがんで革靴を取り上げながら、「この騒ぎで病院の手が足りなくなりそうで、急にお義父さまとお義母さまも駆けつけることになって、うちがバタバタしてたの」それから皆に訴えかけるように、「？巻き戻された時間？のなかでも、これとおなじことがあったよ。私、思い出した。けれど、起こったのは二月の初旬だったと思う……梅の蕾が膨らむところで、たしか豆まきのすぐ後だった」

「街にミサイルが降ってくるのか？それで八尋は廃墟になっちまうのか？」

エイジが尋ねると、アイラは、

「？巻き戻された時間？のなかでは、そう……。アメリカ軍は、白竜団の教団施設とエクリプス機関の地下施設をすべて破壊しようとして、巡航ミサイルを撃ち込んでくるの。けれど、結局、地下施設の防壁はびくともしなくて、ただ街がめちゃくちゃになって、たくさんひとが犠牲になったただだった……」

「映画どころじゃねえ、漫画だな」天草はエイジを見上げて皮肉っぽく言った。

黛は、靴をぶらさげたままのアイラに手招きして、
「玄関こつち。いまスリッパ用意してあげるね」そうしてリビング

から廊下へ向かおうとしたとき、かの女の携帯電話が鳴った。高島が、出なよ、わたしがスリッパ捜しておいてあげるから、と立ち上がる。黛はサンキュ、と応えてボタンを押した。

「あっ、児玉先生」と、かの女は驚いたように言った。それから幾度か相槌をして、エイジに携帯を差し出した。「副部長がいるなら代わってくれって」

受け取って、耳に当てると、

「おまえたちに仕事を頼むにしても、二週間のレンジャー訓練と、ソート・エフェクトの戦闘術、それから銃器の扱いに関する研修をしっかり受けてもらった後で、その仕事も簡単なものから少しずつ、と思っていた」と、児玉はいきなり言った。「だがそうもいかなかった。これ以上、前置きをしている時間がないから概要の説明に入る。エクリプス機関の本部施設の中核部分を、エレクトロ・ブラッドたちに占拠されている。今朝からだ。奪回のためにSATとSFGpを投入したが、手も足も出ず、たったいま引き上げさせるところだ。敵のソート・エフェクトに対応できんのだ。そこで伊勢崎映画部のメンバーを率いて施設の中核部の制圧にあたってくれないか。五人もいればなんとかなるかもしれん。——ああ、天草と高島それから転入生の少女がソート・エフェクトを使うことは、すまんが調べさせてもらった。——エレクトロ・ブラッドたちは機関施設の中核にある量子コンピュータ群を支配下に置き、その高い処理能力をつかって各国の軍事施設や原子力発電所のシステムのパスワードを解読し、不正アクセスをくりかえしている。これをただちにやめさせないと第七艦隊からミサイルが飛んできてしまう。情けない話だが、我々にはおまえたちの他に頼める人間がいない。どうだ、考えてくれんか？」

「そんな……急に言われても」

「戸惑うのも当然だ。おまえたちは軍人でもなければ公務員でもないのだから。俺としても高校生にいのちがけの仕事を頼むのはつらい。しかし、この危機に対応できる人間が他におらんのだ」

エイジは髪をかきまわして、

「……みんなと相談したいです。少し時間をもらってもいいですか？」

「わかった」と、児玉は言った。「ただ、引き受けてくれるにしろそうでないにしろ、早く返事を貰いたい。十分後にまた電話をする。そのまえに結論が出たなら、そっちからかけてもらえるか。番号は着信履歴に残るはずだ」

「あの……大友のことについて、なにか情報は入ってないスか」

「こつちも手を尽くして調べているが、今のところは、な。……連絡を待っている」

エイジはスワロフスキーで装飾された携帯電話をぼんやりと見下ろしながら、胸をかきまわされるような悲しみを噛みしめた。それは、大友なら児玉の依頼を二つ返事で引き受けるだろうと思ったからだ。けれどもエイジは街のことより大友の消息が気になる。そうして分からなくなる。大友の親友を自認して胸を張るならば、大友の無事を願うばかりではなく、大友の意思や価値観をも尊重しなければ本当ではないのかもしれない。手のなかで、電話がまた鳴った。エイジはそれを黛に手渡して、天草と、玄関のほうからもどってきた高島とアイラに、児玉からの話のあらましを伝えた。

「それを十分で決めるって？ 見た目どおりの鬼軍曹っぷりだな……」と、天草が首をすくめる。

「正確には……七分とちよつとだね」高島は腕時計に目をおとす。

「児玉先生はなんとかなるかもしれないみたいなのを言っただけだけど、俺は疑わしく思ってる」と、エイジは天井を見上げて考えを巡らせた。「白竜団の施設でエレクトロ・ブラッドとやりあったことがあるが、確かに、勝てない相手じゃない。けれども、ソート・エフェクトを使って戦うのは半端なく疲れるんだ。ひとりが相手にできるのはせいぜい十数人までだろう。それ以上はたぶんもたない……」

高島は大きく頷いて、

「確かに疲れる。派手にソート・エフェクトを発動すると特にだよ。引き受けるんだったら、節約して戦わないと」

天草は腕を組んだ。「でもさ、アイラってRPGの僧侶キャラみたいに仲間の回復とかできるっぽいじゃん。ほら、俺の喉を治してくれたみたいに。戦って疲れたらアイラに癒してもらえばよくね？」

「うん……いいよ」アイラは微笑する。

「あのね、アイラだって疲れるんだよ」と、高島は天草に釘をさす。「困憊したらアイラに回復してもらうつもりで、ノリノリでオーバーキルとか、やめようね」

「……確かにかましてくれそうだな、そのエジプト人は」

エイジが呟いたとき、携帯電話をいじっていた黛が、急に、

「大友の居場所が分かったかも」と、液晶画面を全員に示した。

市営スタジアムから八尋南署にかけての地図が、表示されている。南北に流れる人工河川の真中あたりに、赤い点があった。ちょうど、地下調節池へ折れる口にあたる場所だった。

「どういうこと？」エイジは黛を凝視した。

「いまの電話、妙子ちゃんからだったの。大友が夕方頃、とつぜん帰ってきて、家族と晩ごはんを一緒に食べて、それからまた出て行っちゃったんだって。でね、あたし、妙子ちゃんに、大友が戻ってきたら原チャリにこっそり発信機を付けてほしいって頼んでおいたの。この赤い点は、いま発信機がある場所ってわけ」

「動いてねえみたいだけどよ、大友はそこに原付を乗り捨てたって考えればいいのか。地下調節池の中になんかあるのかね」と、天草。「地下だけに、エク립ス機関の施設と繋がってるのか？」高島はあごに指を当てる。

「それ、貸してくれ」エイジは黛から携帯を受け取って、リダイヤルした。児玉はすぐに出た。

「おう、結論したか」

「その前に、ちょっと訊きたいんですけど、地下調節池ってエク립ス機関の施設と繋がってたりしますか？」

「誰にも言つなよ。……そのとおりだ、非常用のエレベーターがある」

ビンゴ、繋がってるってよ、とエイジはみんなに伝えた。

「しかし、どうしてそんなことを聞く？」と、児玉。

「大友が調節池の口のあたりに原付を置いてるってことが分かったんです。あいつ、そこから地下施設へ入ったんじゃないかと。——中枢部を制圧しろって話ですけど、やるだけやってみます」

エイジが携帯の口をおさえ、いいよなと念を押すと、全員がしっかりと頷いた。

「そうか、恩に着る！」児玉はホツとした様子で言った。「至急、ヘリで迎えに行く。全員、マンションの屋上で待機していてくれ」

ヘリポートのフェンスのむこうに、暖色のLEDでライトアップされた屋上庭園が、夜空に詠えられた舞台のように浮かんでいた。砂色の光を帯びた冬枯れの芝のうえにアンティーク調のベンチが並び、そのうえに葉を落とした木立が枝をひろげる様は、どこことなく荒涼としていて、物淋しい風情があった。高所の風は一際強くうなり、庭園を土台から揺さぶるようだった。そのかなたには高層ビルが連なつて、悠然と輝いている。

この人工島は学術研究やエネルギー政策の必要のもとに誕生し、経済的の動機をもつて生長したけれども、それを思えば畸形的とも呼べるほどに冴えた景觀で、沖合に、この優雅な市街へ照準を合わせている艦隊があると想像することが難しいくらいだった。エイジはそこに一種の痛々しさを覚えて、フェンスに指をあてながら、眉間に皺をあつめた。

すぐ傍では、天草がそのフェンスに背を預け、しゃがみこんでいる。かれはエイジの視線に気付くと、

「高えところが苦手なんだよ……」と、風のうなりにかき消されそうなくらい弱々しい声で言った。

「これからヘリコプターだつて」みだれる髪をおさえた高島は、ニセチチと決め付けられたことの意趣返しとばかりに天草を煽っている。「児玉先生が乗ってくるのは、軍用のものじゃないかな。もしかしたら、ドアのないやつかも。ほら、戦争映画とかで、見たことあるでしょう？ あれって落っこちたりしないのかしら？」

天草はげんなりした顔つきで、「高島ってあんがい性格悪いよな

……」

「というより、俺はいまだに高島のキャラが掴めないよ」と、エイジは天草にだけ聞こえるように言った。

そうして高島に嗜虐的なものを感じながら、庭園のむこうの夜景

を眺めているうち、機銃掃射のような爆音が背後から響いた。振り返ると、ヘリのライトの放つぎらぎらした光がヘリポートのコンクリートのうえを滑っていった。ホバリングを始めた黒くて大きなそのヘリは、強風をエイジたちに吹きおろしながら、ゆっくりとマル・エイチの中心に着地する。

前の座席から、迷彩服をまとった壮年の大柄な男——児玉が身体を出した。その横顔には薄闇のなかでもはっきりわかるほど濃く疲労が浮き出っていて、学校にいるときより十は老けて見えた。メイン・ローターが騒々しく回転するしたで、かれは声を張り上げながら手を振っている。エイジはドアのない側面から、スキッドを踏んで機内にあがった。そうしてアイラや黨の腕を引いて搭乗を手伝いながら、天草に「ベルトはちゃんとある。大丈夫だって」と声をかけた。天草は、なにも答えず、ただ苦い顔をした。

「全員、シートベルトをつけたか」児玉は険しい声色でエイジたちに確認を取ると、座席に戻って、すぐに発つよう、操縦席の若いパイロットに指示を出した。

大都市の煌々たる夜景が、ゆっくりと沈んでいく。エイジはアシストグリップを掴みながら、硝子の欠片を撒き散らしたような地平線の拡がっていく様を見下ろした。いちばんその美景を喜んだのは隣の黨だった。

「不謹慎かもしれないけれど、なんかテンションあがっちゃう。ねえ、ツバサもでしょう？」と、振り返って、奇妙な声をあげる。エイジがつられてうしろの座席へ顔を向けると、高島は塩化ビニールの大仏を被って澄ましていた。隣の天草は、微笑するジョージブッシュをつけて仰け反っている。アイラは戸惑うような顔つきになって、額にうさぎのぬいぐるみをかけていた。

「……あんたたち、どうしてもそれ被っていききたい？」

大仏がくりと黨にむかって、

「だって、正体を知られちゃったら今後の活動に支障が出るかもしれないでしょう。ねえ天草くん？」

ジョージブツシユはグツと顎をひいた。「ブツシユシニアだったからお断りだけど、ウォーカーブツシユのほうなら考えてもいいと思っただんだ。……伊勢崎、おまえなら俺の気持ち、分かってくれるよな？」

「ねえ、伊勢崎……」 黛はなにが言ってやってくれというような顔つきをする。

エイジがリアクションに困っていると、児玉がいきなり後ろに身を乗り出してきて、

「それじゃあ視界が利かんだろう。戦闘に差し支えるから外すべきだ。だいたい、現場に野次馬なんかいないぞ。……どうしても顔を隠したいなら、かわりにこれを使え」と、防寒用のフェイスマスクを人数分差し出した。アイラが手をのばして受け取り、全員に配る。高島と天草は仕方なしにという風に相次いで被りものを脱いだ。それを児玉は預かっておくと行って奪っていった。

エイジは高島たちにもう少し危機感をもったほうがいいと忠告するべきか迷ったけれど、かの女の顔を見つめてその必要はないと結論した。目元には、怯えているひとに特有の硬さがあつた。玩具のマスクを被っておどけてみせたのは、かの女なりの、不安に飲まれない工夫だったのかもしれない。その傍で天草は膝をかくかくと震えさせている。エイジはそこに、今まで当然のように続いてきた日常が終わった確かな印を見たように思った。そうして始まる新しい日々には、「不謹慎な軽口」という概念は、恐らくない。自分を守るのに必要なだけの活力を奮い起こすためならば、敢えて乱暴な冗談も吐かなければならないのだろう。エイジはそんな風に考えると、おもちゃを被って戦いに出ようとした二人が愛しく感じられた。

「……俺、ラーメンマンがいい。ドン・キホーテに行けば売ってるかな」

天草にそつと話かけると、かれはにやりと笑った。

「あるんじゃない？ 買いに行くならつきあうぜ」

黛は児玉のほうを気にしながら、声を落として、「えー、マジ？

あたしたちその路線でいくの？」

「みちるは何にする？」と、高島は顔を寄せて尋ねた。

「うーんと……あたしクマのぬいぐるみにする！」

「あー、そうなんだ……可愛いやつ被っちゃうんだ……笑いは取りにいかないんだ……」高島は興ざめだとはかりに目を細めた。

「だって。アイラはうさぎなんだしさ、あたしがクマかぶったっていいじゃん」

天草は驚いたような顔をして、「おまえ、まさか、自分でそういうキャラだと思ってるの？」

むすつとして黙り込んだ黛のむこう側では、アイラが壁際に寄って、遠くを見透かすようにしている。そこに端倪すべからざるものがあるという表情だった。エイジはシートベルトを緩め、そとへ身乗り出した。そうして目を疑った。透明なゼリー状の揺らぎが、都市のかたに巨大な半球を形成している。それが夜景を飲み込みながら爆発的に膨張していた。

「おい！」と、エイジは仲間たちを振り返って、「あれ見てみ！」

エイジの腹のあたりから真っ先に顔を出した黛が、「え、なに？

ホワイト・ブラストなの？ てゆうか、迫って来てるけど！」

「なんか、テレビの特番で見たヤツよりぶよぶよしてんぞ……」と、天草は言った。

津波のように押し寄せてくるそれは、瞬く間にヘリを覆った。フロント・ガラスを波うたせ、兎玉とパイロットをコクピットごと縦横に引き伸ばし、シートや天井をコンピュータ・グラフィックさながらに揺さぶって、後方へと抜けてゆく。そうしてエイジはテールローターのむこうに遠退く異様な？空間のゆらぎ？を見た。

足下では、その波濤を追って停電が始まっていた。渋滞のヘッドライトが国道や高層ビルの谷間に敷くひかりの帯を残し、区画ごと挟り取られるように夜景を消失させていく。

そうして拡がった深い闇のなかからとつぜん稲光のような輝きが起こり、機内がパツと明るくなった。一拍置いて、戦争映画さなが

らの大爆音が大気を震わせる。——いくらもしないうちに、市街の随所から次々と閃光があがり、夜空は殺伐とした破壊の雷鳴で満たされた。水平線付近の上空では、得体の知れない物体がひかりを曳いて飛び交っている。その幻想的なうつくしさは流星群を彷彿とさせた。

児玉が操縦士にむかつて高度をあげると訴えている。謎めいたながれ星は、ヘリからそう遠くないところへも轟々とうなりをあげて飛翔してきた。ヘリのうしろで閃光が散ったとき、建物の連なりに差した黒い影が、先の尖った長細いかたちをしていたことから、エイジはそれをミサイルに違いないと思った。途端、身体じゅうに鳥肌が立った。

耳を聳する轟音と、網膜を焼くような光のなかを、機体はのろのろと上昇していく。児玉は無線機をとりあげてしきりに怒鳴っている。

「……問題が起こったらずくに報告しろと言ったはずだ。……言い訳はあとで聞く。それより、状況を説明しろ。……聞こえん、もっと大きな声で喋れ！」

「……実は、施設中枢を占拠していたエレクトロ・ブラッドもが先ほど壊滅した可能性がありまして……調査中だったんです」と、無線の声が音割れを起こしながら答えている。

「壊滅だと？」

「一佐がお出になつたすぐ後でした。施設の監視カメラに侵入者のすがたが映りまして、それからものの五分もしないうちに敵の気配が消滅してしまったんです。で、いま、なにが起こったのか確認を取ろうとしていたところで……。監視カメラの画像を解析にかけたのですが、侵入者は児玉一佐が担当されていた少年——大友といいましたか——かれではないかと」

「いくつか聞きたいことがある」と、児玉は左手で額を押さえながら、「米軍が通告してきたタイム・リミットまで、まだいくらかあったはずだ。どうしてミサイルが飛んできた」

「それは……エレクトロ・ブラッドがペンタゴンの基幹システムに侵入を企てた為だと思われます」

「少しでも手に余るようならネットワークを物理的に遮断してしまつて構わないと言つたはずだが？」

「申し訳ありません、上からの許可を得られませんでした……」

「あたりまえだ！」フロント・ガラスに淡く映る児玉の顔が仁王像のようになった。「量子コンピュータのお蔭でいい思いをしてきた連中が、ネットワークの破壊を認めるはずないだろう。そんな奴らに許可を求めてどうする。俺が全ての責任を負うと言つた意味がわからなかったのか？ ……まあ済んだことは仕方がない。で、大友はいま、どこにいる。連絡は取れるか」

「それが……自分たちも報告を待っている状況でして……」

「情報が入ったら即、知らせてくれ。それから、さっきのはホワイト・ブラストで間違いないな？ 永久機関の被害状況は？」

「反物質炉と加速器が著しく損傷していて、少なくとも応急処置でなんとかなる状況ではないようです。詳細は担当班が調べているところですが、このさなかに起こつたことを考えれば、エレクトロ・ブラッドどもの仕業と見て間違いないかと……あつ、封鎖エリアの調査にあたつていた石田二尉から、たつたいま通信が入りました。繋がりますか？」

「そうしてくれ」

児玉のひとさし指が、苛立つたように計器類のうえを叩いている。無線のスピーカーがブツ……と鳴ると、その動きがとまった。

「……こっちは酷い状況です、一佐」と、さっきより幾分若い声が云う。「……おいおいおい、吐くならむこうでやってくれ。そのへんはまだ誰も手をつけてないんだよ。言つとくけどな、俺はおまえのゲロにまみれた制御卓なんか弄りたくないからな。……すいません一佐、さっきから部下どもが催しちまってどうしようもないんです。遺体の損傷が激しくつて、だれがだれだかわかりやしない。そのうゑにエレクトロ・ブラッドどものミンチがばら撒かれてるもん

だから、もう……」

「細々したことはあとで聞く。それより、大友はそこにいるのか」

「いや、姿が見えませんが。非常階段やエレベータは部下たちに調べさせましたから、かれがそこを通って施設の外に出ていないのは間違いないと思いますが。——ところで一佐、ここに訳の分からん装置がありましたね。決してふざけている訳じゃないんですが、他に表現しようがないんで敢えて言います、どうか怒らないで聞いてくださいね。どこでもドアっていうんですかね、ドラえものの。あれに似たものが備えつけられているんですよ」

「続ける」

「金属製の枠が、制御室の壁に取り付けられているものと想像してください。その枠のなかは当然、壁じゃなきゃいけませんよね？

ところが、なかは石材らしいものを敷き詰めた床と、建ち並ぶ円柱の、ただっ広い空間になっているんです。実はさっき、勇気を振り絞って少しばかり中を見てきたんですけど、百メートルほどいくと星空が見えてきて、それからすぐに地面が途切れ、腹這いになって下を覗いてみたら、なんと八尋の市街が横たわっていたんです。高層タワーと市役所ビル、あと人工河川の位置関係からそうだと分かりました。なにより、艦対地らしいミサイルが雨あられと降り注いでいましたからね。いま空爆を受けている都市といたらこのほかにないでしょうし。ところで一佐、そちらは大丈夫ですか？」

「いまのところ被弾してはいない。で、その装置のことだ。エレクトロ・ブラッドたちがどの経路をつかって施設に侵入したのか、いっこうに掴めなかったが、それを使ったと考えるのが妥当かもしれないな」

「そうですね。で、れいの少年は奴らが使ったドアのむこうへ消えたらしい、と……。どうしましょう、一佐が追えと仰るならただちに搜索隊を編成しますが」

「いや、ソート・エフェクト使いの調査は我々の仕事だ。おまえたちに任務外の無謀な探索はさせられん。いいか、そのドアには二度

と入るな」

「なーに、問題ありませんよ。女房子供のいる奴はもちろん連れて行きませんし、幸いうちのカミさんの実家はお蔭さまで結構羽振りがいいみたいですし、娘にしたって、最近ずつと帰りが遅いせいか、パパの名前さえ忘れちゃってるくらいですからね」

フロント・ガラスのむこうに暈ける児玉の影が、申し訳なさそうに額をゆがめた。「とにかく、状況を整理して善後策を協議しよう。すぐに戻る。そっちも調査を急いでくれ」

「了解」

児玉が無線機を下ろしたとき、エイジは、アイラにコートの袖を軽く引かれているのに気がついた。

「そのドアは、エレクトロ・ブラッドがこっちの世界へ渡ってくるための装置に間違いないと思う。私もそれをつかって逃げてきたの」

「じゃ、そのむこうに広がっていた空間というのは……」

「パンデモニウムっていうエレクトロ・ブラッドの都市かもしれない。私、小さい頃に行ったことがある。パンデモニウムは白竜団の聖地で、都市全体が神殿みたいになってるの。——去年、ホワイト・ブラストが起こって多くのエレクトロ・ブラッドが実体を持つようになったとき、パンデモニウムもその影響を受けたんだけど、エネルギーが充分じゃなかったから、ヴァーチャルリアルと現実のちょうど中間くらいの領域に留まっていたみたい」

「でも、無線のひとは崖のしたを覗いたら八尋市街が見えたって言うってたぞ」

アイラは頷いて、

「さっきの、強烈なホワイト・ブラストのせいで、パンデモニウム全体がこの世界に現出してしまったのかも」

シートから乗りだしてきた天草が、「なあ」とアイラの肩に手を置き、外にむかってあごをしゃくった。「……もしかして、あれがそう？」

エイジは視線を転じるなり、身体じゅうが粟立った。ヘリの右前

方に、得体の知れない影が聳えている。影はルネ・マグリットの著名な絵画のように超然と夜空に浮かんでいた。遠い空爆のひかりが表層に散ると、中央アジアの岩窟遺跡を連想させる壮大な建築物の連なりが、幽趣をもつて浮かび上がる。

「そういうことだろうな……」児玉が顔半分ふりかえった。

「児玉先生、俺をあそこに下ろしてください」エイジは児玉の腕を掴んで言った。

「気持ち分かるが、それはできない——」児玉は言下に答えた。

「おまえたちは目下、我々の切り札と言ってもいい存在だ。見通しの立たないことをやらせる訳にはいかない」

「先生、そんな！」と、黛は叫ぶ。「あたしも下ろして欲しいです。お願いします、絶対に大友のこと連れて帰りますから！」

「駄目なものは駄目だ」

エイジは高温の得体の知れないものが胸を突き上げてくる感覚に駆られて、「……先生、はつきり言いますけど、先生がここで大友を見捨てるよう、俺に強いるんだったら、俺は先生の敵になりますから。ヘリがああ岩に背をむけたとき、俺が大人しく座っていると知らないほうがいいですよ……」

「俺を脅しているのか？ 見くびられたものだ……」と、児玉は鼻を鳴らした。「伊勢崎、軍人を舐めるなよ。ここで暴れても、おまえは絶対にあれには上陸できない。墜落して死ぬだけだ。友達を巻き添えにしてな」

「勘違いしないでください。俺はあなたを脅しているんじゃない。

ここまで来て、大友の傍へ行くことができないんだったら、全てをぶち壊してしまったほうがマシ……それくらい、自分を抑えることができなくなっているんです。……俺、ほんとうにやりますからね」

「先生、どうかお願いします」と、高島が懇願する。「わたしたちをあれに降ろしてください。うまくいけば、先生たちの役に立つような情報をたくさん持ち帰ることができるかもしれない」

「自分も、行くっす。ここで行かなかったら、ただのヘタレなんで」

「私からも、お願いします」

天草やアイラまで続いて頼み込むと、児玉は顔を鬼のようにしかめ、それからしばらく黙り込んでいたが、ふと操縦士に、「パラシユートはあるか」と尋ねた。操縦士が、「緊急用は提携していませんが、空挺用ならばあります」と答える。数を問うと、四つという返事だった。児玉はエイジたちをふりかえって、「俺はこれから、米軍に空爆をやめさせるためにありとあらゆることをしなければならん。場合によっては、朝まで忙殺されるだろう。多分、迎えには来れないぞ。安全を確認できない限り、部下を出すつもりもない。かわりにパラシユートを四つ置いていく。菖蒲谷は空を飛べるんだっただ。月が隠れてしまったら、そのときは伊勢崎にでも抱っこしてもらえ。——そういうことで構わないか？」

全員が頷くと、児玉はいつそう渋い顔になってシートに戻った。

「……死ぬなよ、おまえたち」

壁に穿たれた採光の窓から月影の射すその森閑とした回廊に、濃い血の匂いが漂っている。ときおり遠くから雷鳴に似た響きが寄せてきて、壁や円柱が揺れた。エイジたちはそのなかを、ほとんど無言で歩いた。

磨き上げたオニキスのような、うつくしく幅のある階段を上がると、凄惨な光景が広がっていた。広間の中央にある大きな噴水のまわりに、化け物じみた黒い膚の生きもの——エレクトロ・ブラッドの屍骸が散乱している。鋭利なもので裂かれた傷口から赤黒い液体が滲み出て、床に光沢を広げていた。エイジの傍で、高島がハンカチを口にあてている。瞼はすこし痙攣していた。

「でもさ、待つて」と、黛は漆黒の骸を遠巻きにしながら、「月のひかりは直接届いてないよね？ こいつら、なんでこの姿なの？」「ここがエレクトロ・ブラッドの聖地だからかも……」と、アイラは言った。「それから、比較的強い力を持っていたり、それ専門の訓練を積んだりしたエレクトロ・ブラッドは、自分の姿をある程度コントロールできるの。たとえば、私が月明かりの下でもこの姿を保てるみたいに。かわりに、強力なエレクトロ・ブラッドは現実世界に出て行くことができない。裏返せば、市街をうろついていたエレクトロ・ブラッドのなかにそれほど上級のやつはいなかったってこと。私も、そう。でも、さっきの凄まじいホワイト・ブラストの影響で、条件は変わったかもしれない。パンデモニウムが現実の世界にあらわれちゃったくらいだから」

高島はハンカチのうえに皺をあつめて、

「それって要するに、ここには八尋にいたのより強力なやつがいるかもしれないってことでしょ？ うわ……」

「おい、こいつ息があるっばいぜ」染みるように水音をたてる噴水のむこう側から、天草が呼びかけている。エイジがまわっていくと、

血にまみれたエレクトロ・ブラッドが、尖った顎をガチガチと鳴らした。

かれは床を這うようにして後ずさりながら、

「感じるぞ……おまえらも覚醒者なのか？」

「いま、『も』つったな」と、エイジは問い返した。「来たんだな、大友が？ あいつは何処に行った」

「……さあな」

エイジは苛立つあまり、却って微笑して、てのひらに焰を起こした。

「ま、まで！ 言えば殺さないと約束してくれるか？」

「おまえが素直になってくれるなら、俺もこんなことをする必要がない」

「上だ」と、かれは血に染まった歯をむきだした。

エイジが目を細めると、かれは壁際の、パイプオルガンを連想させる四メートル四方くらいの台を指差して、「あれだ……ゴンドラを使って上へ行った」

「上には何がある？」

「……パンデモニウム大寺院」

「この都市の教区長がいるところだよ」と、アイラが言った。「エレクトロ・ブラッドの政府のなかでも大きな権力をもっているひとたぶん、八尋に信徒たちを送り込んだのもそいつ」

「よし、いい子だ。行つていいぞ」と、天草はエレクトロ・ブラッドに言った。そうしてよたよたと逃げていくエレクトロ・ブラッドの背にむかって、エイジはいきなり腕を振った。途端に、エレクトロ・ブラッドは業火に飲まれて黒い灰を散らせた。断末魔を上げる暇さえなかった。

「お……おい、伊勢崎！」天草が驚きと非難の混じったような目をエイジにむけた。

「仲間を呼ばれたらどうするんだ。——言っとくけど、俺は大友と一緒にここから出るまで、鬼になる覚悟だから」

「伊勢崎くん……」

高島が困惑したように呼びかける傍をエイジは通り過ぎてゴンドラにあがると、

「みんなに引かれたって、別にいいよ。あいつさえ無事だったら。」

……さ、早く行こう」

最後に黛が乗り込んで、アイラがコンソール・パネルのようなものに幾度か指で触れると、ゴンドラはゆっくりと上昇を始めた。

「伊勢崎って、本当は怖え奴だったんだな……」と、天草は独りごとのように言った。「実は、初めて会ったときからそんな気がしてたよ。おまえみたいな目付きをしてる奴が、そんなナイスガイな訳ねえってな。いままで、猫被ってやがったのかねえ」

「そついう話、後にできない？」

天草は首をすくめた。「黙ってるってか。おー怖わ」

「ね、仲良くいこう？　いつもの調子でさ！」黛が明るい声をあげると、天草は冷ややかにかの女を睨んだ。

「……俺は笑えねえことをする奴が大嫌いなんだよ」

「残念だな。俺は天草のことが好きなんだけど」

天草は露骨に舌打ちをして、「おまえ、おちよくってンのか？」

「ねえ、ふたりとも。仲良くできないんだったらパラシユートを使って帰ってくれない？」と、高島は厳しい口調で言った。「わたしたち、これから命がけの戦いをするかもしれないんだよ。力をあわせなきゃいけないんだよ」

重苦しい沈黙のあと、

「……そうだな」天草は神妙に頷いて、むこうのほうを向き、「

……悪い、伊勢崎」と呟いた。

「いいよ、天草がキレるのも分かるし。俺は、おまえに嫌われたって、おまえが転んだらいつでも起こしてやるつもりだから」

エイジは静かに応えようと、仲間たちと少し距離をとって、手すりに寄りかかった。天草はエイジになにか言いかけるそぶりを見せたが、結局黙ったまま、絶壁にむかってしゃがみ込んだ。黛がその傍

に屈んで、

「あんた、高いところ駄目なんだっけ。大丈夫？」

「下を見なきゃ、なんでもねえって。ありがとうな」

エイジは眼下の東京湾を眺めながら、たしかに天草にはつらい景色だろうなと思った。まったく明かりのない夜であれば闇に紛れてしまったのだろうが、中天に氷で磨いたような月が懸かっているせいで、魔性じみた風情があった。その茫漠とした海を眺めていると、髪が強風に乱され、ときおり視界がさえぎられる。エイジはゆっくりと前髪をかきあげた。そうして、水平線ちかくの、チラチラする光に目をとめた。そこに第七艦隊がいるのだろう。初めのうち、艦対地の砲撃やミサイルの噴射が光っているのだと思っていたが、上空に流れる様子がなく、妙に感じた。気づけば、真下の八尋市街からあがる空爆の光がだいぶ落ち着いている。広範に見える赤々とした輝きと黒煙は、火災によるものだろう。

よく目を凝らすと、海のうえに揺れる光からも、煙が棚引いている。すぐに、日本側から反撃があったのだろうかと思っただけで、そうなれば日本はアメリカと全面戦争に突入せざるを得ない。その覚悟が日本政府にあるとは考えられなかった。——答えは予期しない方向から与えられた。右手に、夜空にむかって大きく突き出た滑走路のようなスペースがあり、そこに十数メートル程の雄大なヒト型のもものが整然と並んでいる。

「あれはなに？」

と、指差してアイラに尋ねると、かの女は傍に来て、

「グラシヤラボラスとティターンだと思う。エレクトロ・ブラッドの兵器。ソート・エフェクトで制御するシステムなの。でね……」

なお、言葉を継ぎかけたとき、爆音が轟いてゴンドラが激しく揺れた。アイラはエイジの腕にしがみつき、黛は悲鳴をあげて床に伏せる。天草は音源を探るように視線をさまよわせた。高島が「あれ……」と指差す先にエイジはカイトのような影を見出した。その腹から分離した細長いものが、花火のような輝きを曳いてパンデモニ

ウムの壁面に突っ込んでいき、猛烈な爆発を起こす。ゴンドラがまた大きく揺れた。

滑走路のほうで異変があった。巨人のひとつが魂を宿したように動き出し、六対の透明な翼をひろげて宙に舞い上がると、凄まじい速度で三角形の飛翔物——恐らくステルス戦闘機——を追尾し始め、ふたつの影が交錯したと見えた瞬間、オレンジに輝いて爆発した。

——巨人が銀河に黒い輪郭を浮かべている。破壊されたのは戦闘機のほうらしい。

後から巨人たちが次々と蜻蛉のように翅をはためかせて浮上してゆき、空中で編隊すると、水平線の艦隊めがけて整然と飛行していく。

「分かんねえけど、アメリカ艦隊とパンデモニウムが交戦を始めたってことか？」と、天草は言った。

「それも、エレクトロ・ブラッドたちのほうが優勢みたいね。ほら

——」と、高島は水平線を指差す。「空母っぽい艦が傾いてる」

「おまえ、見えんの？」

高島は得意げに、うん、と言った。

「だったらさ、眼鏡必要なくね？」

「……………」

「えっ、どうして黙ってんの」と、黛が不審な顔をする。「遠視とかじゃなくて？」

「そっ、そうそうわたし遠視なの！」

「どれ、ちよっとそれ貸してみろ——」天草は高島の顔に手をのばして有無を言わさず眼鏡をとりあげる。「あ？　なんだこれレンズ入ってねーじゃん。つまりあれか？　おまえ、『賢そうなわたし』を演出するために伊達眼鏡をかけてたんか？　うわあ、寒いわあ……」

「ツバサ、やめときなよ。あんた基本的におばかキャラなんだから」「ち、ちがうの！　今日はたまたま！　……お願いみんな、学校では黙ってて！」

「生きて帰れたら、いくらでも黙ってやるよ」と、エイジは言った。「それより、ゴンドラが動いてない。さっきので止まっちゃったみたいだ」

「ほんとだ……」と、黛がワイヤーを引つ張りながら言う。「ええっ、どうすんの？」

パネルをしきりに操作していたアイラが、「……だめ、反応ない」「なあ黛、おまえの衝撃波でここぶち抜けない？」エイジは拳で絶壁を叩きながら言った。

「あ、そっか。あたしソート・エフェクト使えるんだった。——うん、やってみる」

エイジたちは、碎片を浴びないよう、ゴンドラの端にかたまる。黛は壁際に立ち、精神を統一するように目を閉じる。やがて全身に淡い光を帯び始めたかの女は、カッと目を見開き、腕を振り下ろした。ドゴオン……と、籠もるような地鳴りが響き、ゴンドラが大きく跳ねる。

黛のまえに大小の石が崩れ、その奥から青白いひかりが射した。

「おまえに綽名つけてやるよ」天草は砂礫の山を踏みながら、「……人間ダイナマイト」

「それっていつの時代の悪役レスラーよ……」

「すごい音しちゃったけど、大丈夫かな」高島は首をすくめながら滑走路のほうを振り返る。「すぐそこに軍事施設みたいなのがあるし……」

「とにかく、入ろう」

エイジは穿たれた穴をくぐって、なかを見渡した。

ドーム型の高い天井や、白亜の壁面に、宗教的な意匠のモザイク画やステンド・グラスが雑然とちりばめられ、なんとなく厳肅な雰囲気があった。シャンデリアから散る冷たい色彩のひかりが、悪魔的な彫像の大きな影を、緩くカーブを描く階段の裾に投げかけていた。

真鍮だか鍍金だかで飾られた、オペラ・ハウスのような二階席の

辺りを、息をつめて眺めていると、一步先を歩いていた天草が、突然走り出した。

「どうした？」

「いたんだよ、黒いのが」

エイジは絨毯を蹴つてあとを追いつながら、柱の並ぶこうに、蜥蜴のようなかたちをした影の疾走しているのを見出した。先行する天草が「ウラア！」と怒鳴って紫電を放ったが、異形の背を捉えることはできなかった。影は大きな扉の隙間に消えた。

「クソ！」天草は扉を押しひらき、暗い廊下へ出ると、奥にむかつて眉間を険しくする。

「仕方ない……俺たちも早くここを離れよう」

「ああ、だな」天草は頷いて、エイジの後ろから駆けてくる女子たちに、「悪い、取り逃がしちまった。仲間をたくさん連れてくるかもしれない。ここに居つとやべえからばっくれンぞ。ヤツは左に行つたから、俺たちは右へ向かおう」

「わかった」と、黛が答えて、そのまま廊下へ折れる。

エイジは最後にアイラが出るのを見届けて、その後が続いたが、百メートルも駆けないうちに、仲間たちが立ち止まっているのに気づいた。闇に蔽われた回廊の先に、黒い影が犇めいている。不気味な紅い光点が、数えきれないほど散らばっていた。

「いきなりツイてねえな！ どうする伊勢崎」と、天草が振り返つた。

「こうなったら、しょうがねえ……」

拳をかため、進み出ようとすると、

「待って、考えがある——」高島がその腕を取った。「わたしがソート・エフェクトで絨毯のうえをガチガチに凍らせるから、伊勢崎くんはその上を軽く炙って。……意味、分かるよね？」

融けかけの氷ほどよく滑るものはない。それで敵の足止めをするということだろう。エイジは頷いた。

「じゃ、いくよ」

高島は手のひらを重ねてエレクトロ・ブラッドの蠢く闇にむける。突然かの女の髪がふわりと持ち上がり、足元から白い冷気が波紋を重ねて拡散してゆき、硬質の甲高いノイズが回廊に染み渡ったかと思つと、粉を吹いたような氷が床から壁までを厚く覆った。エイジはすぐに右手をのべ、赤々と輝く火炎を放射する。一巡すると、氷はなめらかな光沢を放った。そこへ押し寄せてきたエレクトロ・ブラッドたちは面白いように転げまわる。

高島は異形たちの無様に足掻くさまを悠然と見下ろすと、右手を腰にあて、左手の甲を口元に添え、高笑いを始めた。

「テンションがあがってしまうのは分かる」と、エイジは高島の手をひいて、「けれど今は逃げよう」

「あつ、うん、そうだね！」

扉のまえまで戻つてくると、指笛のような音がしきりに聞こえるようになった。立ち止まってよく耳を澄ますと、連絡を取り合うように飛び交うそのしたから、大勢のいつせいに地を踏む騒音が、そこまで迫ってきていると分かった。そのとき突然、廊下の奥が紫に輝いた。天草がやんぞオラと喚いている。

駆けつけると、黒い影が雲霞のごとく殺到していた。天草が雷神さながらに放電するたびエレクトロ・ブラッドが煙をあげて崩れ落ちるが、影はさらにそれを超えて踊りかかってくる。エイジは焰を乗せた拳を天草にせまる異形に次々と叩き込み、身体がついていく限りの援護をするが、敵の数が数だけに、少しずつ後退しない訳にはいかなかった。

「伊勢崎、キリねえぞこれ！」天草が叫ぶように言う。

「ああ……」

エイジはアッパーでエレクトロ・ブラッドの腹を粉碎し、ストリートで顔を潰し、合間に背後を見やった。黛は敵の勢いに飲まれてしまったのか、真っ青になって後ずさっている。

「おい、黛！」と、エイジは呼びかけた。「頼みがある」

かの女はいまにも泣き出しそうな顔をエイジにむけた。

「天井を崩してくれ。やつらを足止めする。そのあいだに広間へ逃げ込もう」

「……できない」

「おまえ、人間ダイナマイトだろうが！　つか、やってくれねえと困るんだけどよ！」天草が傍から叫ぶ。

「ちがうの……うまくイメージできない……」

「心が乱れているとソート・エフェクトの力が弱まってしまふのと、アイラが説明する。「私が代わりにやるから。そこ、どいて」

エイジはうなづき、焰を鞭のようにしならせて、エレクトロ・ブラッドの大群を牽制する。連中の怯んだ隙を見逃さずエイジと天草が後退すると、アイラは右手を斜めうえにむけた。そこからレーザーのような光が幾筋も入り、天井のあちこちを抉っていく。――黛が絶壁を崩したようにはいかなかったが、それでも砕かれた盤石がエレクトロ・ブラッドの頭上を驟雨のように襲い、前衛を混乱に陥れた。土煙で濛々とする奥から、すさまじいうめき声があがる。エイジたちはそれに背をむけて、一目散に駆けた。

反対側からは既に、氷の張った床を越えてエレクトロ・ブラッドたちが迫っていた。エイジは身体にはつきりと残りはじめた疲れを噛み殺しながら、ありったけの精神力をもって回廊へ無数の火柱を放った。エレクトロ・ブラッドたちは鱗を白く輝かせて、紅蓮のなかをのたうちまわるが、その焰を駆け抜けてくるものもあった。思わず舌打ちが毀れたけれど、しかし、仲間たちが広間へ逃げ込む時間だけは稼げた。エイジは最後に広間に駆け込み、扉を閉めて金具を溶接しようとしたが、間に合わなかった。扉の合わせ目から差し込まれた数多の腕が、蛸の足のようにうねっている。エイジがゾツとして飛退いた途端、扉は開かれ、悪魔の群れが雪崩れ込んだ。混戦になった。

すぐに、仲間たちがどこで戦っているのかよく分からなくなった。視界にあるのは跳梁し跋扈するエレクトロ・ブラッドたちの黒い影と、シャンデリアの蒼然とした光、それから自らの放つ焰とその残

像ばかりで、ようやく階段のむこうに紫電の輝きを見つけて、合流するつもりになったけれど、続々と扉から這入り込んでくるエレクトロ・ブラッドの大群がどうにもならない。

「天草ア！ 無事か！」喉を振り絞って怒鳴ってみるが、返ってくるのは悪魔の怒号と戦いの騒音ばかりだった。「みんな、何処にいる！？」

そのうち、広間のかなたに、壁際に追い込まれたアイラの姿が一瞬だけ見えた。エイジは焦りに胸を焼かれ、辺りの黒い影を一掃してやるつもりで、特大の焰を思い描こうとしたが、意に反してそこに生じたのは焚き火を少し大きくした程度のものに過ぎず、たった一体の敵を焼いてすぐに消失した。アイラの姿はもう見えない。エイジは絶叫した。……

転倒でもすればあつという間に潰され、殺されと思った。その恐怖が精神の根を押さえつけ、理性に深い亀裂を走らせる。最早秩序立って物事を考えるのが難しくなっていた。ソート・エフェクトは冴えず、？ケイ？からレクチャーされた反射術もほとんど機能しなかった。エレクトロ・ブラッドたちは時折エイジを遠巻きにして、無数の光芒を打ち込んでくるが、頑強な壁を思い描くことができず、軌道を逸らすのが精一杯で、ときには跳躍して躲さなければいけないこともあった。拳だけが頼りだが、灼熱の焰をメリケン・サックがわりにできなかつたから、戦況を好転させるほどの武器にはならず、血路を切り開いて仲間と合流することは望むべくもなかつた。

その、仲間への危惧も、そもその大友のもとへ辿りつきたい熱望も、暴風雨のような戦闘に没入するうち、その遠心力によつて色褪せていき、ただこの黒い雲霞に埋もれて死んでいくのだなという無感動の実感だけが胸を支配するようになった頃、硬質のものの碎ける、小気味いい音がエイジの鼓膜を掠めた。そうして、怒涛のごとく寄せてくる黒い影のずっとむこうに、ステンド・グラスの破片の飛び散つて煌めくなかを落下するシャンデリアを見た。そのシャンデリアには、自動小銃を担いだ、シングル・ライダースにジーンズの人物が、確かに乗っていた。顔はよく見えなかつたけれど、エイジはその人物が大友であることを疑わなかつた。

墜落するなり、広間がまったくの闇に蔽われた。エレクトロ・ブラッドのあいだにどよめきが起こる傍から、肉を裂く音、水気のものが床に散る音、断末魔が相次いであがつた。かと思うと、「エイジ、こつちだ」という大友の声を耳元に聞いた。そうして腕をとられ、引かれるまま闇のなかを走っていき、なにかの物影にしゃがんだとき、そこにうつすらと黛たちの姿を見出した。

エイジは人数を確かめて、涙が出そうになるほどホツとした。

「みんな、無事だったか……」

「ああ、なんとか生きてる」と、天草が疲労の滲む声で答える。「無傷って訳にはいかねえけどな。腕をやっちまった。いま、アイラに癒してもらったところだ。それにしても、黛とうまく合流できなかったら今頃どうなってたかって話だよ。高島なんか、あと一歩遅れてたら殺されていたかもしれない……」

その高島は、階段の隅にうずくまって膝を抱え、齒をガチガチと打ち鳴らしていた。

大友が近づいていって、「怖かっただろ。でも、もう、大丈夫だから……」と、高島の背中を撫でる。うなづく高島の頬を涙がつつた。

「でも、どうする？」と、黛はこわばった顔を手摺のむこうに向けて、「ゴンドラは壊れちゃったし、ここに隠れていても見つかるのは時間の問題だよ。突破なんかできる訳ないしさ……」

大友は前髪のなかに指を突っ込み、考えを巡らせるような表情をしている。その頬には生傷が出来、ライダーズもジーンズも随所が破れ、血を滲ませていた。

「おいで。大友くんも癒してあげるから」と、アイラが呼びかけると、大友は驚いたように振り返って、

「……俺のこと覚えてンのか？」

「ほとんどのことは忘れちゃったけれど、大友くんが私たちのリーダーだったことはちゃんと覚えてるよ」と、アイラは微笑む。

「そつか。じゃあ、頼んでもいいか」

「なあ、大友。児玉先生が、この街には時間を巻き戻された形跡があるとか言ってた。おまえ、なにか知ってるんだよね？」

エイジが尋ねると、大友は、アイラの放つ小さなオーロラのようなひかりを傷口に浴びながら、すこし苦しそうな顔をした。

「……みんなを絶対に巻き込みたくなかった。でも、全員ドッペルゲンガーをうまく制御したみたいだし、街もこんな状態になっちまったし、いまさら隠したってしょうがねえから、話すよ。——ただ、

あいつらを片付けた後でな」

「いま、片付けるって、仰いました？」と、天草が半分裏返ったような声をあげた。「大友サン、いくらなんでもそりゃ無茶っスよ！ 黨にそのへんの壁でもぶち抜いてもらって、そこからばっくれましょうって！」

「逃げれば敵は俺たちがビビってると思ってた勢いづくぞ。それに、こんな不案内の場所で逃げ回っても、どうせ袋小路に追い込まれてまたやりあう羽目になるんだから、いつそこでやっちまったほうがいい」

「考えでもあるのか？」エイジは目を細めた。

大友は頷いて、「まず、階段の上りぐちを俺とエイジでしっかり押さえる。黨と天草は二階へあがったエレクトロ・ブラッドを一掃して、そこから階下に密集している連中にむかってソート・エフェクトをガンガンぶち込んでくれ。アイラは黨たちのサポートを頼む。二人が疲れたら回復してやって。それから、これ、エクリプス機関の施設で拾ってきたやつなんだけど――」自動小銃を高島に差し出し、「ユーはここでしばらく待機。天草たちが二階を占拠したらそつと上がって行って、手摺の陰からそれでもって敵の隊長っぽいのを狙撃してくれ。扉のちかくに、なんか偉そうに指示を飛ばしているやつがいるから。そいつをやっちまえば、敵は組織だった動きが取れなくなる」

「でも……わたし銃なんか撃ったことない。まして狙撃なんて……」
「大丈夫、ユーは出来る子だ。これはマサイ族もびつくりの視力をもってる高島のほかにやれない役割なんだよ。……この切換レバーを見て。アが安全装置、タが単射。ここにあってトリガーを引けば弾が出る。ちゃんと照準器もついてるし」

「やってみるけど……外しちゃったら？」

高島は上目遣いで尋ねる。大友は微笑して、

「そのときは天草たちに加わってくれ。大丈夫、失敗しても、五分で片付く料理が十分に伸びるだけの話だから、気楽にやって。俺た

ちの勝ちは確定してるんだからよ」

エイジは傍で聞いていて、高島をリラックスさせるための方便だろうと思ったが、確かに効果はあった。高島の表情からみるみる硬さが抜けていく。——そのすぐうえを、眩い光束が滑っていった。階段の手摺の影からそつと覗くと、エレクトロ・ブラッドたちが照明灯のような装置を持ち込んで、辺りを照射している。

「……じゃ、始めようか」

大友の呼びかけに、全員が頷いた。

戦闘の口火は、階段をかけあがっていった天草たちが切った。二階席に紫電が閃き、感電したエレクトロ・ブラッドが手摺から落下する。そこにサーチライトが集まると、階段の麓は闇に沈む。大友が身体を屈めてその闇に紛れていくなり、シャワーで水を撒くようなような物音が広範から聞こえてきた。続いて、そこかしこから悲痛的な絶叫があがり、のたうちまわる気配が広がると、二階を照らしていたサーチライトがこんどは階段の裾に向けられる。大友はその光を避けて柱の影に潜む。そうして眩い照明を全身に浴びたエイジのもとに、エレクトロ・ブラッドがいつせいにソート・エフェクトのレーザー攻撃を集中させる。それをエイジは、大友とかねて打ち合わせていたとおり、頑丈な鉄壁を思い描くことで悉く反射する。一方で、探照灯を逃れた二階では、早くも一帯を制圧した天草たちが、凄まじい稲光と衝撃波を階下に打ち落とし始めた。密集したエレクトロ・ブラッドたちは鎌で刈り取られる雑草のように薙ぎ倒されていく。ビームのひかりが二階へ戻っていくと、大友はふたたび闇のなかに踊り出ていつてつむじ風さながらにエレクトロ・ブラッドを無差別に襲撃する。——ライトが二階部分と階段の裾を分けて照らすようになるまで、エイジたちは巧みな連携をもって敵の大群を痛撃しつづけた。エレクトロ・ブラッドたちは広間から闇を払底すれば劣勢に陥った戦局を挽回できると考えたのか、青白く輝く球体を三脚のようなものに載せて、次々と持ち込みだした。そうしてエイジは、大友が言った通り、扉のそばに指示を下すような仕草をする一際雄大なエレクトロ・ブラッドを見出した。——高島は敵の頭目が闇から浮かび上がったこの機を見逃さなかった。堂々たる巨軀の異形は突然、長い角の付け根辺りから体液を飛び散らせて卒倒それからサーチライトの動きも、エイジにむかってソート・エフェクトの攻撃を集める敵の動きも、明らかに統制を欠くようになった。

ほとんど一方的な展開になり、敵の増援も途切れがちになると、大友は二階席にむかつて声を張り上げた。「そろそろいいと思う。そこから飛び降りて、ドア付近を押さえてくれないか」

「いいけど、なんでー？」と、黛が反問する。

「仕上げだよ。連中を一人残らず、ゴンドラに続く穴にむかつて追いつく」それから大友はエイジを振り返って、「俺たちも押すぞ」

「ああ……」

エイジたちのまえに散々屍を重ねたエレクトロ・ブラッドたちは、ほとんど戦意を喪失し、恐慌に陥っていた。ソート・エフェクトで軽く威嚇しただけで、牧羊犬に追い立てられる羊のようになって、黛が抉った穴のほうへと殺到していく。そうしてパンデモニウムの絶壁を次々と転落していった。

最後のエレクトロ・ブラッドが、絶叫しながら月の映える夜空にむかつてダイブしてしまうと、辺りは嘘のように静まり返った。ただ、風の音だけが染みわたっている。

「ほんとうに五分で片付いちゃったね……」と、高島が腕時計を見つめながら言う。

エイジは屍骸の散乱する広間をざっと見渡し、それから大友の肩に手を置いて、

「俺、おまえに一生ついていくよ……」と率直なところを打ち明けた。

「大友に綽名をつけてやる」と、天草は言った。「……虹ヶ丘の諸葛亮」

大友は壁に背をあててしゃがみこみ、しばらく靴の先を見つめていたが、ふと「……なあ、みんなどうしてここに来たんだ」

「あんた、それ聞く？」と、黛は呆れたように言った。

天草は上空に視線を投げ出したまま、「照れくさいから言わねーけど、分かるだろ」

「心配してくれたのか。……でも、俺にはみんなに心配される資格なんかないんだよ」

「どうしてそんな風に思うの？」高島は大友の傍に膝を折った。
「……みんなを戦いに巻き込んで、散々な目に遭わせちまった」大友は滔々と語りはじめた。「俺は甘過ぎたんだ。……その時間のなかでは、みんなはドッペルゲンガーをクスリでもって制御していた。初めのうちは良かった。けれど、少しずつ精神におりが溜まっていって、性格が暴力的になったり、憂鬱にうなされたりするようになった。だから俺たちは加納先生のところへ通って、セラピーを受けた。ながら騙し騙し戦っていたんだ。けれども、例えばエイジは日を追うごとに凶暴になっていって、交渉の停滞していたエレクトロ・ブラッドの天使崇拝者のコミュニティを脅迫でもって味方につけようと幹部の姪だったアイラを拉致してきてしまったり、高島が憂鬱を募らせて自殺未遂をやったり、神崎は人間嫌いが高じてエレクトロ・ブラッドのもとに走ってしまったり、天草はクスリの依存症になってほとんど廃人のようになってしまったりで、春が終わる頃には、戦いそのものよりもみんなの精神状態がどうしようもなくなってしまった。」

それも、俺たちだけの問題じゃなかった。街に次々と誕生したソート・エフェクト使いの殆どが、クスリに依存していたんだ。精神を壊したソート・エフェクト使いは、エレクトロ・ブラッドだけでなく、人間にも牙を剥くようになった。街は説明するのも厭になるくらい荒廃した。それで俺は、エレクトロ・ブラッドたちと休戦するより他にないと考えるようになった。……けれど、これが大失敗だったんだ。児玉先生やみんなは賛成してくれたけれど、多くの人間は、俺たちを誤解して、エレクトロ・ブラッドのまわしもののように扱った。人間を不倶戴天の敵と考えるエレクトロ・ブラッドの大半からも、激しい憎悪を向けられた。そうして俺たちのよき理解者だった児玉先生が休戦に反対する過激派のテロにやられてからは、エクリプス機関から見捨てられてしまった。俺たちは四面楚歌に陥ってしまったんだ。

絶望的な戦いが始まった。一人斃れ、二人殺され、エイジが死ん

だことに絶望したアイラは悪魔崇拜に堕ちて離脱していき、黨がこの腕のなかで息絶え、とうとう残っているのは俺一人になった。それから毎晩のように後悔に苛まれた俺は、幾年もまえに制御したはずのドツペルゲンガーをまた見るようになった。けれども、クスリを使う気も、試練に挑むつもりもなかった。こいつに精神を支配されて死ぬなら、それも悪くないと思っていたんだ。そんなときに、グレゴリウスの誘いを受けた。グレゴリウスっていうのは、白竜団の管長で、パンデモニウムの教区長を務めている。そいつが俺にこう言ったんだ。――死んだものを蘇らせることはできないが、我々に伝わる秘法を用いれば、仲間が生きていた頃まで時間を巻き戻すことはできる。ただしそれには膨大な精神的エネルギーが必要だ。おまえの抱えているドツペルゲンガーを、その原動力に宛てなければいけない。ちょうど、そのドツペルゲンガーはおまえの後悔から生まれたもので、時間を巻き戻すためのモチベーションを本来的に持っている。それを私に引き渡してくれるなら、仲間たちが生きていた頃まで、時間の針を遡らせよう。……

グレゴリウスは、人間世界を侵略するだけではなく、エレクトロ・ブラッドの政府のなかにおいても勢力を拡大することを目論んでいた。そのためには、強い力がある。俺のドツペルゲンガーを使い魔のようにして、権力闘争の切り札にしたかったんだ。俺は、騙されているかもしれないと思った。なにより、グレゴリウスは俺たちが激しく敵対してきた白竜団の首領だった。けれども、エイジたちが生き返るかもしれないのなら、誘いに乗ってみる価値はあると思った。俺はグレゴリウスの執り行う儀式に手を貸した。そうして時間が巻き戻されたんだ。

ただ、これはあくまで目下の利害が一致したことによる便宜上の取引に過ぎない。俺はケジメとして、時間が巻き戻ったあとの八尋市に、強大な力を獲得したグレゴリウスを残していく訳には、絶対にいかなかった。さっきのホワイト・ブラストとこの空爆騒ぎは、時間が巻き戻される前にも起こったけれど、あれは確か、二月の上

旬だった。こんなに早く起こったのは、グレゴリウスがエレクトロ・ブラッドの政府のなかで勢力を増したせいだと思う。そのグレゴリウスに力を与えてしまったのが俺だ。……みんな、どうして俺がここににいるのか、もうわかっただろ。

これまで学校をサボって八尋市に暗躍するエレクトロ・ブラッドたちと戦い、パンデモニウムに侵入する方法を捜しながら、俺がなにより恐れたのは、エイジたちに再びおなじ道を辿らせてしまうこと——つまり、クスリを使ってドツペルゲンガーを制御しながらの戦いに巻き込んでしまうことだった。だから、みんなには俺がしていることを絶対に言いたくなかった。謝りたくても、謝れなかった。あの日、学校の廊下でエイジと黨に問い詰められたときは、どうしようもなく辛かったよ。……ごめん」

エイジは兎玉に楯突いてでもここに来て正解だったと思った。そうして大友の正面に屈んで、微笑した。

「謝らないでくれ。実際、みんなこうして生きているんだしさ。ていうか、大友がみんなを生き返らせてくれたんじゃないか。さっきのピンチだって、大友のお陰でなんとか乗り切れたんだ。こっちこそ感謝しなきゃいけない。もし、俺たちが未来で失敗をしたなら、次は別のやりかたをすればいい。幸い、みんなクスリには頼ってないしさ。大丈夫、きつとうまくいく。その……グレゴリウスってヤツとやりあうんだよな？ 付き合わせろよ」

大友は苦しげに顔をゆがめて、すこし俯いた。「……俺はどうしても、グレゴリウスを始末しなきゃいけない。ドツペルゲンガーを制御したみんなが力を貸してくれるのなら、正直助かる」

「決まりだな。全員でボコってやろうぜ、そいつをよ」と、天草は声を弾ませた。「しかし、さっき、大友がびつくりするようなことを言ってたぞ。伊勢崎がアイラを拉致してきたって？ で、アイラは伊勢崎に惚れちゃったんだろ？ ねえ、どんだけマゾなの？ それなんつーエロゲ？」

黨は洒落にならないという顔をして、

「ほんとうは、交渉とか脅迫とか関係なくて、可愛いから攫ってき
たんでしょ。伊勢崎って、最低！」

「エイジは最低じゃないよ。ちよっと強引だったけれど、暴力とか
はふるわなかったよ」

アイラは一生懸命否定している。

「でも、エッチなことはされたんじゃない？」

高島がからかうように言うと、アイラは耳まで真っ赤になって黙
り込んだ。

「えっ……されたの？」

エイジは心底ソツとして、「俺、最低だな……自己嫌悪だ……ほ
んど、ごめん……」

ちがう、ちがうから、とアイラは叫んだ。「おまえ可愛いなって
言ってくれて、ときどき髪を撫でてくれて、それからキスをされた
だけ。ほんとだよ！」

「それって頬に？ それともくちびるに？ ……まさか舌とか入れ
られた？」

黨の質問に、アイラは口元をまごつかせた。

「ほら、やっぱり最低じゃん」

「いや、なんつうか、その、」と、大友は言葉を選ぶようにして、
「最終的にはラブラブだったよ。少なくとも、犯罪的な雰囲気は、
そんなには、なかったし」

「巻き戻された時間のなかでのエイジは、もっとワイルドな感じだ
った。こんなに優しそうじゃなかった」と、アイラはエイジを見上
げて微笑んだ。「それに、みんなも。天草くんは言葉がきつかった
し、ツバサはずっと悲しそうだったし、みちるはしょっちゅう怒っ
てた。——はつきり言うと、ギスギスしてた。大友くんはいつもみ
んなをまとめるのに腐心してたよ」

「それって、ドッペルゲンガーをうまく制御できなかったからか？」
と、天草が腕組みをする。

「今は、みんないちおう制御しているけれど……巻き戻された時間

のなかではきつと苦勞してたんだろうね」と黛が言う。

大友は頷いて、

「本来、ドッペルゲンガーの試練をパスするのはとても厳しいことなんだ。それが、みんな難なくクリアできたのは、時間が巻き戻って記憶を失くしてしまっただけで、戦った経験だけはしっかり残ったことによるのかもしれない。ソート・エフェクトを使うことで精神が鍛えられて、それが試練へのアドバンテージになったんじゃないか。倉庫で神崎とやりあったとき、そんな風のことを考えたよ。あいつはソート・エフェクト使いになりたての頃よりずっと大きな力を揮っていたから」

「アイラにだけ記憶があるのは、どうしてだろうな」エイジは頼に手をあてる。

「時間を巻き戻す儀式が執り行われた瞬間まで生存していた人間やエレクトロ・ブラッドには、断片的な記憶が残るみたいだ。ただ、多くはその記憶をなにかの錯覚や夢だと考えているみたいけど。アイラとは、エイジが死んでから別々になってしまったけれど、きつとどこかで生き残っていたんだろう」

「ねえ、大友くん——」高島は傾いたゴンドラのワイヤーを握って、したを見下ろしながら、「その、グレゴリウスさんをやつつけたら、この街の混乱は終わるのかな」

「いや、残念だけど終わらない」大友はそれが判りきったことであるかのように、穏やかに答えた。「第一に、白竜団はエレクトロ・ブラッドたちの組織のひとつに過ぎない。ほかにも人間を根絶させたいと願っているグループはたくさんある。それに、テロで政治的な問題が解決したためしかないように、敵のボスを倒してめでたしめでたしとはいかない。たぶん、混乱は半永久的に続く。だから俺は停戦と和解しかないと思ったんだ。けれど、動きだすタイミングを完全に間違えてしまった。答えはそれしかないというのに、だれ一人それを望んでいなかった。——これから人類は、エレクトロ・ブラッドを、家族や仲間の仇として、経済に打撃を与えるものとし

て、人間の地球上における特権的地位を揺るがすものとして、そして国家の安全保障を脅かすものとして、憎悪する。人間の大多数がエレクトロ・ブラッドへの敵愾心を滾らせているうちは、それが誰をも幸せにしない無意味なことだと分かっている。戦い続けるしかない。人類が怒りや憎しみに飽きるまで、待つしかないんだ……。

神崎は、「と、かれは続ける、「そんな構造を見抜いていた。個人には利己主義を超えたところに根ざした理性があっても、組織や群集にはないということをよく知っていた。あいつは極端で頑なで、許すということを知らないバカヤローだけど、俺なんかより、よほどこの世界のことを理解していた。……今になって、あいつの気持が分かるんだ。俺はグレゴリウスの誘惑を受けたとき、正直言って人間を憎んでいた。すべてをぶち壊したくなるくらい、厭になっていた。けれど、時間が巻き戻って、学校で元気になっているみんなの顔を見て、やっぱり人間の側に立ちたいと思ったよ。だから——、神崎とはもういつかい、ゆっくり話し合いたかった、たとえ物別れに終わるとしても」

「俺は神崎が嫌いだよ」と、天草は脇をむいて言った。「大友にむかって花瓶を投げ落とすようなヤツなんか大嫌いだ」

大友は穏やかに笑って、ゆっくり立ち上がった。

「戦いにむかうまえに、ひとつだけ、みんなに聞いてほしいことがあるんだ。……グレゴリウスは狡猾なヤツだ。様々の言を弄して俺たちを混乱させようとするだろう。だが、あいつの言うことは全部嘘だ」このとき、かれの双眸に、殺気に似た凄みが宿った。「……覚えておいてくれ」

エイジは、大友がその種の眼光を発するところをいまだかつて見たことがなかった。それで、刹那のうちに尋常の範疇を超えて膨張する不安の影に脚が竦んだ。——縹渺たる疑念の靄のかたに、なにかが霞んでいる。懸命に心眼を凝らしているうち、親友の詞が朗らかにエイジの鼓膜を揺すった。

「さ、行こうぜ」

肩に手を乗せる大友の、普段とすこしも変わらない透き通るような微笑が、エイジのうちに澱んだ靄をみるみる吹き晴らしていく。そうしてあとには観念のかけらひとつ見出せなかった。却って、そのことが心臓を氷付けにされるような寒気を残したけれども、エイジは親友に、

「ああ……行こう」

と答えるほかに、術を持たなかった。

エイジたちはときおり爆風の余波が吹き抜けて石柱の揺れる回廊を急ぎ、断続的な戦闘のあと、オリオン座の冷たく輝く夜空のしたに出た。緩やかな段々の斜面を、石造の建築物が八重に埋めている。その随所から、小機関銃に特有のヴアララ……という音や、グレネード・ランチャーのヒュウと風を切って炸裂する音があがり、マグネシウムを焚いたような閃光が頻りにちらついた。見上げれば、銀河を背景にして、ずんぐりした飛行体から、大きなトリュフのようなものがわらわらと舞い落ちてくる。よく眼を凝らすと、垂れさがった紐を人影が束ねていた。エイジは仲間と一緒に頭をひくくして路地を駆けているとき、遠くに、—— Anybody home ? —— Get down ! などと絶叫する声を聞いた。「ここハリウッドじゃねえよな……」天草は声のするほうを振り返って言った。「昼間だったら、プライベート・ライオンのノルマンディー上陸作戦みたいなのが見れたのかね」

誰もそれに答えなかった。

エイジたちは、断崖を刳り貫くようにしてL字型に建つ建築物へ入り、硝子と鉄でできたスケルトンのエレベーターに乗って、戦火に輝く市街をしばらく見下ろした。やがて籠が止まり、おどろおどろしい彫像の並び立つあいだを五〇メートルほど歩いたのち、数段高くなったところに、足を組んで椅子に座る老人のすがたを見出した。

黒く質素な長衣をまとったその老人は、肘掛にゆったりともたれかかり、瞑目している。けれども、眠っているのではないということとは、眉間から額にかけて刻まれた皺の具合から見て取れた。白髭を蓄えた彫りの深い顔には、東欧の高僧を思わせる威厳がある。——その頭上に、異様なものがあつた。真鍮の十字架に磔にされた、瘦躯のうつくしい青年である。かれは手と足の甲を杭でうちつけら

れ、頭に茨の冠を頂き、胸は鎖で以って襷に縛られていた。端麗な顔は額から流れおちる血で汚れ、苦悶に歪んでいる。

青年は大友と瓜二つだった。

「最終的に、この騒動でどれだけの人間が死ぬことになるのか——」
老人がしわがれた声をあげた。「おまえたちにとつて幸か不幸か、
電脳世界からやってきたこの邪教の聖職者といえども、それを一々
数えて悦に入るほど悪趣味ではない。しかしながら、万単位に達す
ことは論を俟たんだろう。なにしろ第七艦隊だけでも三万の兵員
を擁しているが、愚僧はこやつらにふたたびアメリカの土を踏ませ
てやるつもりなどないからな……」

「おいおいグレッグ」と、天草はグレゴリウスの一般的な通称で呼
びかけ、「まずはちゃんと名乗るところから話を起こしたらどうだ
？ 坊さんのくせに礼儀作法も知らないのか？」

老人は楽しげに笑い声をたてた。

「失敬、いかにも愚僧はグレゴリウスである。いち宗派を代表する
ものとしておまえたちを迎えるに相応しい礼を取る手間を惜しむ訳
ではないが、しかし、虚飾も、白々しいことも、この際、互いによ
そうではないか。おまえたちがなにをするつもりで此処へ来たのか
について、愚僧なりに察するところがあるし、それを身をもって受
け止める用意があるから、こうして居るのだ。——さて、おまえた
ちがリーダーと仰ぐこの男のことだが」かれは大儀そうに瞼をあげ、
十字架にかけられた青年を仰いだ。「儀式に臨んで、大友が愚僧に
繰り返し念を押したのは、殺されていった数十万の人間のことで
なかった。おまえたち四人が間違いなく生き返るのかということだ
った。かれは紛れもなく、おまえたちを愛していた。それを……ま
ったく、人間とは呆れたものだ。わが身惜しさに、殺しに来るとは
な……」

「あんた、ボケてるんじゃないの？」と、黛が訝しげに老人を見上
げる。「あたしたちは大友を助けるため、支えるためにここに来た
の。だいたい、あたしたちに大友を殺さなきゃいけないどんな理由

があるっていうわけ？」

「さつき、話してたよね。このお坊さんの喋ることは、嘘八百だつて……」高島が声音を低くして大友をふりかえった。

グレゴリウスは思慮を巡らせるような目つきで大友を見つめていたが、「……なるほど、そういうことか。考えたな」そうして鋭く頭上の十字架を睨みつけ、「貴様、愚僧をうまく嵌めたつもりでいるのかもしれないが、愚僧は依然として人間界屈指と謳われた貴様のソート・エフェクトのちからを自在にできるのだぞ。そのことを忘れてもらってはこまる……」

「おい、大友——」エイジは胸を蝕むような疑念に耐えきれず、怒鳴った。「この爺さんはいったいなんの話をしている？　ほんとうに出鱈目ってことで間違いないのか？」

その問いに答えたのは、十字架のうえの青年だった。

「そうだ……エイジ……こいつの……言っていることは……全部デタラメだ……」

エイジは老人を見据えたままにいる大友の肩を掴み、

「十字架の男はおまえの後悔から生じたドッペルゲンガーなんだろう？　どうしておまえが答えずに、ドッペルゲンガーが答えるんだ？　なあ、俺はおまえを信じていいのか？　おまえは決して俺を悲しませないと誓ってくれるか？」

「伊勢崎、しっかりしろって」天草が腕を振って訴える。「要するにグレゴリウスは、俺たちを動揺させたいんだよ。大友に念を押されたの、もう忘れたのか。だいたい、大友とあのジジイと、どっちの話が信用できるか、落ち着いてよく考えてみる」

グレゴリウスは皺だらけの指でこめかみをおさえ、不気味な笑い声を立てて、「……まったく。愚僧がこの十字架の男こそ生身の大友で、そこにいるのは自我の片割れに過ぎぬと言っても、信じまい？　愚僧と戦えば、大友とて只では済まぬよ。その真実を諄々とおまえたちに説いて聞かせれば、おまえたちは引き下からざるを得んとたかをくくっていたが、先手を打たれてしまったのなら仕方な

い。お相手しよう。……だが、ひとの子よ、言っておく。真実はふたつとないぞ」

十字架の男が昂然として叫んだ。「騙されるな。俺こそがドッペルゲンガーだ。大友を苦しめる後悔そのものだ。いいかエイジ、手加減するな」

黙れ、と一喝するグレゴリオスの身体が、みるみる黒い靄のようなものに蔽われた。

黒い長衣の裾がはためいている。グレゴリオスは節くれ立った指を銀髪にさしこみ、悶えるように身体を折り曲げた。その頭上で、十字架に磔にされた青年は、全身を震わせ、白目を剥いていた。かれは足元から光る砂のようになって崩れていく。そうして舞い落ちるきらきらした粒子は緩く渦を巻いて黒い靄のなかへと吸い込まれる。——青年の姿が消滅したとき、靄のなかから凄まじい咆哮があがった。雄羊を連想させる長大な二本の角がある。それに挟まれて、赤い眼光を放つ悪魔然とした面貌が現れた。かれの筋骨隆々たる巨軀は、鱗や幾何学的な模様で覆われている。

エイジは全身が栗立つのを感じた。それはグレゴリオスの遂げた異様な変化のためだけではなかった。空気が、濃密なソート・エフエクトのちからを孕んでいる。風もなければ、足元が坂になっていく訳でもないのに、得体の知れない圧迫を受けている感じが歴然としてあった。

「——先手必勝オオ！」そのとき怒号をあげたのは天草だった。紫電の柱を幾重にも繰り出し、自らもそれを追って疾走する。グレゴリオスが顔を蔽うようにして巖さながらの腕を交差させると、紫電は次々にその上を捉えて白煙をあげた。エイジは、腕のしたで、悪魔の貌がほとんど歪んでいないのを見、舌打ちをして天草に続き、コンマ数秒という短い時間のあいだに許される最大のソート・エフエクトを右腕にかき集めた。——案じた通り、肉弾戦を強いようとした天草が豪腕に弾き飛ばされると、エイジは追撃に移ろうとするグレゴリオスの足元めがけて灼熱の焰を炸裂させた。虚をつかれる

かたちになったグレゴリウスは上体を反らし、二三步、よろける。

「さすがにクスリでもってソート・エフェクトを捻り出している者どもとは違う、か……」と、グレゴリウスは唸るように言った。「この力は憎悪や怒り、悲しみから生まれるもの。それをここまで操ってみせるおまえたちには、それ相応の苦悩と、捌いて立つところがあるということなのだろう。……よからう。愚僧も白竜団の管長を務める身である。かくなるうえは修羅となり、この魂魄を塵灰にかえてでもおまえたちを叩き潰してくれよう」

悪魔は鋭い爪を生やした手を高く掲げる。その巨軀がなにかに取り憑かれたように激しく痙攣しはじめると、エイジたちを威圧するように拡散していたソート・エフェクトの気配は、一転、その手にむかつてゆっくりと収縮していく。焦点に生じた、まばゆい光の球体は、その直径をみるうちに大きくしていった。

エイジは直感的に、グレゴリウスがいまやるうとしていることを最後までやらせてはいけないと思ったけれども、一方では、悪魔が掌のうえに凝縮しているソート・エフェクトから、言葉にできない親しみのようなものを感じて、戸惑っていた。この峻烈きわまる力は、無数の光る砂粒になって悪魔に吸い込まれていった十字架の友から引き出されているに違いなかった。グレゴリウスに打撃を与えることが、十字架のかれにどんな悪影響を及ぼすのか、計り知れない——エイジが無為にグレゴリウスの異様な動きを見つめるうちには、その憂慮があった。

グレゴリウスが、恐竜の声帯から発せられたとは思えない、異様な咆哮をあげた。そうして、いまや見つめていられないほど凄烈に輝く球体を、足元に振り下ろす。そこから猛然たる衝撃波が生じ、床を割り、彫像や階段を粉碎しながら放射状に拡がって、エイジたちに押し寄せる。

圧倒的な光量にすべて漂白され、ただ破壊の轟音が渦巻く空間のなかで、エイジは可能なかぎり精神を研ぎ澄ませ、鉄壁を克明にイメージする。——が、悪魔の放った衝撃波は、氷を砕くピックのよ

うにその防壁を容赦なく決る。そのさまがありありと視野に浮かんだとき、エイジはすでに暴威に飲み込まれつつあった。――銀一色の視界に、仲間のものと思われる淡い影が浮かんでいる。耳を聳するノイズのむこうで痛々しく叫んでいるのは天草だろうか。無駄と知りながら手を伸ばしたとき、エイジは背中から激しく壁に叩きつけられた。全身を引き裂かれるような痛みに悶えながら、激しく咽込むと、床に真つ赤なものが散った。

唇をぬぐいながら身を起こしたとき、光のなかに悄然として立つ悪魔の影が見えた。肩で息をし、全身から体液のようなものを滴り落としている。グレゴリウスにとっても、この凄まじい攻撃を発動するのは決して楽なものではなかったらしい。――仲間たちはフロアに四散して苦しげに蹲っていた。大友が立ち上がるうとして碎けた彫像の台座にかけた手は、血に塗れている。アイラは瓦礫のなかを這って、死んだようにぐったりしている天草に七色のオーラを注ぐ。ゆっくりと開かれた天草の目は、恐怖と痛みで飲まれて力を失っているように見えた。――振り返れば、黛と高島がよるけながら立ち上がるうとしている。後方にいたかの女たちは、その分被害が少なかったけれども、ブラウスやニーハイは血で湿り、顔はこわばってがくがくと震えていた。

「また……やられたら、わたしたち、死んじゃうよ……」高島がほとんど涙声で訴える。

「みんな、聞いてくれ」大友は台座にもたれながら、掠れた声で言った。「グレゴリウスに精神を集中する暇を与えたら駄目だ。次、あいつが光を掌に集め始めたら、ありったけのソート・エフェクトを叩き込んで、一気に沈めにかかるぞ」

「よっしゃ、それでいこう」天草はアイラに抱き起こされながら言った。

「なあ……大友」と、エイジは呼びかけた。「……正直言って、俺はおまえが嘘をついていると思っっている……だから、あの化け物とは戦いたくない……どうなっちまうかわからないから……けれど、

俺は、おまえを信頼してもいるんだ、絶対に……だから……仕方ない、騙されてやる……それがおまえの望みなんだったら……たとえ後悔することになっても、その苦しみを背負ってやる……それでいいんだよな？」

「エイジ……」

光はまだフロアに濃厚に漂っていた。だから、エイジには大友の表情がよく分からなかったけれども、声には、已むに已まれぬなにかを押さえつけているような色があつた。エイジは目下それ以上の返事を必要としなかった。

身体を起こし、高島と黛をふりかえって、

「なあ、手を貸してくれよ。あれを沈めるため、どうしたってふたりの火力が欲しい。——そりゃあ、下手したら、俺たちはそろってあの世行きだ。——要するに、一緒に死ぬ覚悟をして欲しいんだよ。頼む、このとおり」

「この場面で心中を頼み込むって、伊勢崎、おまえとだけ野暮なんだよ——」天草はからからと笑った。「おい高島、それから黛、しつかりしろって。俺たちが、自分のことを愚僧なんて言っちゃってるくされ坊主ごときに負けるわけねえだろ。マスク戦隊ごっこ、まだ続けるんだろ？……どうしても怖いなら、いいよ、早く逃げる。大丈夫、俺たちは恨んだりなんかしねえよ。なあ、伊勢崎？」エイジはいまにも泣き出しそうな黛たちに、微笑して頷いてみせた。

「私は、逃げたら恨むからね」と、アイラはきっぱりと言った。「私、絶対に、エイジたちと一緒に生きて帰るんだもん。……だからお願い、ふたりとも、勇気を出して。大丈夫、私たち、きっと勝てるから！」

「あんたたち……」

黛が声を震わせたとき、エイジはふたたび背筋の粟立つようなソート・エフェクトの奔流を感じてグレゴリウスを振り返った。異形のたかく掲げた手には、すでに微光が兆している。それに逸早く反

応したのはアイラだった。右手を拳銃のように構え、幾重にも光の帯を奔らせるが、グレゴリウスは次々と打撃を受けてなお平然と胸を反らせている。躍起になって攻撃を続けるアイラの傍から、大友が床を蹴って突っ込んでいき、手刀を居合のように振りあげた。そこから竜巻のような気流が生じて、高々とうねり、悪魔の厚い胸板を襲った。漆黒の鱗はずたずたに引き裂かれ、体液がシャワーのように飛び散った。グレゴリウスは苦しげに咆哮したが、掌のうへの光はかえって眩さを増し、今やはっきりと球をかたち作っていた。

「——この野郎！」天草が怒号を発して大友に続く。グレゴリウスにむかって高く跳躍したかれは、そこから落雷と見紛う凄まじい紫電を叩きつける。グレゴリウスは黒煙をあげ、ぐらぐらとよろけるが、踏みとどまって、かき集めた力の大きさを持て余すように全身を痙攣させはじめる。エイジはそのとき既に、グレゴリウスに肉薄しつつあった。助走に加え、すべての体重を乗せるつもりで拳に溜めをつくり、そこにありったけのソート・エフェクトを呼び起こす。イメージの焦点があったとき、白く融解した鉄を躍らせたような高密度の焰が生じた。渾身の右ストレートを異形の顔面に炸裂させると、猛烈な爆発が起こり、火焰は天井を焦がさんばかりに吹き上がる。エイジが駆け抜け、ふりかえったとき、グレゴリウスの半身は赤々と燃え上がり、床にはケロイド状に爛れた肉片が広範に散っていた。——が、悪魔は依然として立っている。

光の珠はいよいよ膨張し、それが臨界点に達しようとしたとき、エイジは黒髪を振り乱して飛び込んでくる高島の姿を見た。その顔からは眼鏡が失われ、かわりに凜とした目は闘志を滾らせていた。グレゴリウスが絶叫、凄烈な輝きを載せた腕がしたを向く。けれども、フロアに打ち下ろされることはなかった。冷気の濃霧が濛々と立ち込める、その奥にエイジが目を凝らすと、悪魔の逞しい腕はまるごと氷漬けになっていた。直後、エレクトロ・ブラッドの正面につめた黛は、栗色のボブをわらわらと逆立たせ、その氷塊にむかつて右腕を翳す。空間が歪むほどの衝撃波が拡散し、氷が粉々に粉

砕されると、もろとも肩から先をそっくり喪失したグレゴリウスが、板を倒すように崩れた。

「……やったか？」天草が鋭く目を細める。

「うん……多分」アイラが肩で息をしながら応えた。

「危なかったな……」と、エイジは額を拭いながら言った。「腕が振り下ろされようとしたときは、もう駄目かと思った」

「ああ……二セチチのファインプレーだ」と、天草は高島をふりかえる。

「そつ、そのうち、めつ、名誉毀損で訴えるからね！」高島は興奮が醒めないのか、妙なテンションで言った。

その傍で、黛は腰が抜けたように座り込んでいた。大友がしゃがみこんで声をかけると、黛は泣き出して大友に抱きついた。大友は困惑したように血で汚れた手もちあげていたが、やがて手首でかの女の背中を包み込んだ。

黛が落ち着いてくると、大友はかの女から離れて立ち上がり、瀕死の高僧を見下ろした。グレゴリウスの薄目には、まだ赤い輝きが残っている。

「……覚悟はいいか？」

大友が問いかけると、グレゴリウスは瞼をひらいて大友を見上げ、「それは、貴様が自身に問うべきことだ……」

「……」

大友がゆっくりと振りあげた右腕のまわりに、緩やかな気流が起こり始めたとき、広間の瓦礫のむこうから、人声が朗々と響いてきた。

「——僕は君が猊下を殺害することを断じて認めない」

フロアの暗がりから、白い影が近づいてくる。エイジは少し経って、それが麻のような布を頭から被った神崎だとわかった。

「なんだその格好は」天草は不快感を露骨に言った。「つか、なんでおまえがここにいるのよ？」

「天草は黙っていてくれないか」

神崎は言下に返し、

「正直に答えるんだ。君は、かつて大友が制御することに成功したドッペルゲンガー——？スピリット？だね？」

大友は答えず、ただ嶮しい目付きで神崎を見つめていた。

「そして、君は大友の意を受けて、大友を殺しにきた——なぜなら、そうしなければせつかく巻き戻った時間が元にもどってしまうから」
「なんだと？　おい、どういうことだ神崎！」エイジは鋭い声を発した。

神崎はエイジに一瞥をくれると、

「まったく、君たちの愚かしさには言葉がないよ。エレクトロ・ブラッドにはドッペルゲンガーが生じないことを知らないのか。それはつまり、エレクトロ・ブラッドが本来的にドッペルゲンガーを宿す構造をもっていないからで、したがって猯下が大友に対して、ドッペルゲンガーのみを引き渡せなどと要求する訳がない。受け取ったところで使い道がないからだ。大友のなかのドッペルゲンガーを利用するためには、あくまで大友そのものがなきゃなんだ。……もう分かっただろう、伊勢崎たちが十字架のうえに見た大友こそ本物で、そこにいるのは大友のスピリットだ。君たちもドッペルゲンガーを制御したなら、スピリットがどういうものか、わかるはずだ」

「……ねえ、それって本当なの？」

黨が大友と神崎を交互に見つめる。神崎はそれを無視するように歩き続けながら、

「大友は君たちが死んだことを自分の責任だと勘違いしている。その見当違いの後悔と罪悪感が、大友のうちに強力なドッペルゲンガーを生じた。そして、大友にそれを乗り越える意思がない、つまり生きる意志がないと気づいた猯下は、大友に次の取引をもちかけた。大友自身が私のなかに取り込まれてちからの源泉になることを甘んじるならば、ドッペルゲンガーの力をつかって時間を巻き戻してやる、と。大友は最初、断った。なぜなら、後悔のエネルギーによって時間を巻き戻すことができたとしても、その根本となる後悔が、

ときの経過や、猯下のなかに取り込まれることによって進行する自意識の喪失とともに失われていけば、時間は結局、元にもどってしまふ。つまり、天草たちを生き返らせても一時的のことにしかならない。その懸念を大友は訴えた。それに猯下はこう答えた。自分が大友の力を必要とするのは、政敵を滅ぼすためである。首尾よくことが運んだら、おまえを殺害しよう。後悔の念を喪失して儀式の執り行われた時点まで時間が進行してしまう可能性を取り除いてしまえば、時間は、巻き戻された状態で永遠に安定する。……

むろん、猯下に約束を守るつもりなど初めからない。大友を力の器としてどこまでも利用する考えだった。大友も、そのことは分かっている。それで大友は考えを巡らせ、猯下を信用するそぶりを続けながら、儀式の直前、ひそかに自らのスピリットを召喚し、今後のことを打ち合わせた。そうしてスピリットは、大友と猯下のまえに現れ、儀式に反対する意見を滔々と述べた。スピリットは根本的に、守護する人間の生命を肯定する。自己を犠牲にして誰かを助けるような行為には与しない。催眠術をかけてもひとを自殺においやれないことはよく知られているが、理屈はそれと一緒だ。猯下はそういう性質を知っているから、スピリットが儀式に反対することを当然だと考えたし、かりにスピリットが大友から離れて活動を始めたとしても、猯下に牙を剥くことはありえないと思った。なぜなら、大友を取り込んだ猯下を殺すことは、大友を殺すことに他ならないからだ。

ところが、このスピリットは本気で大友を殺そうとしている。まったく、愚かしいことだ。大友は精神のいちばん深いところから、伊勢崎たち四人を生かそうと祈念している。切望している。妄執している。君たちへの強い気持ち、人間だれしもが持つ生存本能を超えて、スピリットの性質までを捻じ曲げてしまった。……けれども、そんなのは本来のあり方じゃない！」神崎は怒号を発した。「伊勢崎たち四人こそ死ぬべきだろう！ 伊勢崎たちは生きた当然の帰結として死んだ！ けれども大友、君は違う！ 君はこれからも

生きて、生きて、生き抜くべき人間だ！　もし君が、自分を殺しても四人を生かそうとするならば、僕は四人を殺しても君の自殺を止めてやる！　目を覚ませ！　君が後悔するのは筋違いで、まったくの無用で、このうえないナンセンスだ！」

大友は眉ひとつ動かさず、

「なあ神崎、おまえの憶測をいかにも事実みたいに並べ立てられても困るんだけどよ」

神崎は鼻を鳴らし、

「だったら、伊勢崎たちに、どう思つか訊いてみようじゃないか。みんなをミスリードしようとしているのは、果たしてどっちだろう、とね」

「大友……わりい」天草が、顔を歪めて、「だって……こいつの言ってること、丸きりデタラメとは思えねえよ……なあ、どこまでが本当の話なんだ？　……その化け物坊主を殺しちまったら、おまえ、死んじまうのか？」

大友はエイジをふりかえり、

「神崎は推測したことを言っているだけだ。分かってくれるよな？」

エイジは泣きたい気持ちに抗しかねて、目を逸らした。「……俺はおまえを信じている……けれど、おまえの言葉を疑ってもいる……もし、神崎がほんとうのことを言っているのだとすれば……俺は神崎に反対できない……大友には生きていて欲しい……それで俺が死ぬことになっても、べつにいいよ……そりゃあ怖いけれど、元から無かった命だと思えば諦めもつく……ただ……」

大友は突然、グレゴリウスにむかって拳を大きくふりあげた。――

――間一髪、その腕に、黛が飛びつく。

「お願い、やめて大友！」かの女は悲鳴をあげた。

「君たち、今を見ただろう」と、神崎は目を細めて、「大友は、話が紛糾するまえにとどめを刺そうとしたんだ。その理由は言うまでもない」

「ねえ、落ち着いて話し合おう？」高島が哀願するように呼びかけ

る。「そうすれば、みんなが納得できる答えを見つけられるかもしれない。だって、このままじゃ、誰もすっきりしないよ」

「ありえないから」大友は冷然と撥ねつけた。「この際、はっきり言うけれど、俺はみんなに殺されたってグレゴリウスを殺す。こいつは生かしておけないんだよ、絶対に」

「大友、君はちがうかたちで悲しみを処理すべきだ」神崎は切々と訴える。

「おまえになにを言われようと、考えを変えるつもりはねえ」

神崎は突然、苛立ちを抑えかねたような呻き声を発し、身体を震えさせ始める。「どうして君は分かってくれないんだろう……とても残念で……悔しい……」

仕方ない……だったら僕が……大友の死に急ぐ原因を……この世から取り除いてやる！」

「おい、テメエ、なにをする気だよ！」天草が後ずさりながら質す。神崎は天草に一瞥もくれず、かわりにアイラへ鋭い視線を送った。かれのまとう白い布は、うつすらと七彩の光を帯びて、突風に煽られたようにはためいている。

「……アイラ、僕は無関係の君まで殺したくはない……けれど、君があくまで伊勢崎たちに加担するというのは、治癒能力を持つ君には真先に消えてもらうしかない……君だって、本来生きるべき大友が犠牲になるのを望みはしないだろう？……さあ、此处から立ち去るんだ……」

「大友くんが死んでしまうのはイヤ……でも、あなたがエイジを殺すつもりなんだったら、私はあなたの敵だから」

アイラが毅然と言い放つと、神崎は落胆したように仕方ないと呟いた。転瞬、かれがアイラにむかつて颯と伸べた手に、黒い靄が凝っていく。それが砲弾さながらに放たれるなり、フロアは軌道に沿って粉々に砕け、大小の破片が重力から自由になったように舞いあがる。アイラは表情を硬直させて、ただその黒い靄の迫るのを見ていた。エイジは絶叫して床を蹴り、黒い靄のまえに立ちはだかる。

そうして鉄の壁を強く念じたけれど、度重なる戦闘で蓄積した疲れがそのイメージから鮮明さを奪うのをどうすることもできなかった。黒い靄はほとんど一瞬で完全ならざる防壁を破り、エイジを包み込んだ。

身体じゅうを引き裂かれるような激痛に気が遠くなる。そうして、照度を急速に落としていく視界のなかで、ロング・コートが檻褸のように破け、腿や腹の辺りから鮮血の迸るのが見えた。半壊した台座のむこうでは、反撃に踏み切った天草が、放った紫電ごと黒い靄に飲み込まれて、紙くずのように宙を舞っている。神崎はすでにアイラにむかって第三撃を繰り出そうとしていた。そのアイラは、神崎を視界の外にやって、エイジのほうへ駆け寄ってくる。

膝をつき上から覗き込むかの女に、エイジは、

「逃げ……ろ」と、肺をふり絞って訴えるが、アイラは睫に雫をきらめ、鳶色の髪を揺すった。

「エイジ、しっかりして！ いま、癒してあげるから！」

かの女の後ろで、神崎が冷然と腕を振るう。放たれた黒い靄はフロアを抉って怒濤のごとく押し寄せてくる。その結末を見るに忍びず、エイジがかたく瞼を閉じようとしたとき、高速の影が視界をよぎった。大友だった。靄めがけて肩から当たっていったかれは、瞬間的に血だるまになって、弾き飛ばされる。そのことで黒い靄はわずかに軌道を変え、アイラの前髪を掠めて過ぎ、ずっとむこうの壁を大破して消滅した。

神崎は、口元をゆがめて、のたうちまわる大友を見下ろす。その足許に無数の鋭利な氷柱が砕けると、神崎は飛びのいて交わした。すぐに黛と高島が、大友を庇うように立ちはだかる。

「神崎、テメエ！」と、大友は絶叫する。「次、仲間に手を出してみろ！ テメエとは、一生口きいてやんねえからな！ ハツタリじやねえぞ！ テメエは俺の自殺を止めるとかなんとか抜かしてやがるが、残念だったな、俺は、そこから飛び降りて死んでやる！ ああ絶対飛び降りるね！ ちくしょう！」

「君は、どうしても伊勢崎たちのために……」

神崎は、白い蔽いの陰から暗澹としたようなかすれ声を発した。

「そうだよ、ああそうだよ！」大友は、狂ったように怒鳴り散らす。
「エイジたちが生き続けると思えば俺は笑って死ねる！ けどな、エイジたちがいつか消えてしまうと恐怖しながら生きるのだけはちよつと無理だ……耐えられねえんだよ！ そんな不安を噛み締めながら毎日を生きるくらいなら、いつそ死んじまったほうがマシだ！……なあ、おまえ、俺がどんな思いをしてエイジたちが苦しみ死んでいくのを見てきたか、分かるのか？ 俺はな、あんなの、もう二度と見たくねえんだよ！ 絶対に勘弁して欲しいんだよ！」

「そうか、分かった……」

神崎は言葉に感情の読み取りづらい抑揚をつけ、グレゴリオスのほうへ歩いていった。

「なにをする気なの？ やめて、お願いだから！」

黛が涙声をあげて神崎を追う。すると、神崎はとつぜん振り返って、「近づくな」と、黛の足許に黒い焰を叩きつけた。そうしてグレゴリオスを抱き起こし、

「猊下、大友のドッペルゲンガーを僕に引き渡してください。これは、あなたの名誉のためです」

瀕死の高僧は神崎の意図を解しかねたように首をすこし傾ける。

「猊下は白竜団の長として、晩節を汚すべきではありません。大友たちが引き下がれば、あなたは大友の仲間たちの大友を思う気持ちにすがって生き長らえたと誇られるでしょう。大友に殺されてしまえば、あなたは大友を罠に嵌めたつもりが逆手に取られ、時間を巻き戻すのにまんまと利用されたと嘲笑されるに違いありません。こうなった以上、どう転んでも、あなたが大友を内に取り込み続けることはマイナスにしかならない。……ご理解頂けますね？」

「兄弟よ、ドッペルゲンガーをおまえに委ねることが愚僧の名誉を保つ唯一の道だと言うのか？」

「……………」

グレゴリウスは穏やかに微笑んだ。

「子供騙しも大概にせよ。死にかけておるとはいえ、愚僧はそこま
で耄碌しておらぬ。だが……、よかるう。あとはおまえの好きにす
るがいい」

老人が目を閉じると、黒い長衣の胸元から、金粉を吹き散らした
ような煌めきが流れ出て、すぐ傍に凝り、裸の青年を形作った。神
崎は立ち上がって、倒れようとする青年を抱きとめると、しずかに
床に寝かせた。その体軀から、もうひとりの青年が、幽体離脱する
ように起き上がる。かれは闇然とした表情を浮かべ、ぼんやりと神
崎を見つめていた。

神崎は、青年にむかって切々と話しかける。

「……君は僕と似ている。君は人間のために良かれと思ってやった
ことで人間たちの怒りを買ひ、絶望的な状況に陥ってしまい、それ
から人間を憎悪するようになった。僕も、人間のことは心底憎んで
いるんだ。そして、君は大切な仲間たちが次々と殺されていくのを
見届けてから、胸が張り裂けるほどの悲しみを抱え続けている。僕
も、心から思っている友人が、自分を責めて鬱々と苦しんでいるの
を眺めてきたから、その辛さはわかるつもりだ。君は大友のドッペ
ルゲンガーだけど、僕のドッペルゲンガーでもある。おいで、君の
新しい居場所はここだ……」

神崎が自分の胸をひとさし指で示すと、ドッペルゲンガーは頷き、
そこへ顔を押しつけた。頭がのめり込み、上体がなかへ埋もれ、や
がて足の先までなかへ這入った。

苦しげに眉間をゆがめた神崎は、ゆっくりと立ち上がって、

「勘違いするな、これは大友のためにすることじゃない。優れた者
は生き、劣るものは死ねばいいという、僕のかねてからの哲学を貫
徹するだけの話だ。……大友、悔しいけれど君は僕より優れた人間
だ。それは認めざるを得ない。その君が、その四人のためにどう
しても死ぬと言い、また僕のなかに君がドッペルゲンガーを宿すに
至った心の土壌と共通するものがある以上、僕としてはこうするよ

り仕方ない」

大友は神崎の意図に思いあたったのか、自分で作った血だまりからとつぜん顔をもたげて怒鳴った。

「バカッ、優れてるとか劣ってるとか関係ねえだろ！ それは俺のドッペルゲンガーだ、返せ！」

絶対させねえぞ、この野郎、と大友は鮮血を曳いて這っていく。

「残念だったね、大友。この場の主導権はいま、僕が握っている。諦めるんだ。……ただ、ひとつだけ頼みがある。君が行こうとした道を、どうか間違いだったとは思わないで欲しい。例えそれが辛い道であつても、ひとが邪道だと誹る道であつても、それが自分の道なら歩いてゆくしかないんだ。……僕は君に賛成しないが、君のことは悪く思っていない。君の道には賛成しないが、その道は決して嫌いじゃない。要するに……僕は君に君らしくいて欲しいんだ」

大友がやめると絶叫する。神崎はさよならと言つて微笑し、右手にあつめた黒い靄を、——自分の胸にむかつて炸裂させた。その双眸から光が失われると、大友は突つ伏して慟哭した。

*

「自分は元々、飛行機乗りになりたかったんです——」と、操縦席の石田二等陸尉は云った。「防衛大にいた頃から、こっそり転属願を出していたんですが、なんの腐れ縁か、特殊作戦群にぶち込まれちまいましたね。やっと取得できたのがヘリの免許って訳で……」

「そうか……」

児玉は仄かに白みつつある曇り空を漠然と眺めていたが、顔を両手でこすると、なんとなしに窓から暗い海を見下ろした。艦艇があちこちにスクラップ然としたいびつな影を晒している。けれども、沈められたものも相当あったから、浮かんでいるのはまだよかった。大きな岩礁のような空母や駆逐艦の谷間に、煌々と明かりを点した海上保安庁の救助艇が、海面めがけて浮き輪を放ったり、ゴムボートを下ろしたりしている。その様は、いつか北海道で見たイカ漁を連想させた。空母の滑走路には次々と日本の救助ヘリが降り立ち、白衣のひとやタンカを吐き出している。船橋のむこうでは、エレクトロ・ブラッドのヒト型の兵器が二機、格納庫の壁に機体をのめり込ませた状態で静止していた。まわりに群がったネイビーが、それをライトで照らしている。

石田は舌打ちをし、

「あいつら、なんの罪もない八尋市民の頭上にミサイルを雨あられと撃ち込んでくれたと思うと腹が立ちますけどね……でも、全面戦争にならなくてよかった」

「ああ、そうだな……」

児玉は、同意するというより、問題を論じるのが面倒で、異を挟まなかった。実際のところ、どこがよかったものかと思っている。日本政府が最高機密として厳重に管理してきた地下施設からのハッ

キングによって、アメリカが大打撃を受け、その返礼としてアメリカが八尋島への無差別爆撃に踏み切ったという厳然たる事実を乗り越えて、両政府が手打ちをするには、すべての罪を背負うべき悪者を用意しなければならなかった。その白羽の矢を立てられたのが、エクリプス機関である。午前四時二十六分、機関の上層部はクーデターに踏み切り、市庁舎と議会、裁判所を占拠し、同五十五分に日本政府からの独立を宣言したが、それは、そうでもしてくれなければ日本政府と和解したくとも連邦議会の理解を得られないというホワイトハウスの意向があったからである。要するに、エレクトロ・ブラッドが現出するに至った経緯にも、一連のハッキング事件にも、日本政府はまったくタッチしていない、それはすべてエクリプス機関の暴走の結果である、という体裁を整えたのである。児玉に言わせれば、茶番である。けれども、そういう建前にすれば、日米の両政府はたしかに議会や世論に対して言い訳が立つのである。

その方便を取らなければ、事態を收拾することができなかったとはいえ、結果として、児玉は軍事政権の幹部のひとりとして名を連ねざるを得なくなった。これはかれにとって不愉快極まりないことだった。

今後、八尋島が、エレクトロ・ブラッドとエクリプス機関の二大悪の根拠地として世界に位置づけられることになるのが目に見えていた。その意味するところを、児玉は依然、はかりかねている。ただひとつだけ言えるのは、そのことによって苦勞が増えはしても、決して減りはないだろうということだった。長い溜息が漏れた。

「お疲れでしょう。少しお休みになつては？」

石田が気遣わしげに言うのを、児玉は首を振って応えた。

「しかし……かれらは無事でしょいかねえ」

「……………」

東京湾の朝靄のなかに廃墟じみた人工島が横たわっている。その上空には、小惑星のような巨巖が浮かんでいた。曙光を受けて藍色の空に白っぽく浮かび上がる様は壮観と云えたけれども、五人の高

校生があの中かで味わったであろう恐怖や苦しみを想うと、児玉はその景色が却って腹立たしかった。

「米軍が空挺部隊を送り込んだのはどれくらい前だった？」

「ええと……二時間ほど前です。二個大隊だと聞いてますが、確か、作戦開始から三〇分後に全滅したと……」

児玉は顔をしかめ、それから双眼鏡を覗いた。五人を降ろした台地状の地点はすぐに見つかったが、そこに五人はいなかった。

「もう少し近づけるか」

「了解」

絶壁に散在する遺跡然とした建築物が、ゆっくり迫ってくる。高校生たちの姿を求めて目を皿にしていると、

「しかし、仲間のために死地に飛び込むとは、今どき大したガキでもないですか」と、石田が言った。「なかでも、伊勢崎と言いましたっけね。気に入りましたよ。児玉一佐に要求を飲ませるとは、並のガキじゃない」

「いや、かれらは並みの子供だった。俺のすぐ後ろで、マスクを被って正義の味方ごっこをする相談をしていたよ。そんな子たちを、俺はあそこに降ろしてきた」

「一佐……」

「うえのほうを見てみたい。危険かもしれないが……頼めるか」

「もちろんです」

ヘリの爆音が絶壁に跳ね返ってフロント・ガラスを震動させる。

児玉は、降っていく無数の彫像や円柱、屋根に一々目を凝らしながら、額に手をあてて、また溜息をついた。

「どうかしましたか？」

「いや——」と、児玉は頬ひげのざらつくあたりまで手をおろし、「無理をしてもドクターヘリを手配するべきだったかもしれないと思っただけ。後悔することにならんといいが……」

壁面が前方にむかってやや傾斜するようになったと思うと、とつぜん視界が開けた。眼下にあるのは、激しい戦闘の跡を残した、石

造りの街並みだった。広場には米兵やエレクトロ・ブラッドの遺骸が散らばり、目につくかぎりのあらゆる建造物には大小の弾痕が刻まれている。無残というよりほかにない風景だった。それらに黎明の蒼いひかりがゆたかに射して、黄金の輪郭を添えている。厳寒の季節にありながら、児玉はどういう訳か、その光景にエンドロールでも見ているような暖かい感慨をもった。

へりは左右に段々を重ねて拡がる街のうえを、ゆっくりと進んでいく。やがて、天空の神が彫刻刀を縦横にふるって崖から彫りだしたかと思われる、荘厳な高層建築物が現れた。その門前の広場に、高校生たちはいた。遠目にも、満身創痍でないものは一人としてないと分かった。かれらの中央に横たわった少年は、白い衣の胸元をまっ赤に染め、腹のうえに指を組んでいる。気づくなり、児玉は唇をつよく噛んだ。けれども、児玉が降ろしていった五人はすべて無事で、二度数えなおしても欠員がないと確認できると、胸に幾重にも絡みついた鎖がすべて剥がれ落ちていくようにこころが安らいだ。もうひとり、ぼろぼろのコートを羽織り、血に染まった素足で地を踏みしめている瘦身の青年は、きつと大友に違いない。かれらは大友と一緒に生きて帰るという本懐を遂げつつあるというのに、爆音を響かせるへりがよほど迫っても、顔をあげることすらしなかった。ただ、朝日を斜に受けて不帰のひとを見つめるかれらの、往年の名優たちのようにうつくしい顔には一様に、痛々しいほど澄み切った感情が、凜然として漲っていた。

終章 - 1

追悼式は午前中に終わったけれども、体育館のステージには、依然として六十一の遺影が白菊に包まれて並んでいた。そのなかには、エイジが実際に言葉を交わしたところのある生徒もたくさんいた。これらのほとんどは、白竜団の信徒の凶弾か、アメリカの空爆か、あるいはエレクトロ・ブラッドのソート・エフェクトによって斃れた。そうでない者は倒壊した建物の下敷きになったか、火災で焼死したかである。神崎の遺影はこれに含まれていない。含めることに、大友が強く反対したのである。さもなければ、大友の言うとおり、泉下の神崎が怒りだすに違いなかった。――僕は僕の哲学に殉じたのに、どうして被害者連中と一緒にされなければならないのか。だから、エイジはこれで良かったのだと思っている。

一連の事変で失われたものは、ステージのうえばかりでなく、頭上にもあった。体育館の屋根が大きく破れ、鉄筋の梁のむこうに厚い雲が見える。そこから音もなく吹き込む雪が、飴色に光沢する床のうえにひらひらと舞い落ちた。騒動のまえだったら、ここで式典が催されることは決してなかっただろう。危ないからという理由で、改修が終わるまで嚴重に締め切られてしまったはずである。いまは市街のいたるところ瓦礫だらけで、ここより安全な場所を探すほうが難しかった。不発弾がアスファルトにめり込んでそのままになっている所さえある。その傍を歩いていると、エイジは生きていることを痛切に思った。事変のまえには決してなかった感覚だった。

エイジはこの大瓦解を、人間の周囲に偏在しているはずの渾沌が、本来どおり剥き出しになっただけという風に、一面では感じていた。そしてこれが人間にとって確たる悪夢でありながら、却って人間を悪夢から抱き上げたようなところもあるのではないだろうかと思つた。少なくとも、荒涼とした世界を見渡してこみあげてくる感慨に、そつという説明を与えるより他はなさそうだった。恐らくはそれとお

なじ理由で、エイジは折りたたみの椅子に腰をおろし遺影と破れた屋根が並存する光景を眺めていることが心地よかった。午後の授業をパスして体育館にやってきたのは、この構図の持つある種の真実味が無性に恋しくなったからだ。教室を出るとき、担当の教師には正直に、体育館を見にいつてきますと云った。教師は頷いただけで小言めいたことは口にしなかった。

開け放たれた非常口から、雪の積もり始めた校庭が見える。いちめん白銀に染まりつつあるなかで、ミサイルが着弾して抉れた大きな窪みだけが黒々としている。校庭の端には鉄棒があつて、フェンスがあつて、そのずつとむこうに、無残に朽ちた高層建築が林立していた。それらの、酷寒の雪雲にむかつて聳えたつ姿には、時間を超越したような儼かさがあつた。天草はそれを「まさに世紀末って感じ」と評した。高島は「うまく言えないけどポエジー」と表現した。黛は「こつちのほうがスタイリッシュじゃない？」と云った。

ただアイラだけが、「雪のなかのイルミネーションがどうしても見たかったのに……」と残念そうだった。神崎ならどう評するだろう。いま、物静かな気持で雪の降る八尋を眺めていられるのは、かれのお陰だった。かれは大友のためにするのではないと言って死んでいった。けれども、君には君らしくいて欲しいというかれの最後の言葉がひとつの真実をはつきりと示している。神崎とはもつとたくさんのかことをわかちあえた筈なのに、その機会が永遠に失われてしまったことを、エイジは悔しく思った。そうして口元に手をあて、自分が震えていることに気がついた。

「まったく……」エイジは呟いた。「なんつうツンデレだ……」
「まーたギャルゲーやってんのか？ いや、いいんだけどさ、アイラには内緒にしとけよ」

驚いて振り返ると、斜め後ろの席に大友が座っていた。ライダースにも髪にも、雪が散らばっている。かれは軍手でパサパサと払って、うー寒、と云った。

「おまえ、いつからいたんだよ」

「体育館のど真ん中にひとりで座ってる、その後ろ姿が、なんていうか？漢？してたぜ」

大友は席をひとつ跨いで、エイジの隣に腰をおろした。

「神崎の墓参りに行ってきた」と、かれは言った。「そしたら神崎のお母さんに鉢合わせちゃって。神崎のこと、いろいろ訊かれたよ」

「話したのか？」

大友は、一瞬だけ、辛そうな顔をした。けれどもすぐに微笑し、

「まさか。あなたの息子はよその子のために死にました、なんて話できるわけがねえ。ただ、自分がいまこうしてられるのは、神崎くんのお陰です、とだけ伝えてきた」

「そうか」

「……なあエイジ、聞いてくれるか？」

エイジは黙って親友を見つめた。かれは白い溜息をついて、それから輝く雲を見上げた。

「俺は、あのときパンデモニウムの最上階にいた、たった一人の利己主義者だった。グレゴリウスでさえ、教団と同胞のために戦っていた。それなのに、俺は徹頭徹尾、自分のことしか考えていなかった。みんなを生かしたかったのは、俺が苦しみたくなかったからだ。そんな俺のあとを、みんな命がけで追ってきてくれた。そして神崎は自分をなげうってまで、俺の目を覚まそうとしてくれた。この世界に俺ほど幸せなやつはいないと思ったよ。俺は受けるべき罰のかわりに、これでもかというほどの優しさをもらった」

「大友……」

「俺、やっぱり人間とエレクトロ・ブラッドはどこかで折り合いをつけないといけないと思うんだ。けれども、正しいことをすればみんな分かってくれるみたいな、甘い考えは捨てる。そしてもう一回、チャレンジしてみたいんだ。……なあ、エイジ。手伝ってくれねえか？」

エイジは呆れて笑いが止まらなかった。

「……そりゃあ、都合のいい話かもしれねえけどよ、俺たち親友だ

ろう？ な、頼むよ……」

「ちゃんと言つてあるだろう、『おまえに一生ついていく』って」
「そっか、そーい言ってくれたな。もう……エイジ大好き」

ごく自然に二人が友情の抱擁を交わしたとき、体育館の扉が音をたてた。入ってきたのは、生徒会長の門倉を始めとする、生徒会の面々だった。

「おっと……見てはいけないものを……」門倉は呻くように言った。
「やっぱり、そういうことだったのね！」書記を務める高島が胸のまえで手を交差させている。これはどうも驚いたときのかの女の癖らしい。

「誤解すんなよ」エイジは立ち上がった。「俺たちはそういう仲じゃねーからな」

「大丈夫、黙つててあげる」と、副会長の吉田がどことなく楽しそうに言う。「だって、伊勢崎くんが秘密にしておきたい気持ち、わかるし。大友くんのファンの子に、嫌がらせとかされたら、困るもんねえ」

「おい、大友もなにか言えって」

「ええと……これには事情がありまして……」

「なに敬語になってんだよ！ ていうか余計誤解されるような言い方やめろって！」

「それはそうでしょ。『事情』がなかったら、男の子どうして抱き合うはずないもん……」

高島の棒読みの口調に隠しきれない猜疑心を読み取ったエイジは、大友の協力が期待できそうな状況下で不毛な釈明を続けるよりはいつそ話題を変えたほうがいいと判断し、

「で、なにしに来たのよ？」

「ジャーン、これ」と、吉田が腕章を指差す。そこには、（虹ヶ丘高校クリスマス会・実行委員）と書かれていた。

門倉は腕を組み、抜けた天井を見上げて、

「たくさんのクラスや部活がクリスマス会を予定していたんだけど、

この騒ぎだろ？ 相次いで中止になっちゃってさ。でも、それって悔しいじゃん？ だから、俺たち生徒会が中心になって、合同で開催しようって提案したら、お陰さまで結構盛り上がってきて。今晚、ここでやることに決定したんだよね。で、これから、その準備」

「追悼式をやったすぐあとに、おなじ場所でクリスマスを祝うのか」

大友が大丈夫かという顔を見ると、高島はしっかりと頷いて、

「そうだよ。直後に、おなじ場所で祝うの。そのことに意味がある。わたしたちは、屈しちやいけないの」

「なるほど、な……」 エイジは胸のうちでそっと、不発弾や破れた屋根のなかに生徒会を加えた。

「そういえば、三人は映画部だったよね？ よかったら、デジカメまわしてくれないかな？ それとも、クリスマスだから忙しいか……」 吉田が遠慮がちに言う。映画部が自警団のようなことをやっているのは、今や学校の誰もが知っていた。

「ああ、そっちのほうが優先になっちゃうと思う……それに、俺たち映画部のくせにデジカメとか持ってないしさ……」 大友は首のうしろを撫でながら答えた。

「もし時間ができたら普通に参加してくれよ」と、門倉は言った。

「大友が来るのと来ないのとじゃ、女子の盛り上がりが違っだろうしな。……というか、実際どうなの？ 夜は二人っきりで過ごすの？」

「……だから！」

エイジは頭痛がしてきた。

終章 - 2

「そっか、もうクリスマスなんだね……」

黛は窓辺にほおづえをついて、宵の空のしたの体育館を眺めていた。開放されたドアのちかくに、たくさん電飾をからめた大きな樅の木があでやかに輝いている。料理や装飾を運ぶ生徒たちが、屋根つきの通路を行ったり来たりしていた。校舎のスピーカーからデイズニーのクリスマスソングが流れて、シーズンならではの雰囲気を感じている。

「すっかり忘れてたな」天草は並んで見下ろし、「いま、どこもそれどころじゃねえからな。うちの隣の八百屋の旦那が店をデコつてたら、そんな暇があるんなら屋根直してくれて、奥さんにすげー剣幕で怒られた、なんつー話をお袋から聞かされたりするしよ。……でも、まあ、アリなんじゃねーの？」

「それ、うちの話ままだよ」と、机に腰掛ける大友がおかしそうに笑った。「どこのオヤジも似たようなこと考えるんだな」

アイラが、部の活動日報を教卓に広げて、「……ねえ、みんな、そろそろいい案は思いついた？」

「考えちゃいるんだけど……」

エイジは頭を掻きながら言った。フィルム自主制作のことである。

「こうなったら伊勢崎に昼メロ調の脚本でも書いてもらってさ、黛主演のお色気たっぷりやつを、ぱぱあーっと撮っちゃおうぜ」

天草が投げやりに言う、

「だからやだって」黛は即、答えた。「だいたい、なんであたしなのよ」

「だって高島はニセチチだし、アイラを主演にしたら俺たち児童ポルノ規制法違反で捕まっちゃうだろ」

「それ以前に、お色気なんか撮って持っていたら児玉先生ブチ切

れるぞ」とエイジ。

全員が黙り込む。遠くクリスマス・ソングが聞こえる。その静けさを破るように、部室のドアが開いた。

「どう、話は進んでる？」と、高島が入ってきて、日報を覗き込む。「生徒会の方はいいいのか」と大友が訪ねると、

「うん、いちおう飾りつけも終わったし。……ええつと、みちる主演でメロドラマ撮るの？　じゃあ、わたし意地悪な継母役やる！」

「だから撮らないって……」黛は疲れきったように額を手で支えた。大友は机のうえにあぐらをかいて、「ガチで困ったな。……エイジ、なんか案ない？」

「……ドキュメンタリーとか、オツケーのかな。というのは、俺さ、この街、けっこう絵になってると思うんだ。風景だけじゃなく、人間も。それを、そのまま撮ってならべるだけでも、そこそこ観れるものになるような気がする」

「なるほど、その発想はなかった」と天草。

「パフォーマンス的な映像も、主張もいらない。ただありのままを撮る。それを観たやつ一人ひとりが八尋市に起こったことの意味を考えればいい。……なんつうか、大衆って、原油にまみれた野鳥の映像を見せられただけで、正義に燃え立ったりしてしまうだろ？

ペラいっちゃペラいんだけど、野鳥を想う気持ちそのものは本当だと思うんだ。良くも悪くも、それが人間なんじゃねえのかなって。

その人間にむかって、俺はいちばん誠実なかたちでメッセージを送りたい。で、思いついたのがドキュメント。……うまく言えないけどさ、俺たちせっかく映画部をやってるんだし、？時代を象徴する作品？ってヤツにチャレンジしてみたいじゃん？」

「それだ」と、大友は指を鳴らす。

「ドキュメンタリーを作るのなら、わたし、今日のクリスマス会は絶対に撮っておきたい」と、高島が言った。「不謹慎に思うひともいるかもしれないけれど、でも、わたしたちがここで確かに生きているんだっていう事実を、こんなにはつきりと伝えることのできる

シーンはないと思うから……」

「素敵な考えだけど、デジカメ……」とアイラ。

「しゃーねえ、とりあえず携帯に収めとくか」天草が懐から自分のを取り出して、「画質がちょっとアレなんだけど、一応撮れる」

「いや、それには及ばん」

声と前後して、部室のドアが開き、児玉が入ってきた。そうして手に提げた紙袋を机のうえに載せる。

児玉は事変後、軍事政権の幹部のひとりとなったが、庁舎の上層でふんぞり返っているのが性にあわないらしく、それなら教鞭でも執っていたほうがよほど有意義だとばかりに、虹ヶ丘の一年生に現国を教え続けている。職員室では、政権幹部の児玉とは別人だと思われるらしい。

その児玉は、

「先生方から、映画部にクリスマス会の模様を撮影してほしいというオファーがあつたから、デジカメを買ってきた」と云った。

天草は袋から箱を取り出し、「おおー結構いいヤツじゃないスカ。高かったんじゃないスカ？」

「この程度の経費を落とすくらい、なんでもない」と、児玉は冗談とも自嘲ともつかない口調で答えた。

「先生、ありがとうございます。開けてもいいですか？」高島が尋ねると、

「もちろん。それから、今日はもう部室をしめていい。撮影がてら、クリスマス会を楽しんできたらどうだ。彼氏彼女がいるなら、それと一緒に過ごすもよし。活動日報は預かっていくぞ。じゃ、また明日」

廊下に出た児玉の足音が遠くなると、天草が、

「後ろ姿が、迷彩服を着てるときとは、なんかこう、違うんだよなあ……」不思議そうに呟いた。

数多のキャンドル・ライトが、薄闇に蔽われた体育館のいちめに瞬く様は、まるで銀河を敷物にしたような趣があった。ステージの上には、たむけの花の代わりとばかりに、色とりどりのコップがたくさん寄せられて、幻想的な光を放っている。

蝋の燃える懐かしい匂いが、黙祷を捧げる高校生たちのあいだに立ち込める。それが、破れた硝子から吹き込んだ冷たい風に払われ、焰がいつせいに揺らめいた。そうしてどこからか、バニラ・エッセンスの甘い薫りが漂ってくる。

しわぶきはおろか、身じろぎひとつするものがない。デジカメをまわしながら、エイジはそこに、クリスマス会に集まった生徒たちの心の誓いを見たような気がした。静けさの支配する薄明かりのなか、たったひとり目をひらくエイジは、たしかにここに在るかれらの真実が、ゼロと一とで成り立つデジタルのデータのなかにうまく落とし込めていればいいかと、痛切に思った。

風の音に紛れて、ヴァイオリンの弦が細く鳴っている。その囁り泣きは、小石が澄んだ湖に波紋をひろげるようにして、少しずつ大きくなくなっていった。声は女子のものばかりではなかった。

ほとんど全員が全員、数分前までクリスマス気分をはつきりと顯し、開催を待ちかねたようにはしゃいでいたのである。気まぐれと言えばそうかもしれないけれど、エイジには、ただ喪に沈んでいるのが正しいことだとも思われず、その落差を軽蔑する気になれなかった。かれらは悲しみから顔をそむけているのでも、無理して明るく振舞おうとしているのでもない。ただ、自分らしくあるうとしているだけだった。その帰結に過ぎない。

黙祷が終わり、体育館の天井に煌々とライトが灯っても、嗚咽はたくさん残っていた。女子が額を寄せて慰めあっている。ジャージ姿の運動部の面々は、ステージのまえで吼えるように泣く男子を中心にして、じっと遺影を見上げている。——その傍を、実行委員のひとたちが、皿にクリスマス・ケーキを切り分け、カクテルグラスにノンアルコールのシャンパンを注ぎ、遺影のまえに並べてゆく。

エイジたちにも、シャンパンを満たした紙コップが回ってきた。そうして会長の仕切りで乾杯が交わされると、歓声が体育館に充ちた。カメラを転じれば、テーブルを挟んだむこうで紙コップを掲げる生徒の頬に、涙の痕が残っている。かれ以外にも、炭酸や生クリームの甘みのなかに、仄かな塩味を舐める者が、たくさんいるに違いなかったけれども、あくまでイブの宵を祝うかれらの澆刺とした声は、体育館の破れた天井を抜けて、どこまでも拡散していくようだった。映画部も、会場の隅でささやかな乾杯をした。それからすぐ、大友は女子たちに囲まれて、つれていかれてしまった。天草は食いだめするしかないだろうの予告どおり、鳥もやマツシュ・ポテトの皿に群がる連中のひとりとなった。高島はもとより実行委員として駆けずりまわらざるを得ない。盛り上がる会場をただフレームにおさめていると、黛に、「あたしにも撮らせて！」とデジカメをねだられた。会場よりはクラスの友達を撮影するつもりのようなだけれど、エイジは大人しく明け渡し、アイラと肩をならべて水飲み場に降りた。

校庭に積もった雪がほの白くひかっている。かなたの、廃墟じみた高層建築の黒い影が屹立するうえには、闇夜に彫金したような下弦の月が浮かんでいた。その反照を受けて、卵形の輪郭を上空に漂わせているのはパンデモニウムである。エイジはそれらに背を向けてしゃがみ、水道の台にもたれた。

体育館の窓から眩しいくらいに明かりが漏れてくる。アイラはそれを背景にしていたから、影画のようになって、表情がよく見えなかった。アイラは並んでしゃがもうとするのでもなく、言葉を発するのでもなく、ただ、黙ってエイジを見下ろしていた。

「もしかして……怒ってる？」

尋ねると、アイラは髪をさらさらと振って、

「ちがうの、聞きたいことがあるの。お願い、正直に答えて。……ええっと、なんていえばいいのかな。……大友さんと、友情を越えて仲良くなってしまうって思ったこと、ある？」

エイジは苦笑いして、

「高島から聞いたんだな？ あの子、そういう感情じゃないから」

「それは分かってる。でも、これからが心配なの。なにかの拍子に、キyunときちゃうことだってあるかもしれないじゃない」

「それはないって」

「だって、……誰もいない体育館で、ふたりは抱き合っていたんでしょ」

エイジは溜息をついて、「アイラ、頼むよ……」

「大友くん、ずるい……」

「えっ」

「私、まだエイジに抱きしめてもらってないよ……」

「抱きしめて欲しいのか」

アイラの影は、こくつと頷いた。

「だったら最初からそう言えよ」エイジは立ち上がって、両手を広げた。そうして胸元にアイラがゆっくりと頬をあてると、柔らかに包み込んだ。

「……ねえ」

「ん」

「私、クラスの友達にね、伊勢崎くんとどういう仲なのって訊かれたの。これから、そういうときは、『付き合ってる』って答えてもいい？」

「アイラさえよければ。俺は誰にそう思われたってすこしも困らないし」

かの女はエイジの背中に手をまわした。

エイジは屈む。アイラは爪先立ちになる。ふたりが、どちらからともなく顔を近づけて、唇を重ねようとしたとき、体育館のなかから硝子の碎けるような音と、悲鳴が相次いであがった。するとアイラが恥ずかしさをごまかすように後ろを見た。

エイジは小さく舌打ちをして、

「こういう晩だけは出てこなくてもいいのによ……」

それから、一様に怯えた表情を浮かべて逃げてくる生徒たちを掻き分けながら、体育館へ這入っていくと、黒い皮膚の化け物——エレクトロ・ブラッドが、破れた天井から次々と降ってきた。

がらんとしてしまった体育館には、いまや数体の異形と、映画部のメンバーだけが残っている。

「てめえら……」エイジは可能なかぎり穏やかに言った。「今日はツイてたな。俺たち人間様はいま、キリスト生誕際に興じていてな、この日ばかりはあんまりくだらねえことはしねえ決まりになってんだ。大人しく立ち去るつつうんなら、見逃してやつてもいいぞ……」

「ハ？ 人間ごときが寝ぼけたこと言ってんじゃネエ。おまえら皆殺しに……」

先頭のエレクトロ・ブラッドが更になにか言いかけたとき、エイジの掌に熾った焰が爆発するように膨張し、燃えさかる龍となって体育館を暴走した。……

*

児玉は職員室が俄かに慌しくなったことに気づいて採点中の解答用紙から顔をあげた。青褪めた若い英語教師を捕まえて、なにかあったのかと尋ねると、体育館にエレクトロ・ブラッドが数体、乱入したということだった。児玉はスチール・デスクの引出からシヨルダー・ホルスターを掴み取り、立ち上がったが、ちょうどそのときジャージの体育教師が職員室に入ってきて、すでに映画部のメンバーが侵入者たちを全滅させたことを報せた。負傷者はひとりもなく、そのままクリスマス・パーティーは続けられているという。児玉はホッと息をついて、拳銃を引出に放り込んだ。

期末テストの採点に目処がついたところで、映画部の活動日報を開く。二十三日のページを開くと、

敵影見ユトノ報二接シ、部員一同八直チニ出撃、之ヲ撃滅セン

トス

今宵月影明澄ナレドモ朔風強シ
であります！

角の鋭いしつかりした字は、伊勢崎のものだろうか。書き加えられた女性らしい平仮名は高島の筆跡に違いない。ページの右下にコマ送りの漫画を描いたのはきっと天草だろう。児玉は苦笑いを浮かべて、日報にシャチハタをついた。

終章・2（後書き）

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7536v/>

今宵月影明澄ナリ

2011年10月4日21時15分発行